
friend and world!!

日本娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f r i e n d a n d w o r l d ! !

【Nコード】

N 0 3 4 1 T

【作者名】

日本娘

【あらすじ】

世界を救う人間としてヘタリアの世界に呼ばれたバカでアホな仲良し四人組は同じく世界を救うことができる枢軸・連合の八人と命を狙われながらも平和？な日々を楽しく過ごして行くのだった……

更新が遅い＆駄文＆小説書く才能がまったくと言っていいほどない作者が書いています。

どうか生暖かい目で見て下さい……

ちなみに主人公四人組はバカですw

主人公達の設定（前書き）

二次元大好き少女、黒須ほのかが大好きな友達を道連れにヘタリアの世界に行っちゃおうお話の設定です

作者は夢小説と二次創作の区別がわかりません。
誰か教えてもください；

これって夢小説ですか？

主人公達の設定

はじめましてりやきバーガー！

この小説の主人公その1の黒須ほのかです！
イエイ

まあこの小説の語り？は基本私です！

じゃあこの小説の主人公達を紹介するねー

主人公達

・黒須ほのか

まあ、さっきも言った通り主人公その1っす。12月15日生まれのB型です

大好きなのは二次元と後で出てくる私の友達三人とお餅です。

性格はバカですね、ハイ。夢見がちの

作者によると誰にでも優しい癒されるキャラらしいです。照れるじやまいかw

あと人見知りします シヤイなんだよ私は
姿はメガネをかけていて肩につくくらいの髪を下の方で一つ結びに
してやす！

身長は155cmくらい？

あ、ちなみに年齢は秘密でさあ まあ設定としては中学二年生かな
これで私の説明は終わりです！

次は私の親友！主人公その2でさいほのこと齋藤ほのかに説明して
もらうよ！

はじめまして、

齋藤ほのかです。

さっきまで説明してたバカと名前が同じなのは偶然です。

・ 齋藤ほのか

主人公その2です。 3月18日生まれのO型です。 ニックネームは
さいほのです。 好きなのはミス ルです。

性格は真面目です。 たまに壊れます。 作者によると真面目なんだけ
どみんなを笑わせる事が好きで少々ツンデレらしいです。 作者殴り
てー

姿はきれいに整ったショートヘアーで前髪をピンでとめてます。

身長は155cmくらい。 黒須と同じくらい

設定としては中二です

これで説明は終わりです

つぎは主人公その3のなつじだ。

はじめましてー！

なつじこと中島菜摘です！主人公その3です！

・中島菜摘

主人公その3です！

7月1日生まれのB型です！！

大好きなものは二次元とみかんゼリー！

ニツクネームはなつじ！

性格は作者いわく普段は優しいがたまにドSになる……………そんなこ

とないよ？あとで作者殴るか

姿はメガネかけてて下の方で二つ結び！

身長は……………うん……………聞かないで…………

設定では中二だよ！

説明は終わりです！

次はキング・オブ・バカの主人公その4、苑子だよ！！

はじめまして！

藪崎苑子です！

主人公4だっぺ！

・薮崎苑子

主人公その4だっぺ！

12月13日生まれのO型！

大好きなのは二次元となつじと桃ゼリー！

性格はなつじが言ってたようにキング・オブ・バカだよ！あと天然

？作者いわくこんななのに実は腹黒いだって！そうなんだぁー…？

姿はメガネに短い髪を下の方で一つ結び！前髪はない！

身長は157cmくらい？なんかよく黒須と双子みたいっていわれ

ます。そんなに似てるかな？

中二って設定！

これで全員の説明は終わり！

本編はまた今度！

それではっ！

さよーならーっ！（四人）

主人公達の設定（後書き）

..... こんな感じでやっていきます

グダグダだけでもよろしくお願いします！

感想出来たらお願いします人（´、*）

その1 四人の日常（前書き）

私は願っている

四人で一緒に行くことを……

byほのか

この話では主人公たちとヘタリアキャラはまだ出会いません

ちなみにいつどうやって出会わせるかまだ考えてません……；

その1 四人の日常

はじめまして！

あれ？こんにちはかな…

いやでも設定を読まないで見てる人もたぶんいるだろうし……

まあいいや

改めましてこんにちは！

黒須ほのかです！

この春、中学二年生になりました

あ、みなさんに言っとくことがあります

私、二次元大好きです。

まあわかりやすく言うとアニメ大好きってことです

二次元行きたいって毎日思ってます

毎日お願いしてるんですよ？

「二次元に行かせてください」って……

あ、今みんなひいたでしょ？ひいたよね？

完全に私をイタイ人って認識しちゃったよね？

私はO・T A・K U っていう奴らの仲間じゃないよ？

え？なんでオタクをローマ字にしたかって

決まってるじゃないか

カッコイイからだ

え？あんまりかつこよくねーよだって？

細かいこと気にしてたら将来死ぬよ？

あ、いずれ死ぬか

まあそれより私は日々二次元に行きたいと願ってるわけですよ

ん？いつからそんなことやってるのかだって？

ひーふーみー……三年前くらいかな？

そんなに願ってても二次元に行けてないんだからもうあきらめたら
って思ってる人、挙手！

はい、今手を挙げた奴

呪うよ？

信じていれば絶対願いは叶う！！はず！！

まあこんな私ですが、受け入れられる心の優しい方は本編を読んで
ください！

え？今まで本編じゃなかったのかって？

何言ってるんだよ

本編じゃないに決まってるじゃないか

てことで本編へレッツゴー！！

ほのか「おっはよー！！」

さいほの「おはよう。朝からウザいテンションだな」

今は7時40分。私達は毎日、私の家でこの時間に待ち合わせをして学校に行く。

いきなり毒を吐いたのは私の親友、さいほのこと齋藤ほのか。いつもは真面目だけどたまに壊れます。気をつけた方がいいよ

ほのか「あとは苑子となつじだね」

さいほの「うむ」

.....

.....

来ねええええ！！！！

ほのか「..... 来ないね」

さいほの「藪崎が事故ったんじゃない？」

ほのか「いやなつじが川に落下したのかも」

さいほの「いやいや二人ともトラックにひかれて即死したんじゃない？」

私とさいほのがとんでもないことを予想していると、向こうの橋から二人がのろのろと歩いてることに気付いた

二人が来たのを確認して私とさいほのは先に話をしながら歩き始めた

昨日のテレビの話、今日の授業の話、ミスルの話。

こんな中学生の普通の女の子が話している平和な空間はあるキング・オブ・バカによって破壊される……

苑子「くつろすー！！」

ほのか「ぐほっ！！」

朝からうるさすぎる声と共に背中に痛みと重みを感じる

なつじ「チャオー」

さいほの「おー」

ほのか「苑子！！毎朝のようにハンパない力で私を押すのはやめろって昨日言っただっかじゃん！！痛いんだよ！？吐きそうになるんだよ！？」

苑子「えー、昨日言われたから今日はのしかかったんだよ？」

ほのか「そういう問題じゃねーんだよ」

この二人は私の友達。

私に飛び掛かってきたのは薮崎苑子。

一言で言うところキング・オブ・バカ。

もう一人ののほほんとした奴はなつじこと中島菜摘。毒舌で背が小

さい

……… なんかなつじからめちゃくちゃ睨まれてる気がするけど背が小さいのは本当だから私は気にしません

さいほの「早く行こう。黒須、今日私達の班が日直だよ」

ほのか「あ、忘れてた」

苑子「日直ちよくちよくー」

なつじ「うるさいよ?」

～学校～

ちなみに私とさいほのは二組。なつじと苑子は四組。

一年生のころは全員三組で同じクラスだったのに、離れました

学校の先生が憎いです

ほのか「さいほの学級日誌取りに行こう」

さいほの「一人で行けバカ」

ほのか「おめーも日直だろーが」

苑子「私達も行くつぺー!!」

なつじ「眠い」

苑子となつじは三分前にわかれたばっかなのにいつの間に制服からジャージに着替え、二組のドアの前にいた。

ほのか「着替えんの早っ!!」

なつじ「ついでに音楽の教科書貸してくんない?忘れちゃった」

苑子「わっちは英語の教科書〜!!」

ほのか「忘れんなよ。成績下がるよ?あと今日英語の授業ないから持ってないよ。はい、音楽の教科書」

私はなつじに音楽の教科書を渡した

なつじはサンキューって言って笑った

さいほの「あ、私英語の教科書持つてるよ。はい」

苑子「おー!!さいほの神!!」

ほのか「早く行こー」

苑子「あとでトマト見に行つていい?」

さいほの「おー」

私達二年生は技術の授業でトマトを育てている

私とさいほのトマトは順調に育っている。ちゃんと水とあげてるし、愛情もそそいでるからね

しかし苑子となつじのはなぜか瀕死状態

瀕死状態にも関わらず苑子はトマトの世話を一生懸命やっている
そんなにトマトが食べたいか

なんだかんだで学級日誌を取りに行き、トマトの様子を見に行った

なつじ「親分、元気？」

ほのか「ううん、なつじがうざくてうざくて仕方がないから元気じゃないんだ（裏声）」

さいほの「消え失せてしまえ」（裏声）

なつじ「いつペン死ぬか？」

苑子「黒須とさいほのトマト元気だね」

ほのか「私のトマトの名前、アントーニョだよ」

さいほの「また意味不な名前を」

さっき言った通り私は二次元が大好き、

その中でもヘタリアが大好きなのです。

苑子となつじもヘタリア好き。

さいほのは二次元に興味はないみたいだけど私達がヘタリアの話を
してばっかだから登場人物の名前は少し覚えていいるらしい

まあ、私達四人はこんな感じでいつも過ごしている

こんな個性的な私の友達だけど

私はこの三人が大好き

ずっと一緒にいたい

四人で楽しく生きていきたい

だから私は毎日願っている

もし私が二次元の世界に行けるのなら

『私とさいほの、苑子、なつじの四人で行きたい』

と……

そのころ世界会議場……

アメリカ「日本、本当にやるのかい？」

日本「はい、私達はこの計画を実行しないと大変なことになります」

イタリア「ヴェー……何の話？」

ドイツ「前から会議で話していただろう！」

イギリス「今、世界は危機をむかえている。」

フランス「どんなことになるのかわからないけどやるしかないんだ
よなあ」

ロシア「それでその計画はいつ実行するの？」

日本「今日ですよ？」

全員「今日っ！！！！？」

中国「いきなりすぎるある！心の準備ができてないある！」

日本「じゃ始めます」

中国「無視すんなある！」

日本「それでは実行します」

異世界から世界を救う人間を呼び出す計画を……………

その1 四人の日常（後書き）

なんなんだこのグダグダ感

感想お願いします！

その2 日常から非日常に（前書き）

ひざまづけw

b y ほか

第2話です！

楽しく読んでいただけるとうれしいです！

その2 日常から非日常に

こんにちは、ほのかです。

やっと6時間目の授業が終わりました

今は掃除の時間

私の担当は教室前の流し

あいかわらずきたねえ

なつじ「黒須、はかどってる？」

ちつ、うるさい奴らが来ちまった

苑子「流しとか地味な掃除だよねw」

ほのか「トイレ掃除の君達に言われたかないね」

私は苑子となつじと話しながら流しをスポンジでこする

………汚れが落ちん……

なつじ「黒須、雑巾ゆすいでー」

ほか「自分でやりたまえ」

なつじ「ケチー」

苑子「なつじ行こう」

なつじ「うむ。じゃーね黒須っ！！私達はおっても目立つ掃除を
してくるよっ」

どこがだ

なんか疲れたな……

ここの掃除あきたし……

だってひたすらスポンジで絶対に綺麗にならない汚い流しを磨いて
るだけだよ？

早く掃除終われー

キンコーンカーンコーン

よし終わった

さあ帰……れないじゃん

部活あるし

帰宅部になりてー

そして今帰りの会

前から思ってたんだけど帰りの会ってやる意味あんのかな？

くだらないから図書室で借りた本読んでよ

あ、なんかよくわからないけど帰りの会終わった

私は帰りの挨拶をしてから後ろの席のさいほを見る

ほのか「さいほの部活行こー」

さいほの「うん」

私とさいほのは荷物を持って教室を出た

ほ・さ「こーんにーちはー」

私とさいほのは音楽室へ入った

音楽室に入ってる時点でわかると思うけど、私達は吹奏楽部。

入った理由は私の三つ上のウザい姉が吹奏楽だったため、何回か演奏会を見に行っていて素敵だと思ったからだ

いかにも普通の人が吹奏楽に入る理由の一つだ

なつじ「こんにちはー」

あ、なつじだ

え？なんでなつじだけだって？苑子はどうしたって？

説明しよう

私達四人は去年の4月に吹奏楽に入った

しかし入部してから約二ヶ月後……

苑子は退部したのさっ

バカだろ

普通中学生って休みの日も部活に行ってて忙しい

しかしあいつは帰宅部

一日中家に閉じこもりパソコン三昧

自分で言っていたが休日は一步も外に出ないそうだ

だから夏休みは大変。

世間から見たら引きこもりだ

だってあれだよ？

去年の8月の上旬に苑子を含む友達と遊園地に言ったら、苑子は驚きの言葉を発した

「家出るの久しぶりだわーw」

私がこの言葉を理解するのにどれだけかかったことか

私達は忙しいのに暇&めちやくちや暑い外に出てないだあ？

観覧車から突き落とそうかと思ったわ

宣言しよう

数崎苑子は将来二トになる

私の予想はきつと外れないだろう

まあそんなこんなで部活について

この前、新しく一年生を迎え人数が増えて音楽室が狭くなってるんじゃないかと日頃感じる私だが、吹奏楽の一員だから担当の楽器くらいあるさ

当ててごらん？

チューバ？はずれ！

クラリネット？違う

トランペット？朝ドラの主人公じゃあるまいし

一人寂しく手拍子？殺すぞ貴様

聞いて驚くなよ

フルートだ！！

あれ？もしかしてみんな驚いちゃってる感じ？驚くなゆーたやん

確かにバカでメガネでブスでアホでオタ（ry

だけど私はフルートだ

そしてたまにピッコロだ

さいほのはファゴットっていう長くて大きい低音の木管楽器

なつじはパーカッション

さーて練習しよーっと

あ、あそこでなつじとさいほのが話してる

私も入れてー！！

練習する気まったく無し

なつじ「よう黒須。どーした？」

ほのか「暇だったからさ 何話してんの？」

さいほの「今度四人で出掛けようって話をしてたんだ」

ほのか「いーねーっ！！私アニメイトに行きたい」

なつじ「賛成」

さいほの「反対」

ほのか「なんでなんでー？ケチウイ」

さいほの「つまないもん。お前らはヘタリアのグッズを見て気持ち悪い笑みを浮かべてるし、なんか来てる人みんなオタクだし」

ほ・な「だってアニメイトだもん」

さいほの「……………」

その時、私達三人の足元に光る魔法陣が浮かび上がった

なつじ「？何これ」

さいほの「きもっ」

ほのか「うわあっ！なんか光が増えていくようっ！」

うそマジ何これ

やだやだやだまだ死にたくない
パニック状態

さいほの「落ち着け黒ちゃん！」

ほのか「黒ちゃんゆーなああああつー！ぶっ殺すぞ！」

なつじ「はっはーん、殺してみやがれ」

ほのか「……………（無言でなつじの手をめちゃくちゃ強く握る）」

なつじ「痛い痛い痛い痛い痛い！！！」

ウケるーw

さいほの「ふざけてる場合じゃないだろうー！！ってあれ？」

気付いたら光はおさまり魔法陣は消えていた

風景はさっきと同じ音楽室

ほのか「……………なんだあ、二次元行けると思ったのにい」

なつじ「めちゃくちゃパニックってたけどな」

なつじは涙目だ

そんなに痛かったかなあ？

もう一回やってみよう

なつじ「いだだだだだだだだだだ！！！」

さいほの「やめれ」

ほのか「チッ」

私はフルートを持って練習をしに行った

あ、もう6時だ

楽器片付けよう

お腹空いた…………

今日の給食くそまずかったし

部活の反省会が終わり、私達三人は音楽室を出た

なつじ「あ」

ほのか「どーしたのスパードS少女」

なつじ「んだとゴラ。教室にノート忘れちゃった。一緒に取りに行こう」

さいほの「一人で行けハイパードS少女」

なつじ「なんでランクアップしてんの？一人はやだよー！！真っ暗だもん！」

今は5月だが6時だから学校は真っ暗だ

仕方ないついていってやろう

そのかわり……

ほのか「ひざまづけ」

なつじ「誰がするかバカタレ」

私達は今、四組の教室のドアの前に立っている

さいほの「……………早くドア開けるよ」

なつじ「やだ」

ほのか「じゃあひざまづけ」

なつじ「お前はだまってる」

さいほの「ちっ…………仕方ねーな……………」

さいほのはドアを開けた

そこにいたのは……

ほのか「ぎゃあああああつ!! 幽霊いいいいつ!!」

なつじ「ひいいいいつ!! こっち来んなあああ!!」

さいほの「悪霊退散」

さいほの、なんでそんなに冷静なの

足はめっちゃ震えてるけど

うわっ!! 幽霊こっち来た!!

さいほの「うわあああああつ!! 来るなあああああつ!!」

あ、さいほのぶっ壊れた

ガタンッ、ズテッ

ほのか「あ……」

幽霊こけたあ……

ダセエ……

なつじ「正体を現せっ!!」

なつじが教室の電気をつけた

私の足元で倒れていたのは……

さいほの「……………薮崎？」

苑子でしたw

ほのか「なんで苑子いんの」

苑子「教科書忘れたw」

さいほの「どうせお前勉強しないからよくね？」

なつじ「じゃあ久しぶりに四人で帰ろっか」

ほのか「ていうかなんで苑子制服？」

ジャージで来ればいいのに

苑子「お腹が空いたから」

なつじ「答えになってねーよ」

さいほの「あ、信号青だ。渡ろう」

なつじ「あ、待って」

苑子「じゃあね！黒須！」

ほのか「うん」

三人はこの信号で渡る。だから帰りはここで別れてる

まあ道路をはさんで向こう側にいるけど

私は真っ直ぐのびた道を走って家の門を開けた

「ただいま!!」

（世界会議場）

日本は丸くて赤いボタンを押した

モニターに映る三人の少女の足元に魔法陣が浮かぶ

アメリカ「あれ？確か四人じゃなかったかい？」

日本「別にバラバラに連れて来てもたぶん問題はないかと」

中国「あ！！日本！魔法陣消えちゃったある！！」

日本「えっ！！？」

確かに少女達の足元には魔法陣がなくなっていた

イギリス「やっぱり四人まとめてじゃなきゃダメなんじゃないか？」

日本「そのようですね……………」

ロシア「確かこの機械は五回までしか使えないんだよね」

日本「その通りです。だから失敗は四回までしかできません」

ドイツ「慎重にいこう」

イタリア「でもあの四人は世界を救うんでしょ？そしたら敵は四人を襲って来るんじゃないかなー？」

日本「まだ敵には知られていないので大丈夫です。しかし知ってしまつたら可能性は大です」

ロシア「ねーねー日本くん。上、上」

日本「はい？」

全員が上を見ると、天井に何かがはりついていた

フランス「……………敵だな」

中国「敵あるね」

イタリア「敵だねー」

……………

全員「うわああああああー！！！！？」

アメリカ「敵なんだぞ！今の話、聞かれたんじゃないかい！！？」

日本「あわわわどうしよう！！！！」

ドイツ「あ、逃げた！！」

イギリス「逃がすかあっ！！」

イギリスは敵を追ったが……

コケた

フランス「お前ダサすぎるだろ！！」

イギリス「うるせええっ！！」

全員笑いを必死にこらえている

中国「お前らのせいで逃げちゃったある！！」

日本「ああどうしょうっ！！四人に危険が……早くこちら
の世界に……しかし現在四人一緒ではないし……」

フランス「日本！！今、四人そろってるぞ！」

日本「はいっ！！？」

日本はモニターを見た。
確かに四人そろっていた。

しかし信号で別れてしまった

中国「一人………突っ走って家に帰っちゃったある………」

日本「あああああああ………!!」

ドイツ「落ち着け日本!」

イタリア「どうか四人無事でありますように………」

イタリアは心の底からそう願った

その2 日常から非日常に（後書き）

これからこの話の後書きに主人公達の細かい設定をのせようと思いますw

暇な人は見てください

主人公達の細かい設定？

↓定期テスト（勉強）の成績↓

ほのか……中くらい。でもちゃんと真面目に勉強すればいい点がとれる。一年生の一学期の中間テストで英語で100点を取ったことがあるため英語は得意科目

さいほの……上の方。でも数学がめちゃくちゃ苦手。真面目だからちゃんと勉強する。

得意科目は数学以外なら大体は……

なつじ……中くらいでほのかと同じくらい。さいほのと同様数学がめちゃくちゃ苦手。一応勉強する。

得意科目は社会

苑子……キング・オブ・バカなため中くらいの下らへん。でもがんばれば出来る子。自分ではちゃんと勉強していると言っているが、じゃあ夏休みの宿題を8月がもうすぐで終わるくらいまで手をつけないのはやめる。こっちがヒヤヒヤする。

得意科目は特に無し。

次の話でも書こうと思っています。

感想・意見がある方はじゃんじゃん書いてください

読んでくださりありがとうございました!!

その3 出来のいい姉と微妙な妹（前書き）

この人達も……苦勞してんな……

b y 枢軸 & a m p ; 連合

先程更新したものは少し手違いがあり、おかしくなっていたので治しました

これももしかしたら間違っているとありますがおもいますがよろしくです；

その3 出来のいい姉と微妙な妹

ほのか「ただいまー」

祖母「おかえりー。いつもみたいにもち食べるのかい？」

ほのか「当たり前です。じゃ出来たら呼んでください」

祖母「はいはい」

気付いた方はたぶんいないと思うが、何故か私はおばあちゃんには敬語

理由は自分でもわからない……

私は階段を駆け上がった

途中でコケて足がジンジンするががんばってのぼりきった

リビングに入ると私が関わりたくない人物ベスト3に入る嫌な奴がソファーに座っていた

「おう、ほーちゃん！！おかえりー！」

ほのか「…………お姉ちゃん…………」

ほのか「なんでお前帰ってきてんの？」

姉「テスト前だからねー 一緒にいれてうれしい？」

ほのか「近づいてくんな気持ち悪い」

この気持ち悪いのはこの前も言ったけど三歳年上の高校二年生の姉。こんなんだけど頭はよくて偏差値が私にとっては高すぎる高校に通っている

あと高校でも吹奏楽を続けている。中学ではサックスをやっていたが、今ではクラリネットをやっている。
悔しいけどうまい

しかしコイツ、中身が大変。

妄想大好きで下ネタを連発しまくる。

正直ウザい。

勉強面とかでは負けてるけど実は私の方が背がちょっと高い。ふふ

……勝った……

妄想大好きなくせに私がアニメ好きなのが気に入らないらしく、私

がヘタリアの話とかするといつも可哀相なものを見る目で見てきやがる

殴りたくなる

チクショー……………いつか追い抜いてやる……………！！

さいほの「ただいま。」

私は玄関を開けて自分の部屋に行く

スクバを置き、ミスのDVDでも見ようかとリビングへ行ったら

弟がお菓子食べながらイスマイブン見てやがった

弟「お姉ちゃんおかえりー！もぐもぐ。あのさもぐもぐ今日さもぐもぐ」

さいほの「食べるか喋るかどっちかにしろ」

弟「うん。もぐもぐもぐもぐ……」

食うんかい

そこはふつつ喋ろうよ

私の弟は小学四年生。

休日は野球をやっています。

たまにバ力過ぎてウザい

なつじ「お母さん、今日のご飯なに？」

母「カレー」

なつじ「ラッキー」

まあさつきも言ったように今日はカレーだ

ちょうどカレー食べたかったんだよねー

「菜摘ー」

「何？」

「カレーのお肉、ちょうだい？」

「あげるわけねーだろ」

「お姉ちゃん、お願い？」

「お姉ちゃんって言ってもダメ」

コイツは妹。

小学四年生

いつも菜摘とかバカとか言ってくるくせにたまにお姉ちゃんに変化する

あ、私の方が背は高いよ！？

勘違いしないでね！？

妹の方が小さいからね！？

「うるさいよ菜摘」

なつじ「大事なことだからな」

苑子「お兄ちゃんお兄ちゃん」

下兄「何？」

苑子「お金ブリーズ」

下兄「あげるかバカタレ」

このウザーい男はわっちの二人いる兄貴の下の方

中学三年生で卓球部部长

受験生のくせに勉強をまったくやろうとしない

人のこと言えない

もう一人の兄は……

上兄「ぐふふふ……」

苑子「……」

下兄「……」

どうしよう、近づきたくない

苑子「お兄ちゃん……あいつ何してんの？」

下兄「たぶん……AK 48だろうな……」

上の兄は19歳。就職してるよ？

さっきも言っただけどAK 48が大好き

……キモいよ兄ちゃん

「世界会議場」

全員「……………」

八人はモニターで四人の少女の様子を見ていた

一人は姉にからまれ、一人は弟にテレビをとられ、一人は妹と睨みあっていて、最後の一人は下の方の兄と陰に隠れて怪しく微笑んでいるもう一人の兄を可哀相な目で見ていた

全員「この人達も……………苦労してんな……………」

なぜかこの四人も自分達と同じなんじゃないかと嬉しく思ってしまう国達だったとさ

その3 出来のいい姉と微妙な妹（後書き）

主人公達の家族と家

ほのか……父、母、祖母、父の妹、姉の六人で一軒家に住んでいる
さいほの……母、弟の三人ではのかの家の近くに出来ためちやくち
やでかいマンションに住んでいる。父とは別々に暮らしている

なつじ……父、母、妹の四人で一軒家に住んでいる

苑子……母、兄二人の四人で一軒家に住んでいる。父は単身赴任で
いない。でもたまに帰ってくる

なんかあつたら言ってくださいませ!!

その4 動き出す歯車（前書き）

「ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ？」あゝあ？

b
y
苑子

今回は最初の方ちょっとシリアス

ついに運命の歯車が動き出す……………

その4 動き出す齒車

私はある夢を見た

ほのか「ぬ？ここどこ？」

私は何もない荒野に立っていた

空は曇っており雨が今にも降りそうだ。

地面には雑草しか生えておらず綺麗な花なんか一輪も咲いてない

ほのか「うつへー、何ここ？気色悪い……つか誰もいないの？おい苑子んぶー！！あれ？なんで苑子呼んだんだ？ま、いるわけないからいつか」

苑子「呼んだ？」

ほのか「苑子いたあああつ！？」

なぜに苑子いるん！？

苑子は自分から二十メートルくらい離れたところから走ってくる

苑子……走ってる時の顔がまじウケるんだけどw

やべえ、笑いこらえるの辛い……………w

私が笑いを必死にこらえて苑子の方を見た瞬間、

地面が大きく揺れた

ほのか「うわあっ！？地震！？」

苑子「黒須うー！！」

苑子は地震が起きたのにも関わらず笑顔で走っている

あの笑顔が少しムカつくのは私だけだろうか

ほのか「……………あれ？」

私はあることに気付いた

苑子の後ろに黒い何かがいる？

最初はただの苑子の腹黒いオーラだと思ったが、黒いのはだんだん
大きくなり人の形となった。

人となった黒いのは手に剣を持っていて、苑子に向かって振り下ろ

そうとしていた

ほのか「苑……………っ!!」

私は苑子の名前を呼んだ

しかし、

遅かった

剣は苑子に向かって振り下ろされ、背中をきりつけた

苑子の背中からは大量の血がふきだし苑子は崩れ落ちるようになり倒れた

ほのか「ひっ……………!!」

私は少し怖いが苑子に駆け寄る。

苑子の倒れているところは血の海となっていた

私は怖くなり、誰かいないか回りを見渡した

人がいないかと思っただがいた。

死体が

ほのか「っ……………！！」

しかも死体の顔は自分の親友の

さいほのだった

さいほの死体の近くにはまた血だらけの死体があった。

ほのか「ま……………さか……………」

私の嫌な予感悲しくも的中した

死体の顔はやはり

なつじだった

ほのか「……………はは、なんてリアルな夢なんだろうか……………こんな
シリアスな小説じゃなかったはず……………」

そうだこれは夢だ。

私は死体から離れるために荒野を走った

走って、走って、恐ろしくてたまらない気持ちをなくすために走った

ほのか「あっ……………！」

私は何かにつまづいて、地面に倒れた

体を起こし何かの違和感を感じ手を見てみた

自分の手は汚れていた。

真っ赤な血で

私は恐る恐る後ろを見た

そこにたおれていたのは、

屍と化したもう一人の自分の姿だった

ほのか「うわああああっ!!!!!!!!!!」

ほのか「うわああああっ!!?」

さいほの「ぬおっ!!?」

私は飛び起きた

近くには先程、死体として見たさいほの。

場所も荒野じゃなくて、自分は白いベッドの上にいた

ほのか「……………」

さいほの「……………」

きっ……………

気まずいよおおお!!

だってあれだよ!?

私、叫び声を上げて飛び起きたんだよ!?

漫画のワンシーンかああああ!!!?

恥ずかしいだろーがあっ!!

ほのか「……………あの…」

さいほの「なんだい、中二病」

ほのか「違エよ!!!誤解すんな!!!つか俺は今中二だああああっ!!」

さいほの「で、なんなの」

ほのか「ココハドコデスカ?」

さいほの「なんでカタコト?迷子の外国人か君は」

ほのか「で、どこ?」

さいほの「地球かな」

ほのか「真面目に答えるアホンダラ」

さいほの「保健室だよ。お前、4時間目の体育の時間に倒れたんだよ？」

ほのか「マジか」

あ、思い出した

体育で持久走をやっていて持久力がまったくない私は三周目あたりでぶっ倒れたんだった

ほのか「で、今何時？」

さいほの「昼休みだ」

ほのか「うそっ！給食は！？」

さいほの「さっき食べた」

ほのか「オーマイガッ！！」

嘘だああああ！！

今日は私が大好きな肉じゃがだったのに……！！

さいほの「……………なんで泣いてるん」

ほのか「泣いてないっ!!」

どうしてだろう、

涙がとまらない

なつじ「黒須、倒れたんだって？」

苑子「ダセエw」

なつじ「空気読もうよお前。思いやりって知ってる？」

保健室に入ってきたのはなつじと…………

ほのか「そ……………苑子……………」

さいほの「ほお、そんな夢見たんだ。だからあんな……………」

ほのか「忘れてください」

苑子「なんで私がそう簡単に殺されなあかんねん」

なつじ「一番簡単に殺されそうなお前が何言っとんねん」

私はさっきの夢を三人に話した（苑子が途中から思いっきり嫌な顔をしていたが見なかったことにしよう）

ほのか「マジで怖かったんよー……」

さ・な・そ「ふうん。」

……

ほのか「って、終わりかよっー!!」

さいほの「うん。黒須、今日4時間授業だからこれから帰りの会だよ。早く教室行こう」

ほのか「……………」

私は無言で頷き、ベッドから降りた

ほのか「うおっしゃああああ!!今日は部活なしじゃああああ!!」

さいほの「そうだな」

なつじ「黒須ー、さいほのー、一緒に帰ろー」

苑子「あと、トマト見に行こう。」

さいほの「おう」

ほのか「あ、トマトで思い出した」

なつじ「何?」

ほのか「苑子のトマトの名前は子分。さいほのはロヴィーノって名前にしたから」

さいほの「勝手に名前つけんな」

ほのか「この小説の数少ない読者からの提案だ。使わなくてどうする」

さいほの「黙れやメガネ」

ほのか「んだとこのミスチル好き」

苑子「ごちゃごちゃ言ってねーで、早く行くぞ?あゝあ?」

さ・ほ「すいません」

腹黒苑子、降臨

苑子「やあ、子分!!」

さいほの「黒須、アントニオ元気?」

ほのか「アントニオ?」

さいほの「君のトマトの名前だよ。確かアントニオじゃなかった?」

ほのか「アントーニョじゃボケ」

なつじ「うふふ……親分は元気だなあ……」

なつじはもう可哀相なことになっているトマト
親分に話しかけている

ほ・さ・そ『なつじ、ご愁傷様……』

なつじ「あ、苑子。じょうろに水いれにいく」

苑子「おう!!」

苑子はなつじの隣へ言った

『トキハキタ……………』

四人「!!!!!!」

うわっ、何今の声!!

気持ち悪っ!!

その直接、なつじと苑子の足元に大きな穴が空いた

な・そ「ぎゃああああああ……………」

さいほの「なつじいいいい!!藪崎いいいい!!」

ほのか「これは……………」

そして、私とさいほの足元にも穴が空いた

ほ・さ「ぬおわああああ……………」

私達は真っ逆さまに下へと落ちていった。

私の意識はそこで途絶えた……

く世界会議場く

八人はモニターで四人の少女が穴に落ちていくのを見ていた

日本「しまった！！敵に……………！！」

アメリカ「このままじゃ四人共殺されちゃうんだぞ！！」

フランス「世界が……………地球が終わっちゃう！！」

日本「……………大丈夫です、まだ可能性はあります……………！！」

そっという日本は真っ直ぐな眼をしていた

その4 動き出す歯車（後書き）

主人公達の体力

ほかの……本文の通り持久力がまったくないため駅伝とかめっちゃ苦手。でも短距離は速い。あと握力が結構ある。体力テストでは立ち幅飛びが一番得意。そして体がかたい

さいほの……持久力はほかよりない。でもさすがに倒れはしない。体は微妙にやわらかい。体力テストでは長座体前屈が一番得意

なつじ……見た目でわかるが握力が全然ない。微妙にやわらかい。持久力はちよつとある。長距離は割と得意なため持久走が得意

苑子……握力がハンパない……；でも運動は苦手で体育は嫌い。体力テストではやっぱり握力が得意

相変わらずの駄文で申し訳ありません……

感想、お願いします！

その5 夢は現実に？（前書き）

ここはお前の墓場だあつ！！

b y な つ じ & a m p ・ 苑 子

今回は最後らへんがめちゃくちゃシリアスw

あとカタカナが多いので読みにくいと思われますがよろしくお願いします

その5 夢は現実に？

ほのか「うー……いたた……」

私は目を覚ました

周りを見ると曇った空、雑草しかない地面、夢で見た荒れ地とまったく同じ風景だった

ほのか「えーつとお……確か変な声が聞こえた瞬間、苑子となつじが穴に落ちて私とさいほのも違う穴に落ちたんだっけ？」

私はそうだ、さいほの探そう！てな感じで荒れ地を歩きはじめた

ブニユッ

私は踏んでしまった

さいほのを

ほのか「ぎゃあああああ！！？」

やべえっ！！さいほの顔踏んじやったよ！！

さいほの近くにいたんだ！！まったく気づかなかった！！
影うすっ！！

顔踏んだくせにひどい奴

んー…なんか殴られそうだから……

逃げよう

ガシッ

ほのか「……………へ？」

後ろを見ると……………さいほのがどす黒く微笑みながら私の足をすん
ごい力で掴んでいた

さいほの「うふふ……………ほのかちゃん、お・は・よ」

ぎゃああああああ……………

何も無い荒地に少女の悲痛な叫びが響いた……

苑子「ぬ？何今の叫び声」

なつじ「苑子の心の叫び声」

苑子「わっち！？」

私は今、なつじと行動してる

なんか気付いたらここにいたんだっぺ

なつじ「お前は語りもろくにできないのか」

苑子「うまれつきだっぺ！！」

なつじ「うまれつき！？小さい頃からそんなにぺっぺっぺ使ってたの！？」

苑子「使ってないよ」

なつじ「うまれつきって言葉調べてこい」

それにしてもここどこ？

なんか黒須が言ってた夢の舞台にそっくりなよーなそっくりじやな

いよーな

なつじ「……………苑子」

苑子「何ー？」

なつじ「なんか黒いのがいる」

苑子「黒いの？黒須のこと？」

私はなつじの指さす方向を見える

ホントに黒いのがいた

ほのか「……………ひどいよさいほの」

さいほの「当たり前のことやっただけじゃ」

私はあの後、さいほのに……………ぎゃあああ！ー！思い出したただけでも恐ろしいー！

さいほの「そんなことより黒須くん」

ほのか「私にとってはそんなことで済むことじゃないんだよさいほのくん」

さいほの「あそこに黒いのがいるの、どう思うっ？」

ほのか「なっじ？」

私はきよろきよると周りを見渡してみる

確かにいた。黒いのが

ほのか「さいほの、あんなの見ちゃいけません！」

さいほの「どこのお母さんだ君は。でもあいつ、こっちに向かってくるよ」

ほのか「へ？」

私は黒いを見る。

うわぁっ！――さっきより十メートルくらい進んでる！歩くのはやっ！！

あと黒いのが人の形をしているのがだんだん見えてくる

あー……………うん

ほのか「怖あああああつ！！！！？」

私はさいほの手を掴んで逃げた

さいほの「痛い痛い痛い！！黒須！腕！とっても痛いです！！あいだだだだ！！！」

ほのか「今は逃げる方が大事じゃああああ！！腕くらい取れたって生活できんだろーが！！！」

さいほの「できねーよ！！思いつきり不便だろーが！！！」

ほのか「とりあえず早く逃げるぞ！！なんかあいつ、私達を殺しに来たみたいでめちゃくちゃ怖い！！！！！！！」

さいほの「んなわけ……」

『ヨク気付イタナ』

ほのか「ぬおっ！！？」

私達の後ろにいた黒いのはいつのまにか前に立っている

瞬間移動でもしたのかコイツは！！

ほのか「もしか瞬間移動されましたか？」

さいほの「なんで敬語？」

『ピンポン！セイカーイ。』

ほのか「当たっちゃったよ！！」

さいほの「しかもコイツ、めちゃくちゃフレンドリーじゃねーか！
！」

『ハジメマシテ。私ノ名前ハ、キリハデス。アナタヲ殺シニ来
マシタ』

ほのか「そーかあ、キリハっていうんだー……って、え？」

さいほの「今、聞いちゃいけないキーワードを言っていたような」

『ソレデハ、計画ヲ実行シマス。』

キリハと名乗る黒いのが言った瞬間、夢のように地面が大きく揺れ
だした

さいほの「のわああ！！」

ほのか「おわわわ！！」

やがて揺れはおさまった

『ジューンビカンリョウ』

さいほの「何………を………」

私達は言葉を詰ませた。

キリハの後ろには

怪物がいた

苑子「……………は？今、殺し来たって言った？」

『ソウ。アナタたちハ邪魔。ダカラ殺ス』

なつじ「上等だゴラア」

苑子「なつじ！挑発しないで！」

『残りノ二人ハキリハガモウ殺シテイルダロウ』

なつじ「！！！！……………残りの二人って……………」

苑子「Wほのかのこと？」

なつじ「もうちょっと緊張感をもとうよ」

『……………オマエラトイルト調子ガクルウ。早メニヤッテシマオウ』

苑子「ちょい待ち！！君さ、なんて名前？」

『キリカ』

なつじ「なんで名前聞いたの苑子？」

苑子「なんとなく」

なつじ「とにかくキリカさん。私達、死ぬ気などまったくありません」

『ホウ。ワタシカラ逃ゲラレルトデモ？ソレハ無理ダ。ココハ才前
ラノ墓場ダカラナ！！』

な・そ「いや、」

なつじと私は戦う姿勢をとり、敵をするどく睨んだ

な・そ「ここはお前の墓場だああああっ！！」

そして、なつじと同時に地面を蹴りキリカへと突進していった

さいほの「ぎゃあああああー！！」

ほのか「さいほのおおおっ!!」

うわあああ!!どうしよう!!なんか怪物にさいほのが捕まっちゃったよおっ!!

さいほの「ぐえっ……腹がしめつけられ……」

『サア、ドウスル?』

ほのか「こっする」

私はバックに入っていた理科の教科書をキリ八に向かって思いっきり投げた

そして見事命 中

『イツダアアアアア!!?』

さいほの「……………(。o。)」

ほのか「正義は勝つ!!」

『キッ…………キサマア…………痛イジャナイカ!!ウチドコロが悪いト死ヌンダゾ!?!』

ほのか「殺すつもりでやったんだけど」

『オイイイツ!!才前本当二中学生イイイ!!?』

ほのか「さて…………ほかに武器は」

さいほの「……………お前、死ぬよ？」

『ハアア！？』

ほのか「あ、あったあった 小刀」

『ナンデ小刀持ッテンノオオオオ！！？』

ほのか「いやー、この前お姉ちゃんの引きだしあさってたらあつてさー」

さいほの「お前の姉ちゃんヤバくないか！？」

ほのか「ま、殺す前に聞いとくか。なんで私達みたいな普通の中学生を殺そうとしたの？」

「『お前のどこが普通の中学生だ！！』」

ほのか「あ、さいほのー！」

私はさいほのに向かって投げた

はさみを

さいほの「ぎゃああああっ！！！？」

はさみはさいほのに巻き付いてる怪物の太いツルに刺さった

さいほの「てめっ……………危ねえだろおおお!!」

ほのか「それでツル切って自分で脱出してね。私はコイツを殺るか
ら」

『（目ガマジナンデスケド……………）』

さいほのは、はさみで頑張ってツルを切ろうとしていた

私は小刀を構えキリハに突進した

私が小刀を振ったのと同時にキリハは空高く飛んだ。
キリハは怪物の頭の上に着地した

ほのか「チッ、クソが」

『ナンナノオ前!!?』

ほのか「あとさつきから気になってたんだけどお前さ、会話がカタ
カナじゃん?はつきり言って読みづらい」

『ソレハ作者ガ……………』

ほのか「じゃあ作者ー、会話文普通にしてー」

作者「ラジャー!!」

『作者出てきた!!??って普通になってるううっ!!』

ほのか「よしこれで読者様も読みやすいだろう。さて、じゃあ私達を殺す理由を教えろ」

『言っわけん』

グサッ!!

『……………』

キリハは足元を見た。

つま先から1mmくらいの所にするどいハサミが刺さっていた

怪物はとても痛そうにしている（頭に刺さってるし）

さいほの「いいから話せ。あとハサミをこっちに投げてくれると嬉しいです」

『じゃあ投げんな!!』

キリハは怒りながらハサミを投げた

キリハは一息ついて話しはじめた

『ふう……………俺は下っ端だから詳しいことはわからないが、今俺の組織はある計画を実行しようとしている』

ほのか「世界征服的な？」

『まあそんな感じだ』

ほのか「当たっちゃったよ!!」

嘘のつもりで言ったのに…

『で、その計画を実行しようとしたのはいいが、問題が起きたんだ』

さいほの「問題？」

『組織はある日、この計画の邪魔となる存在がいることに気付いた。それがお前らだ』

ほのか「なんかわくわくすつぞ!!」

さいほの「だまっとけや」

『その存在がいると計画の成功はない。だから組織は邪魔者を殺そうとした。』

ほのか「よく私達だって気付いたね」

『まあな。ちなみに邪魔な存在はお前達だけじゃない。あと8人ほどいる』

さいほの「大変じゃん」

『俺はこの前、その8人を殺そうと奴らの秘密基地に行った。そこでお前らの存在を知った』

ほのか「なあるほどお………ってふざけんなあぁっ!!」

さいほの「それ思いつきりその8人のせいで私達命狙われてんじゃん!!ぶっ殺してやる!!」

ほのか「おうよ!!ヘタリアキャラなら許すけど」

私は怪物の体を昇っていつて、頭にいるキリハの所にたどり着いた

ほのか「とりあえずお前先に死ねええええ!!」

私は小刀をキリハに振り下ろした

その時、耳が痛いほど鋭い音が目の前から聞こえた

その音はテレビドラマとかで聞いたことがある銃の音に似ていた。
ていうかそれだった

キリハは銃を構えていた

私は、いきなり肩に激しい痛みを感じた

肩を見ると真っ赤な液体が大量に出ていた

ほのか「……………!!!?」

さいほの「黒須!!!」

私は何も考えられなくなった。

そしてよろけて、何mも下にある地面へと落下した

体全体に激しい痛みが襲う

声も出ないほど苦しかった

さいほの「黒須!!!」

私は仰向けになってさいほを見た

さいほの顔は青ざめていた

いきなり目の前に黒いのが現れた

『死ぬのはお前だな』

キリハはニヤリと笑い私に銃口を向けて引き金を引こうとした

さいほの「黒須うううううつうつ！……！」

私は瞼をおろした

「「ちよつと待ったあああああ！……！」」

聞き覚えのあるまぬけな声が頭に響いた

私は瞼を開けた

ほのか「……………なっ！」

『お前らなんで……………』

「「バカでアホでうざいけど大切な友達を助けにきたんだよ……！」」

なつじと苑子は声を合わせていった

「世界会議場」

ドイツ「……………日本」

日本「……………はい？」

アメリカ「俺達……………敵に殺される前にあの子達に殺されるんじゃないかい？」

日本「……………善処します」

その5 夢は現実！？（後書き）

主人公達の出身地　ちなみに主人公達が住んでところは埼玉県　作者が埼玉に住んでるんで

ほのか……千葉生まれ埼玉育ち。小さい頃からずっと今の家に住んでる。

さいほの……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校四年生の時にほのかの小学校に転校して来る

なつじ……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校五年生の時に転校して来る

苑子……埼玉生まれ埼玉育ち。小学校二年生の時に転校して来る

ほのかだけ千葉生まれなのはお母さんがそこに住んでいたからです
！！

ほのか以外みんな転校して来ましたw

意見・感想がある方はよろしく願います!!

作者は感想とかあるとめっちゃテンションがあがりますのでw

その6 長年の夢は現実に（前書き）

逃げるが勝ちiiiiiiii!!

b y ほか・さいほの・なつじ・苑子

久しぶりの投稿w

これからは一日一回を目指そうと思います

ちなみにユーザー名を変えましたw

その6 長年の夢は現実

ほのか「なつじ!?!苑子!?!」

なつじ「やつ 黒須、なんかすごいことになってない?」

苑子「黒須は血で真つ赤…………ふふふ…」

さいほの「こえーよ!!ブラック苑子出すな!!」

苑子「あはは」

『あの…………存在忘れてませんか?』

ほのか「忘れてますが何か?」

『何か?じゃねーよ!!っーかそのチビとでかいの!!キリカはどうした!?!』

なつじ「おい、今チビつつた?苑子のことはでかいって言ったのに私のことはチビつつたよね?言ったよね?よーし、黒須。刀貸せ」

ほのか「あいさ」

私は肩の傷を押さえて小刀を渡した

『いやいやちよつと待てええええ！！そんな細かい所までいちいち……ていうかキリカ……』

なつじ「細くないんじゃボケエエエエ！！」

『人の話を聞けえええええ！！』

さいほの「んで、なんて言おうとしたの？」

そついうさいほのはいつの間にか怪物から脱出していた

『あれ、なんでいつの間にか脱出してんの？』

苑子「いやあ、鞆あさつてたらちようど彫刻刀とカッターがあつてさあ！！いやあ、切れ味いいねー！彫刻刀とカッター」

『お前らもはや中学生じゃねーよ！じゃなくてキリカは！？』

苑子「キリカつてあそこで息切れてる黒いの？」

苑子は少し離れたところにいるキリハに似た黒いのを指差した

『ぜえつ………ぜえつ………お前ら………』

『キリカ！！大丈夫か！？何があつた！』

なつじ「というわけで時は約10分前にさかのぼります」

〈約10分前〉

な・そ「ここはお前の墓場だああああっ!!」

『くっ……!!?』

キリカは身構えた

しかしいつまでたってもなつじと苑子は来ない

キリカが周りを見ると全速力で逃亡している二人を見つけた

『おいしいいいいっ!! あんだけカツコつけといて逃げんのかよ!!』

キリカは二人を追ったのであった……

苑子「そして今にいたる」

ほのか「何やってんだおまいらは」

さいほの「頭大丈夫？」

なつじ「黙れや」

苑子「それより二人は恋人ですか？」

ほ・さ・な「話そらすな」

『恋人なわけないだろう馬鹿が』

苑子「ん？今バカつつた？さりげなくバカって言ったよね？」

『私達は双子の姉弟だ。私が姉、キリハが弟』

ほのか「あ、そーいえば双子って先に出てきた方が弟か妹って知ってる？」

さいほの「なんでいきなり豆知識。つか誰でも知ってるだろ」

なつじ「つかキリハって男だったのぉぉぉお！？」

苑子「いまさら？」

『…………キリハ、なんか全然話も進まないし早く帰らないと上司に怒られるからもうやってしまおう』

『そうだね。さっさと殺ろつか』

ほのか「……………ねえさいほの、」

さいほの「……………なんだい黒須」

ほのか「私ね、さつき後ろから殺ろう　っていう不吉な言葉が聞こえた気がするんだ」

なつじ「偶然だな、私もだよ。」

苑子「うん。なんか嫌な予感がするよね。」

さいほの「だな。ま、こういうときは……………」

四人「逃げるが勝ちいいいいいい！！！」

私達は四人一斉に何もない荒野を駆け出した

『はははっ、もう遅いよ』

ほのか「ぬおっ！！？」

さいほの「またかよっ！？」

なつじ「ぎゃああああっ！！キモいいいいっ！！！」

苑子「おー」

私達は地面から出てきた怪物のツルに捕まってしまった

って、うわっ！！高っ！！

ほのか「ぎゃああああっ！！高いiiiiiiii！怖いiiiiiiii！」

さいほの「あれ、まさかの高所恐怖症？」

『あーあ、こんな雑魚共のせいで余計な時間使っちゃったよ』

なつじ「余計な時間を大幅に使ったのは君達だと思うんだが」

『黙れ。じゃあ早速やるか』

私達は一カ所に集められた

足がぶらんぶらんしててなんか嫌なんだけど

苑子「うばあああ！！死にたくないよおおおお！！」

なつじ「黙つとけや、イタリア第2号」

怪物は何本もあるツルをめちゃくちゃでかいナイフに変えた

なつじ「ぎゃああああっ！！まだ死にたくないiiiiiiii！せめて
160cmをこえるまではああああ！！」

さいほの「お前さっきと態度全然違うよ？」

ほのか「でもあれで斬られたくはないなあ」

さいほの「黒須、お前片腕は自由だろ。小刀でツルを早く切つてよ」

ほのか「さっき逃げるときに小刀放り投げちゃった。てへっ」

さいほの「この役立たずが」

うわっ！さいほのの目がめちゃくちゃ軽蔑してんだけど

『もういいかしら？』

なつじ「よくないよくないよくないよくない」

苑子「なつじ、落ち着いて！」

『んじゃ、バイバイ』

怪物はナイフを振り下ろした

さいほの「ぎゃああああああっ！……！」

苑子「さいほの……さっきまでの冷静さはどこへ……？」

なつじ「来世は大きくなってるかなあ……」

ほのか「諦めないでええっ！……！」

ナイフはすぐ近くせまってきた

私以外の三人は完全にパニックってるし……

うわぁぁんっ!!どうすればいいのおおっ!!?!

その時、私の近くが突然光りだした

光はとても温かく私達を包んだ

私は光の中で呆然としていると光から白くて綺麗な手が出てきた

もう大丈夫です。あなたたちは絶対に私達が守ります

私の耳に響いた声は、聞き覚えのある落ち着いてとても安心で
きる声だった

私は光から出てきた手を握った

その手は、周りの光のようにとっても温かい手だった

その6 長年の夢は現実に（後書き）

今回は黒い人達の紹介をします。黒い人達っていつでも黒いマントを着て、フードをかぶっているだけです。外見は普通の人間ですw

オリジナルキャラ紹介

・キリハ

謎の集団の下っぱの黒い 男。キリハの双子の弟。 肩につくくらいの青い髪 に蒼い瞳をもった17歳 くらいの青年

・キリカ

謎の集団の下っぱの黒い 女。キリハの双子の姉。 長くて綺麗な青い髪に蒼 い瞳をもつ17歳くらい の美女

感想、意見がありましたらどんどん書きちゃってください！！

その7 主人公は大変興奮されたようです（前書き）

ほのかチップー！

b y ほのか

今回はちょっと短めです

その7 主人公は大変興奮されたようです

ほのか「……………ぬ？」

私は目を覚ました

自分がいるのは見ず知らずの部屋。

私が寝ていたベッドではさいほのとなつじと苑子がまぬけな顔で寝ている

さーてと、

ほのか「起きろ」

私は三人の頭にほのかチョップをお見舞いした

さいほの「あいだっ！ー！」

なつじ「ぐぎっ！ー！」

苑子「ふっつ」

ほのか「おはよう諸君 いい朝だね」

さいほの「黙れ。バカ」

ほのか「ほのかチョップ!!」

さいほの「いだだっ!!」

なつじ「黒須、痛い。」

ほのか「何年も改良したからね」

さいほの「改良する暇あんなら勉強しろ」

ほのか「ほのかチョップ!!」

さいほの「いだだっ!!」

なつじ「うーん、ここどこ?」

さいほの「つか藪崎だけ起きてないね」

苑子「んゝ……むにやむにや……」

ほのか「ムカついてきたわ。もっかいやろ、ほのかチョップ!!」
私はもう一回ほのかチョップをした

さいほのに

さいほの「なんで私なんだよっ!!!!」

ほのか「なんでって……………うざかったから」

さいほの「理由になってねーよ」

その時、いきなり部屋の扉が開いた

私達三人はびっくりして硬直した

その後に私となつじは入ってきた人物を見てさらに驚いた

ほ・な「……………日本？」

さいほの「……………は？」

日本「おや、私の名前をご存知のようですね」

入ってきた人物は私が大大大大好きな日本だったのだ

ほのか「に……………日本さんでございますか？」

日本「はい。貴方は黒須ほのかさんですよね？」

ほのか「ぐはっ！！」

私はベッドに倒れ伏した

なつじ「黒須うううっ!!」

さいほの「なんなのコイツ」

日本「うわっ!? 大丈夫ですか!？」

さいほの「いつもこんななので大丈夫です」

なつじ「黒須うう!! 大丈夫かあああっ!!」

ほのか「だって…… 大好きな日本がいるし…… しかもその日本に名前を呼んでもらえるなんて……」

今なら興奮しすぎて鼻血が出そうな気がする

日本「それより、まだ寝ている方がいらっしやるんですが……」

日本はちらつと爆睡してる苑子を見た

苑子は口を開けてよだれが出ていて本当にコイツは女なのかってく
らいの顔だった

なつじ「苑子、起きろ。日本がいるよ」

苑子「んー…… んなわけねーだろチビガキ……」

なつじ「あれ? 今の本当に寝言? 起きてるよね? 完全に起きてるよね?」

なつじはブラックオーラをめちゃくちゃ出している

日本「は……………はは……………」

イギリス「おい日本、四人は目え覚ましたか？」

はい、イギリスキター……………!!!!!!

やべえよ、マジ、アニメや漫画で見るよりかけーよ。あと眉毛が立派だよ

日本「イギリスさん、一人だけなかなか起きなくて……………」

日本はまたちらつと苑子を見た

そういえば苑子ってイギリスが大好きだったよーな……………

ほのか「おい、苑子、イギリスがいる」

苑子「……………んー、黙つとけやクソ須」

ほのか「誰がクソ須だ??あゝあ?」

さいほの「落ち着けエロ須」

ほのか「なんでエロ!? 私なんも問題発言してないよね!?!?」

中国「にぎやかあるねー、どうしたあるか?」

中国もキターーーーー！！！！

ヤバイ、めちゃくちゃ女に見える

確か苑子、中国も大好きだったよーな

さいほの「薮崎、チャイナが来たよ」

苑子「……………んー、うつせーよミス ルオタク」

さいほの「ありがとう」

どんだけ冷静なんだコイツは、しかもちょっと嬉しそうなんだけど。
なんで？

イタリア「うわぁ！！かわいい女の子達だぁー！！」

ドイツ「うるさいぞー！！お前らー！！」

イタリアとドイツまでキターーーーー！！！！

イタリアのくるん引っ張りてえええー！！

あとドイツちょームキムキなんだけど

アメリカ「騒がしいんだぞー！！」

フランス「女の子の取り合いか？」

ロシア「うふっ 楽しそうだね」

AKYとナルシとマフラーさんキターーーーー！！

AKYはなんかめちゃくちゃ声でけええ！！

ナルシはなんかうぜえ

マフラーさん、めちゃくちゃでかいっす

苑子「んー？何ー？騒がし……………」

苑子は長い眠りから目覚めて部屋の状況を見た

取っ組み合っているイギリスとフランス、お菓子を配る中国、大声で笑うアメリカ、パスタを食べはじめようとするイタリア、そのパスタを取り上げるドイツ、その様子を困ったように苦笑いする日本、ずっとニコニコ笑っているロシア……………あと自分を完全にガン見している三人

苑子「ああ、これは夢か。よし！もっかい寝よ」

全員「寝るなボケええええ！！」 苑子はみんなに飛びげりをされ気絶した

その7 主人公は大変興奮されたようです（後書き）

主人公達の趣味

ほのか…こうみえて本を読むのが大好き。暇さえあれば本を読む。
あと絵も描くのが好き。絵の才能はそこそこ？

さいほの…ミス ルオタクなのでそのCD聞いたりDVD見たりするのが好き

なつじ…なつじも読書好き。この人も絵を描く。絵の才能はめっちゃくちゃある。あと苑子をいじめること。

苑子…部活に所属していないため家にいる時間はほとんどパソコンいじり。妄想大好き。

感想・意見等がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！
！！

その8 初対面では自己紹介（前書き）

最初はグーッ！！ジャンケンポン！！

by 全員

短いです！

あと駄文です

その8 初対面では自己紹介

苑子「うう……………ひどいよみんなして……………」

苑子は涙目だ

なつじ「はははっ、ざまあw」

アメリカ「よし！！ということで小説お馴染みの自己紹介をするんだぞー！！」

シーン……………

イギリス「いきなりなんだお前；」

アメリカ「この四人と俺達8人はこれから親交を深めなきゃいけないから！！だから最初は自己紹介なんだぞー！！」

イタリア「あ、俺もそー思うー！！」

ほのか「あれ？今これから親交を深めると言っていましたたよね？」

アメリカ「うん。君達はこれからここで生活するんだぞー！！」

四人「はあああああっ！！？」

さいほの「ちよっ…………生活するって…………ミスのCDとDVD
なしでどうやって生活しろというんだ!!」

苑子「そこかよ!!」

日本「心配ありませんよ。ほのかさん達の荷物はイギリスさんの魔法でこちらの世界に来てます」

イギリス「魔法じゃない、魔術だ!!」

フランス「変わんねーだろ」

なつじ「さすがイギリスだね。私達の服まである」

なつじが部屋のすみに置いてある大量の荷物の中を見て言った

ほのか「それより自己紹介すんじゃないの?やろっよ!!」

ドイツ「そうだな」

苑子「最初誰から?」

……………

全員「最初はグーッ!!ジャンケンポン!!」

全員はそろって手を出した

ほのか「……………私かよっ!!」

負けたのはただ一人、私だった

イタリア「じゃあ最初は君達四人からねー」

さいほの「わかった。早くしろ黒須」

ほのか「ちえっ……………えと、黒須ほのかです。好きな物は二次元と本と餅です。ちなみにメガネを外すと美少女って設定はありません。メガネとってもブスです。よろしくお願いします」

私はぺコツとお辞儀をした

イタリア「かわいいー!!」

ほのか「は？」

イタリア「だって……………かわいいー!!」

ほのか「理由になってませんが……………」

さいほの「次は私ね。齊藤ほのかです。あだ名はさいほの。ここに
いるメガネと同じ名前です。好きな物はミスルです。よろしくお
願いします」

フランス「ミスル？」

さいほの「はっ、ミスルを知らないとはクソか」

日本「フランスさん、ミスルというのは我が国で有名なアーティストです」

さいほの「おっ、よく知ってるな！」

日本「はい」

なつじ「次は私！！中島菜摘です！あだ名はなつじです！私のことをチビというやつはあの世行きなので気をつけてくださいね　よろしくお願いします」

全員「こええええええええええ！！！」

苑子「私の番だね！！藪崎苑子！永遠の14歳です！！好きなのは二次元とパソコンと妄想と……………」

なつじ「うざあああいつ！！！」

なつじは苑子にアイアンクローをかました

わー痛そー

さいほの「永遠の14歳って……お前まだ誕生日きてないから13歳だろ」

苑子「細かいことは気にしないのさっ」

ほのか「細かくねーよ」

さいほの「あっ、じゃあ貴方達の自己紹介を……」

イタリア「あっ、えと……」

ほのか「必要ないよ？」

全員「……は？」

みんなびつくりして私を見ている

ほのか「私、全員の名前知ってるもん。左からイタリア、ドイツ、日本、イギリス、アメリカ、フランス、中国、ロシアでしょ？」

日本「あ……当たってます……」

中国「なんで……我達の名前を……？」

ほのか「いろいろわけがあってね？」

ロシア「へー、面白そうだね」

さいほの「そうだ、質問がある」

イタリア「何何？」

なつじ「私達はなんでこの世界に来たの？」

苑子「あ、確かに気になる！！なんで私達はここに来たの？なんで私達は殺されそうになったの？」

ドイツ「…………それは…………」

枢・連「次回に続きます」

四人「……………」

その8 初対面では自己紹介（後書き）

主人公達が苦手な物

ほのか……虫、見た目がグロい食べ物、姉、B L

さいほの……アイドル、魚介類

なつじ……自分よりはるかに大きい物、変態、子供

苑子……勉強、めんどくさい事、他は不明

感想・意見がありましたらじゃんじゃん書いちゃってください！！

その9 説明は手短かに(前書き)

まっさかー!!!本気に決まってるじゃん

byなつじ

結構放置してました……

その9 説明は手短に

なつじ「さて、説明してもらおうか」

苑子「何気に時間かかったね」

さいほの「まさか作者が一週間くらい小説を放置するとは」

ほのか「疲れてたんだってさ」

なつじ「どーでもいいから早く説明」

日本「はい。えーと……どこまで知ってますか？」

苑子「説明しないのかよ」

ロシア「知ってること説明しても時間＆文章の無駄だからね」

さいほの「小説ならではのこと言うな。確か、私達が邪魔な存在とかその存在はあと8人いるとか……こんくらいまでは知ってるな」

苑子「そんなん言っとったっけ？」

ほのか「人の話ちゃんと聞いところか」

イギリス「そこまで知ってるんだな」

苑子「ふっ、すごいだろう!」

なつじ「お前知らなかっただろ」

日本「では説明します。世界は今、とても危険な状態に陥っています」

ほのか「なぬ!？」

さいほの「ぬ?」

日本「ある組織が世界征服を企んでいるのです。組織は簡単に世界を征服できると思っていました。しかし計画は思いど通りに進まなかったのです」

なつじ「予算こえたから?」

ドイツ「それはない」

苑子「お腹空いたから?」

中国「それは絶対にある」

イギリス「組織は原因を必死になって探した。時間はかかったが組織は原因をつきとめた。」

フランス「それが君達四人と」

イタリア「俺達八人だよ」

さいほの「残りの八人はお前らだったのか!？」

アメリカ「そうなんだぞ！！だから俺達は大事な話し合いをするときは秘密基地に集まってるんだぞ！」

ドイツ「お前らの様子も秘密基地で見っていた」

なつじ「見てたの！？」

さいほの「じゃあお前らなんだな」

枢・連「え？」

さいほの「私達が邪魔な存在だと気付かれたのはお前らのせい、つてことだよなあ？」

さいほのの周りにはどす黒いオーラが出ている

日本「え、いや、その……………」

忘れたかった現実

ぎゃああああああ……………

辺りには男達の悲痛な叫びが響いた……………

ほのか「みんな大丈夫？」

なつじ「黒須はなんでやらなかったの？」

フランスだけボコった

苑子「確かに、なんで？」 フランスの顔をボコった

ほのか「ヘタリアキャラだからね」

日本「で……………では、説明の続きをさせていただきます……………」

ほのか「ホントに大丈夫？；」

日本「大丈夫です……………で、敵は8人の国の存在はみつけたのです
が残りの4人の存在を見つけることはできなかった」

中国「だから我達は敵よりも早くその4人を探したある。で、この
前やっと見つけたある」

苑子「わっち達を？」

ロシア「うん だから異世界にいる君達をこっちに呼び出そうとし
たんだ」

なつじ「なんでこっちの世界に？」

なつじはいつの間にかみかんを食べている
つまり話に飽きてきている

苑子はなつじからみかんを奪おうとしたがなつじに顔面を殴られて

半泣きになった

ドイツ「12人全員そろわないと世界は救えないしな。それに敵に存在を知られてしまったら危険だ」

イタリア「だから俺達は日本が作ったよくわかんないけどすごい機械で君達をこっちの世界に連れて来ようとしたんだよ！」

フランス「一回目は三人いたところで機械を発動させたんだが、どうも四人一緒じゃなきゃ無理らしくてな。失敗しちゃったw」

さいほの「じゃああの魔法陣はよくわかんないけどすごい機械を発動したんだな」

ほのか「なんか機械の名前が『よくわかんないけどすごい機械』で確定しちゃってるんだけど」

アメリカ「だからモニターで君達のこと監視してたんだぞ！」

さいほの「ほー、そのせいで私達の存在がばれて殺されかけたわけねー」

8人は一斉にそっぽを向いた

さいほの「おーい無視すんな」

イギリス「い……以上で説明は終わりだ。次はお前らだ」

ほのか「私達？」

イギリス「なんでお前達は俺達の名前を知ってるんだ？」

なつじ「ああ、そこか」

苑子「そりや疑問に思うよねー」

ドイツ「どうなんだ？」

ほか「うーんと……私達の世界にヘタリアっていう漫画があるのね。」

なつじ「その漫画の登場人物が君達だよ」

8人「……………え？」

日本「ということは……………あなたたちにとってはこの世界は二次元ということですか？」

苑子「あ、確かにそうなるね」

イタリア「ヴェ……………なんかびっくりだあ……………」

さいほの「信じるのか？」

ドイツ「嘘だったら名前を知らないだろう」

日本「ここが二次元……………」

イギリス「日本がなんか感動してるぞ」

アメリカ「そりや嬉しいだろうね!!」

ロシア「うん。まあこれで説明は終わりだね」

中国「そうある!!もう夜遅いから休むある!」

なつじ「そういえば私達、寝る場所ない……………」

日本「ここに泊まるんですよ?」

苑子「……………What?」

フランス「だからここに泊まる……………」

ほのか「二回言わなくていいわボケ」

フランス「なんかお兄さん、扱いひどくない!?!」

さいほの「そうですね」

イギリス「ははっ、ざまあw」

ドイツ「じゃあ荷物は部屋に運んどくな」

なつじ「さすがムキムキ」

苑子「失礼だなオイ」

さいほの「じゃあ行くか。ふぁーあ、眠い……………」

ほのか「んじゃ、お先に失礼するわ。おやすみー」

日本「はい、ゆっくりお休みください」

ボタン

四人は部屋を出ていった

イギリス「フランス、お前変なこと考えてないよな？」

フランス「えっ！！？ななな何言ってるんだよ！！」

イギリス「考えてるな……………」

中国「完全に考えてるある」

日本「フランスさん」

フランス「ん？」

日本「彼女達に手を出したらどうなるかわかってますよね？」

日本は刀を出し笑顔で微笑んでいる

全員『お……………恐ろしい……………』

全員は日本を見て顔を青くしたという

苑子「なつじ、一緒に寝よ!」

なつじ「は?お前は床で寝てろっ」

苑子「うう、ひどい……」

ほのか「あ」

さいほの「どした」

ほのかは何かを思い出したようにドイツが運んできた荷物をあさりはじめた

なつじ「何やってんのクソメガネ?」

ほのか「黙れチビMEGANE」

なつじ「なんでイングリッシュ?」

苑子「なんかロボットみたいでかつこいいからじゃね?」

なつじ「チビとついてる時点で全然強そうじゃないよ」

ほのか「あつた!」

さいほの「何が……あ、それ捨てた小刀じゃん」

なつじ「そんなに探して……大事な物なの?」

ほのか「うん。家の家宝」

苑子「家宝!!?」

さいほの「普通家宝を無断で学校に持ってきたり、放り投げたりしねーだろ」

ほのか「おじいちゃんが死ぬ前に必要な時に使いなさいって……………」

なつじ「捨てるとは言ってないだろ」

ほのか「あれはノリというやつだよ」

さいほの「ノリで家宝捨てる奴がいるか!!」

ほのか「それより眠い。てことでグンナイッ!!」

ほのかはベッドになっところがつて約10秒後に爆睡していた

苑子「はやっ!!じゃ、私もおやすみー」

苑子はベッドになっところがつた瞬間、爆睡だった

さいほの「お前は早すぎるんだよ!!のび太くんか君は!!」

なつじ「床で寝ろつつただらうが」

さいほの「え、あれ冗談じゃないの?」

なつじ「まっさかー！……本気に決まってるじゃん」

さいほの「お前ホントにひどいな」

さいほのとなつじはベッドに横たわり、そのまま眠った

その9 説明は手短に（後書き）

なんも書くことがないです……

感想等がありましたらお願いします!!

その10 私の家において（前書き）

ゴルバチヨフ！！

ご、ゴルバチヨフ！！？

by 苑子・なつじ

久しぶりですなー

一日一回の目標はどこにいったんでしょーか……

その10 私の家において

さいほの「ふぁーあ……………もう朝か……………」

私は窓の外を見る。

とてもいい天気で太陽が眩しい

とりあえず私はアホ面で寝ている数崎とベッドから落ちてるなつじを起こす

苑子「んー……………眠い……………」

なつじ「なんか体全体が痛い……………」

さいほの「おはよう。ということじゃんけんぼん……………」

苑・な「えっ！！？……………」

数崎となつじはなんとか手を出した

苑子「あ、なんだかよくわかんないけど負けた……………」

さいほの「残念だったな。ということで黒須起こして……………」

なつじ「なんかよくわかんないけど頑張っ……………」

苑子「黒須くらい普通に起こせんじゃん…………おいクソ須、起き…………」

ドゴォッ！！

な・さ……………」

薮崎が黒須にぶたただけで飛んだ…………

薮崎をぶつた黒須はムクリと起き上がる

ほのか「…………朝からうつせーんだよ。黙ってるや」

なつじ「…………（。。）」

さいほの「相変わらず寝起き悪いな……………」

黒須は寝起きがとても悪いのだった

ほのか「あゝあん？」

さいほの「読者にガンとばすな。」

苑子「おっはよー！！」

中国「おー、おはよ…………ってどうしたあるか！傷だらけある！！」

苑子「黒須にぶたれたただだよ」

イギリス「ぶたれただけでそんなに何力所も怪我するか？」

なつじ「飛んだからね」

フランス「とんだ!？」

ほのか「……………」

アメリカ「……………なんかほのかがめちゃくちや機嫌悪そうなんだぞ……………」

ほのか「黙れメタボ」

アメリカ「……………」

アメリカは部屋のすみに体育座りしてしくしくと泣いている

ドンマイ

日本「大丈夫ですか？低血圧なんですね……………」

ほのか「……………ん」

なつじ「お、さすが日本だな。」

苑子「黒須の機嫌が少し直った」

日本「ほのかさん、朝食の用意手伝ってくださいますか？」

ほのか「ん……」

イギリス「あ、じゃあ俺も……」

全員「お前は絶対に行くな」

イギリス「……………」

しばらくして日本と黒須が作った朝食ができた

テーブルに乗せて手を合わせる

全員「いただきますーす！」

全員は朝食を食べはじめた

イタリア「あ、この目玉焼きおいしーね！ー」

日本「それはほのかさんが作ったんですよ」

ドイツ「ふむ、確かにうまいな」

ほのか「いやぁ……………」

さいほの「（完全に機嫌が直つて……）」

ロシア「……………日本くんの塩鮭、なんかすごく塩の量多くない？」

うわっ、確かに

日本「そうですか？普通だと思つのですが……………」

ドイツ「没収だ」

日本「あぁっ！！返してくださいドイツさん！お年寄りの幸せを奪わないでください！！」

中国「日本、さすがにあればダメある……………」

さいほの「うん。やめた方がいいぞ」

日本「ああ……………私は……………塩がなきゃ……………」

ほのか「ドンマイッ」

苑子「ゴルバチョフ！」

なつじ「こゝ、ゴルバチョフ！！？」

苑子「間違えた。ごちそうさま!」

ほのか「ゴルバチョフとごちそうさまをどつやったら間違えんだよ」

さいほの「はあ、おなかいっぱいだ」

日本「あ、少しいいですか?」

なつじ「う?」

日本「ほのかさん達、私の家に住みませんか?」

苑子「……………え?」

日本「あ、いやならいいんですけど……………ずっとここに住むっていうのも上司に怒られてしまうんですよ」

ほのか「え、なんで?」

イタリア「ここは世界会議場だからね」

さいほの「そ、そうだったのか!」

ドイツ「ああ、上司に頼んで貸してもらった」

苑子「初耳なんだが」

アメリカ「言ってなかったからな!」

なつじ「ウザいんだけどコイツのテンション。一回殴っていいかこ

のメタボ」

アメリカ「やめてくれええ!!」

イギリス「とにかく、長くここに住んでと……」

さいほの「す……住んでと……?」

中国「金を取られるある!!」

ほ・さ・な「……へー」

苑子「なっ……なんだってえええええ!!?」

なつじ「苑子さんあのね、その反応ウザい」

フランス「そういうことで長くはここに住んでちゃいけない、ってことだ。ということで俺の家に……」

日本「フランスさん」

日本は刀をフランスの首筋に当てた

日本、顔が恐すぎます

つーかそれ見て黒須がめちゃくちや興奮してんだけど

フランス「に、日本!!冗談冗談!!刀おろして!」

日本「フランスさん、次は冗談でも斬りますよ」

ほか「日本マジかつこええ!!」

イタリア「あ、じゃあ俺の家に……………」

ロシア「僕の家でもいいよ?」

イギリス「仕方ないから俺の家でも……………」

日本「いえ、ぜひ私の家に!!」

中国「私の家に来るよろし!!」

ドイツ「俺の家でも……………」

アメリカ「ヒーローの家はすっごく楽しいんだぞ!!」

さいほの「え……………あ……………」

全員「どこの家にするんだ!!?」

ほか「断固日本の家でっ」

さいほの「決断早すぎるだろ」

なつじ「どんだけ好きなんだよ」

苑子「日本に一票だね。なつじとさいほのはどする?」

さいほの「私はどこでも」

なつじ「私もー。フランス以外ならっ」

イギリス「フランス拒絶されたから脱落だな」

フランス「お兄さん悲しいっー!」

苑子「うーん、どうしよう……」

さいほの「じゃあ私、黒須と一緒にいい」

なつじ「じゃあ私も」

苑子「なつじが言うならわっちも!」

ドイツ「決まりだな」

イタリア「ヴェー……残念……」

ほのか「あ、じゃあたまにみんなの家に泊まりに行っていー?」

アメリカ「もちろん、いいんだぞ!」

日本「じゃ、行きましょうか」

さいほの「おう」

なつじ「苑子、お前荷物係な」

苑子「えっ!?!」

ほか「日本と一緒に住めるなんて……夢みたい!!」

私達は重い荷物を持って日本の家へと向かった

その10 私の家において（後書き）

おまけ なつじと苑子

なつじ「あ、苑子ー」

苑子「何？」

なつじ「手、出して」

苑子「うい」

なつじ「プレゼント」

苑子「マジ！？何か……………な……………」

苑子の手には黒光りする……………

苑子「す……………スコーン……………」

なつじ「ま、がんばれ」

苑子「いやいやいやー！死んじゃうー！これ食べたら死んじゃうー！」

なつじ「大好きなイギリスが作ったんだよ？食べないの？」

苑子「うぐっ……………」

苑子は手の上にあるスコーンを見る

はつきり言っ

食べたくない……

苑子「でも……大好きなイギリスのためならああああっ!!」

苑子はイギリスのスコーンを頬張った

直後、苑子は地面に倒れた

苑子は一週間近く、下痢に悩まされたという

感想・意見、よろしくお願いします（人、）

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（前書き）

ビビビってねーっしゅー！！！

byさいほの

なんかめっちゃ久しぶりの投稿

話の展開が早すぎる&イタリアとかが出てこない

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ

前回までのあらすじっ！

苑子「なんだかんだで日本の家に住むことになりましたー!!」

さいほの「なんだかんだって……………」

苑子「日本ー、まだ？」

日本「もう少しで着きますよ。よろしければ荷物をお持ちしますが……………」

ほのか「大丈夫大丈夫ー!!苑子、丈夫だからー!!」

なつじ「ほら、さっさと歩け」

苑子「ふえー……」

さいほの「アイスうまい」

苑子「あ、アイスだ。いーなあー」

さいほの「あげねえからな」

苑子「ケチー」

日本「着きましたよ」

ほのか「おー、おつきいー!!」

日本の家は和風でなんていうか……とても大きかった

なつじ「お邪魔しまーす」

さいほの「中也綺麗だな」

苑子「日本、って感じがするっぺ」

日本「じゃ案内しますね」

日本は私達を広い部屋に案内した

ほのか「おーっ」

日本「お茶持ってくるんでくつろいでてください」

さいほの「お構いなく」

日本は部屋を出ていった

苑子はごろんと床に寝転がり思いっきりくつろいだ

苑子「んー、ひろーい!!」

さいほの「はしたないぞ」

ほのか「……………あ!」

なつじ「どうしたクソ須」

ほのか「だまれもやし」

なつじ「もっ……………!？」

ほのか「それよりさ、この家探検してみない？」

さいほの「探検？」

苑子「苑子は賛成でありますっ!!」

苑子は手を挙げた

なつじ「探検してどうすんのさ」

ほのか「ちょっと確かめたいことがあってねー!まあ暇だから行くよっ!」

なつじ「んー、私は別にいいよ?」

さいほの「えっ!勝手にするのはちょっと……………」

ほのか「大丈夫っ！！日本には皆でトイレ行ってくて言っとくから！」

さいほの「んー……まあ暇だし……」

ほのか「よしっ！ではレッツゴー！！」

日本「丸聞こえですよ」

四人「ぬおわああああっ！！？」

部屋を出ていこうと襖を開けたらそこには呆れ顔の日本が立っていた

ほのか「え、いや、その………み、みんなでトイレに……」

日本「だから丸聞こえでしたよ……」

苑子「だ、ダメかなあ……？」

日本「申し訳ありませんが許可は出来ませんね。しかもこの家には悪霊がたくさんいるらしいので危険だそうです。イギリスさんいわく」

さいほの「あのツンデレ眉毛のことは気にしないでいいんじゃないか？じゃあ日本と一緒にまわる、っていう条件でどうだ？」

日本「そうですね……まあそれなら大丈夫ですね。」

なつじ「やったっ！！！」

日本「私から離れないようにしてくださいね？」

ほのか「ほーい」

日本「ここがお風呂場です」

さいほの「お風呂場って……露天風呂じゃないか……」

日本「露天風呂が好きなのです……」

ほのか「うひょーっ！！でけえ！！」

なつじ「黒須、叫び声がうざい」

苑子「あ、河童だ」

ほ・さ・な・日『何が見えてるんだ……』

さいほの「外見がでかいからわかってたけど広いな、この家」

日本「イギリスさんとかの家はもっと大きいですよ」

苑子「今度忍びこんでみよう」

なつじ「せんでいい、せんでいい」

ほのか「日本、私お願いがあるんだけどー」

日本「はい？何でしょう？」

ほのか「私日本の部屋が見たいナー」

日本「ダメです」

ほのか「即答かいな」

日本「私の部屋はダメです。散らかっているので………」

ほのか「私そついうの別に気にしないからレッツゴー……」

さいほの「えっ、ちよっ、わああああ………」

私はさいほの手を握り廊下を走っていった

日本「あっ………」

苑子「今のうちにレッツゴー……」

なつじ「いかねえよお前となんか」

苑子「……………（Ｔ・Ｔ）」

苑子は私達の後についていこうとなつじの手を握ったがなつじに振り払われてしまったそうなの

ほのか「さーて、出てこい悪霊！」

さいほの「目的は悪霊だったのか？」

ほのか「んなわけないよ！私の目的はただ一つ！大好きな日本の部屋を見ることがさっ」

大体部屋の中は想像できるけどね……………

さいほのと歩いていくとなんかこの先行ったら死にますよ的なオラが出てくる廊下があった

さいほの「なあ、これ以上進むのはやめないか？一応人の家だし……………」

ほのか「えー、でもこれから住む家だし大丈夫じゃね？」

さいほの「でも……………」

さいほはこの先の廊下を見て青ざめている

ほのか「……………はっはーん」

さいほの「な、なんだよ……………」

ほのか「さいほの、もしかして……………」

怖いんでしょう?」

私が言うとさいほのは顔を赤くして

さいほの「は、はあっ!?!何言ってるの!?!アホじゃない!?!」

なんかめちゃくちゃあせってるさいほの。

ぶっちゃけウケるw

ほのか「いや、めちゃくちゃビビってるっしょw」

さいほの「ビ、ビビってるねーっしゅ!?!」

ほのか「かんでるし」

さいほの「か、かんでねーし!?!今のわざとだし!?!」

ほのか「ツンデレめ」

とにかく行くぞ、と私がさいほのの手を掴んで引っ張るとさいほの

は絶対やーだー！！と私の手を振りほどこうとしている

こいつ、もう素が出てんな

苑子「くーろすー！！」

そんなとき、突如出てきた苑子は

さいほの「ぎゃっ！？」

ほのか「ぬおっ！！？」

さいほの体を力いっぱい押し、私とさいほの体はそのまま前に進んだ

日本「あ……………」

ほ・さ「うわあああああ……………」

私とさいほのは進んだ先にあった深く暗い穴に落ちてしまった

苑子「……………」

なつじ「何やってんだテメエ。やっちゃったって顔してんじゃねーよ」

日本「この先には穴があったんですねー……………メモメモ」

なつじ「しなくていいから。」

な・苑「つか知らなかったんかい」

その11 やっぱ和風な家は落ち着くわぁ（後書き）

なんも書くことはありませんw

感想よろしくお願いします！

番外編 日本とほのかi n うどん屋（前書き）

この人の胃はブラックホールですかっ！？

b y 日本

ほのかと日本メインでほのぼの？

恋愛とかは全然意識してません

だってこの小説はギャグ中心だからっ

番外編 日本とほのかiｾﾝうどん屋

こんにちは、日本です

今日はほのかさんと二人で最近できたおいしいと評判のうどん屋に
来ています

ほかの三人も誘ったのですが用事があるみたいだったので二人で来
ました

聞いたところほのかさんはうどんが大好きらしくとても楽しみなよ
うです

ということでしたうどん屋につきました

ここうどん屋はお店の人に注文すればすぐその場で注文したもの
が受け取れるというなんとも便利な店なのです

ほのか「うわぁー!!!日本、おいしそうだねっ!!!」

日本「そうですね。好きな物を好きなだけ食べていいですよ。」

ほのか「えっ、悪いよー……だって日本がお金出すんでしょ?」

日本「いえ、大丈夫です。ここのお店安いし……」

ほのか「そっかぁ……じゃあねー……」

ほのかさんはおぼんを持ってどれにするか迷っています

まあほのかさん女の子ですし、きっとそんなに食べないはず……

ほのか「えーと、じゃあかけうどんの大でっ!!」

えっ？

日本「け、結構食べられるんですね」

ほのか「んー？普通だよー!」

え、かけうどんの大って結構量が……

「はい、かけうどんの大だよっ」

ほのか「あ、ありがとうございます!」

「そっちの彼氏さんは何にするんだい？」

日本「えっ!？ち、違いますっ!!」

ほのか「私は光栄だけどなあ」

日本「はっ!？」

「で、何にするんだい？」

日本「あ、じゃあかけうどんの並で……………」

「あいよっ」

日本「ありがとうございます」

ほのかさんを見ると天ぷらが売っているコーナーでさつまいも天を
三つ……………

み、三つ！！？

日本「三つも食べるんですか！？」

ほのか「え、うん。ダメ？」

日本「いや大丈夫ですが……………そんなに食べて大丈夫なんですか？」

ほのか「全っ然」

日本「す……………すごいですね……………」

私はえび天を皿に乗せて先へ進む

レジでお金を払ってほのかさんの後を追う

ホントにこの店安すぎます

ほのか「あ、日本。はい箸」

日本「ありがとうございます」

ほのか「じゃいただきますーすっ!」

日本「いただきます」

ほのかさんはちゅるちゅると一本ずつうどんを食べてく

日本「一気に食べないんですか?」

ほのか「だって熱いしい……………」

ま、まさかの猫舌……

ほのかさんは次にさつまいも天をサクサクと食べはじめる

実にいい音です

私がずっと見ているとほのかさんは私に気づいた

ほのか「日本もいも天食べる?」

日本「えっ、でも……………」

ほのか「いいのっ!! 細い体してんだからちゃんと食べなさいっ!」

日本「むじっ!!」

ほのかさんはいきなり私の口にさつまいも天を突っ込みました

ほのか「ね? おいしいっしょ?」

日本「……………はい」

確かにサクサクしていておいしかったです

うーん、結構並でも量が多いですね…………

ほのか「ごちそうさまっ!!」

早っ!!

なんであんなに多い量をゆっくり食べてて10分近くで食べ終わるんですか……

ほのか「うーん、かけうどんの大より大きいやつってないのかなあ?」

まだ食えとっ!?

この人の胃はブラックホールですか!?

ほのか「うーん!おいしかったあっ!」

や、やっと食べ終わりました……

ほのか「日本、」

日本「は、はい」

ほのか「今日はありがとうねっ!!楽しかったぜ!!」

ほのかさんは飛びっきりの笑顔を私に向けた

その笑顔を見て、また二人で来たいなあと思いました

………作文?

終わ
り
っ

番外編 日本とほのかいっしょどん屋（後書き）

おまけ

ほのか「たっだいまあー!!」

さいほの「おかえり」

なつじ「どうだったあ？」

ほのか「うん、すごくおいしかったっ!!」

苑子「ヨカッタネー」

ほのか「なんでカタコト？あ、日本ー」

日本「はい？」

ほのか「おもち、食べていい？」

日本「……………」

今日学んだこと、

ほのかさんの胃はハンパない

おしまい；

感想・意見がありましたらよろしく願いします！

その12 レッスRPG!?(前書き)

ねっくらー

byなつじ

関係ありませんがアナログ放送終わっちゃいましたね……

少し寂しいです；

その12 レッツRPG!?

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほのが死にました」

ほのか「死んでないよ!？」

さいほの「お前も説明テキトーだな」

なつじ「日本ー、どうしよう。苑子が黒須とさいほの殺しちゃった
あ」

苑子「殺しとらんよ!？」

なつじ「えー、だって黒須とさいほの声が全っ然聞こえないしー」

苑子「……………どどどどうしよう日本……………」

日本「私に聞かないでください……………泣きそうな顔でこっち見ないでください」

なつじ「つかここ日本の家だろ？なんでここにでつかい穴があるってこと知らなかったんだ？」

日本「この先にはなんもないのであまり行かないし、イギリスさんにここには近付くと言われていたので……………」

苑子「ラッキーやな」

なつじ「お前のせいで黒須とさいほのは全然ラッキーじゃないけどな」

日本「菜摘さん、苑子さん結構気にしてるので傷を広げるようなことはやめてください……」

なつじ「大丈夫っす。コイツあんま傷付かないタイプなんで」

苑子「う、うん！グスン、全然、グスン、気にしてないよ！！」

日本「いやめちゃくちゃ気にしてるじゃないですか」

苑子「グスン……………それよりさ、黒須とさいほのどうする？」

なつじ「ほっというてよくね？」

苑子「ダメだろー！！」

なつじ「えー、でもこの穴が深くなけりゃはい上がれるんじゃない？」

苑子「えっ結構深そうだよ？黒須ううっ！！さいほのおおっ！！」

苑子は穴に向かって叫んでみる

日本「返事……きませんね」

なつじ「死んだんじゃない？」

苑子「こいつひでえっ！！」

なつじ「誰かさんのせいで」

苑子はそっぽをむいた

日本「それより助けに行った方がよろしいようですね」

なつじ「うーん、めんどくさいけど行くか。骨だけは拾ってやる」

苑子「あれ！？なんかいつのまにか死んだことになってるよ！？」

なつじ「まあ、問題はどっやっていくかだな」

苑子「え？この穴に飛び込めばいいじゃん」

なつじ「よし、お前最初に行け。そして死ね」

日本「この穴、見たところ結構深そうですしむやみに飛び込むのは危険かと……」

苑子「頭から落ちなきゃ大丈夫じゃね？」

なつじ「ホントお前いつぺん死ね」

苑子「さつきから死ね死ねうるさいよ！しばらくよ！？」

なつじ「やれるもんならやってみやがね。しばらくぞ」

苑子「あんだとゴラ。なめてんじゃねーぞ？」

なつじ「なめてねーよ。バカにしてんだ」

苑子「あゝあん！？」

日本「ふ、二人ともやめてください！苑子さんはキャラ崩壊してますよ！？」

苑子「いつもと変わんないと思うんだけどなー」

日本「変わりすぎですよ！今はそれどころじゃないですよ！？」

なつじ「確かに。早くしないと骨が……」

苑子「だから勝手に殺すな！」

日本「仕方ないですね。危険ですが穴に飛び込みましょう」

なつじ「了解。ってことで行け、苑子」

苑子「わっち！？ここは一番背が小さいなつじから……」

なつじ「れつつらー」

苑子「ぎゃあああああああ………」

苑子はなつじに背中を蹴られ暗い穴の中に落ちていった

なつじ「さーて次は日本行く？」

日本「お、お先に失礼します………」

なつじに突き落とされることを恐れた日本は自ら穴に落ちていった

一人になったなつじは小さな木箱（こつ……骨壺！？）を持って穴に入ってしまった

苑子「ふっ！」

苑子は水の中に落ちた

どうやらあの穴の下は水らしい

苑子「っーか今回の語り、誰がやってんだろ………」

作者です

いつもの語りが不在なので

苑子「へーそうなん…。で、ここは……」

日本「うわああああ!」

苑子「ぶごっ!」

バsshャーーン!!

突然降ってきた日本は苑子の頭の上に落ちた

日本「げほっ……み、水でしたか……でもなんかいたよう……な……」

そついう日本の近くには苑子が浮いていた

日本「うわああ!？そ、苑子さん!？大丈夫ですか!？」

浮かんでいる苑子は手を出し親指をつきあげてグッジョップしてる

日本「いや意味わかりませんよ!!何がしたいんですかあなたは!」

苑子「ボケです」

日本「自分で言っちゃいましたよこの人!!」

苑子「いやー、それにしても死ぬかと思った」

日本「真顔で言わないでください」

なつじ「なつじアターーック!!」

苑子「ひでぶっ!!」

日本とコントをしている苑子の上に満面の笑顔のなつじが落ちてきた

日本「苑子さあぁんっ!!」

なつじ「あ、苑子いたの？邪魔だよ？」

日本「な、なんてひどいんですかあなたは!」

なつじ「さっきから思ってたんだけど日本、ツッコミの才能あるよ」
「」

日本「嬉しくないです。いつもツッコんでくれるほのかさんとさいほのさんがいないから……」

苑子「Wほのかいないと大変だね。結構」

なつじ「チッ、生きてたか」

苑子「ひでえ!!」

日本「さて、とりあえず水から上がりますか。今気づいたんですが

この水、地下に流れてる汚い水です」

日本の言葉を聞いて、苑子となつじは硬直した

なつじ「うつわくさっ」

苑子「くしゃい」

日本「仕方ありませんよ。早く二人を見つけてお風呂に入りたいです……………」

苑子「……………ん？日本、何あれ」

苑子が指差した方を見ると…………

なつじ「…………何あれ」

日本「まさかの悪霊じゃないですか？」

悪霊はじつと三人を見ている

日本「菜摘さん、苑子さん」

なつじ「ん？」

日本「これからやること、わかってますか？」

苑子「うん。じゃ今から3秒後にいくよ？」

なつじ「1、2、3……」

な・そ・日「逃げるが勝ちiiiiiii!!」

三人は一斉に駆け出した

ほのか「さいほのー、お腹空いたよー」

さいほの「仕方ないだろ。だいたいこんなことになったのは誰のせいだと思ってるんだ」

ほのか「苑子」

さいほの「……………そういえばそうだった」

私達は暗い道？に座り込んでいた

さつき汚い水に落ちたせいで服は臭いし……………

お腹は空いたし……………

ほのか「どうしよさいほの。このままここから出られなくて餓死してそのまま骨だけに……………」

さいほの「ネガティブだなおい！！諦めんな！どっかに出口があるかもしれないだろ！ほら、立て」

ほのか「やだ疲れた。おんぶ」

さいほの「ちっ……………」

さいほのは私をおぶった

さいほの「…………黒須」

ほのか「ん？」

さいほの「太った？」

ほのか「黙れ。首切られなくなかったらな」

私はさいほのの首に持ってた小刀の刃をあてる

さいほの「はいはい」

さいほのは歩きはじめる

さいほの「無理。重い、自分で歩いて」

ほのか「お前後で覚えてるよ」

私は仕方なくさいほのから降りて歩く

さいほの「……………ん？」

ほのか「どしたの？」

さいほの「あれ、何だろ」

さいほのが見ている方を見るとなんか黒くてモヤモヤしてる大きい物体がいた

ほのか「うわっキモ。まさか悪霊？」

さいほの「そうっぽくないか？」

黒くてモヤモヤした物体は赤く光る瞳を私達に向けた

さいほの「……………なんかやばくないか？」

ほのか「え、そう？」

黒くてモヤモヤした物体はいきなり私達に向かって突進してきた

その12 レッツRPG!?(後書き)

主人公達のくせ

ほのか……爪を噛む、気がつけば笑ってる

さいほの……気がつけばミスチルの話

なつじ……パニックになるとその場でくるくる回る、よくコケる

苑子……いつもの表情が笑顔、暇だと寝る

感想・意見お願いします

その13 やっぱり逃げるが勝ち（前書き）

くせだよー！

直せ今すぐー！

byほのか・さいほの

夏休みだからなるべく早く投稿したかったんですが……

部活とかの影響で遅れてしまいました；

でもそのかわり長いです！

その13 やっぱり逃げるが勝ち

なつじ「なんだかんだで黒須とさいほの骨を拾いに行くべく私と日本とカスは穴に飛び込むのだった……」

ほ・さ「勝手に殺すな!!」

苑子「カツ……カス!!?」

ほ・さ「ぎゃああああああ!!」

こんにちは、黒須です。

え?なぜ叫び声を上げてるかって?

人間、叫びたい時だってありますよ

すいません、嘘です

まあなんで叫んでるかかっていうと生きてるからです

ん？もうちょっと細かく？めんどくさいなー……

声が出るからです

え、なになに？あんまふざけてっとしばくぞだって？ふざけてなんかいやせんぜ。本当のことを言っただけです

さいほの「黒須、何ぶつぶつ言ってるの？」

ほのか「え、さいほの私の心の中読んだ！？テレパシー！？」

さいほの「思いつき言葉にしてたぞ。今は逃げることに集中しろ。死にたくなかったらな」

はい、私達は今逃げています

え、なんでかって？

前の話を見るアホ。

さいほの「おい、読者減らす気か」

ほのか「どうせ誰も見てねーだろ。あれ？」

さいほの「どした？」

ほのか「追い掛けて来てないよ？」

後ろを見るとさっきまですごい勢いで追い掛けて来ていた悪霊はいなかった

さいほの「お、危機一髪だ。さ、早くここから出よう」

ほのか「おう。さーて出口はどこかなー？」

私が足を踏み出したその時だった

ドオオオオンー！

ほのか「（。。。）！ー！」

さいほの「（ノ。〇。）ノー！ー！」

私とさいほの前にいきなりさっきの悪霊が現れた

赤い光を放つ瞳が私達を見る

さいほの「なっ……………」

ほのか「ぎゃああああああー！ー！」

さいほの「えっ、ちよっ、うわあああ……………」

私は無意識にさいほの腕を掴み全速力で駆け出していた

ほのか「ちょっ……なんているんだよおお!!まるでホラーじゃねーか!!」

さいほの「知らねーよ!!つかなんでお前は逃げるとき必ず私の腕を握るんだよ!!しかもめっちゃ強い力で!!」

ほのか「くせだよ!!」

さいほの「直せ今すぐ!!」

ほのか「とりあえず走れええええ!!」

私達は迷路みたいな地下を全速力で走る

私達が角を曲がった瞬間、目の前に悪霊が現れた

さいほの「うわぁっ!!来た!!」

ほのか「も、戻ろう!!」

私とさいほのはUターンしてまた走り出した

が、地面が濡れていたから私はすべった

さいほの「お前ダセエな」

ほのか「ひでえっ！助けるよ！ほら、今にも襲い掛かってきそうだよ！！！」

さいほの「さらば、君のことは忘れないよ。って、くばっ!」

私は走ろうとしたさいほの足を掴み転ばした

「ほのか お前も道連れじゃ」

さいほの「なっ、離せええええええ！」

ほのか「誰が離すか！！私が死んでお前が生きてるなんて納得できるか！！」

さいほの「なんだよその理由！！いいから離せ！！」は・な・せつ

「ほのか、道連れ言うところやろ！」

私達がごちゃごちゃ言つてゐる間に悪霊は黒くモヤモヤした手と思われけるものを私達にのばしてくる

さいほの「わ、わ！死ぬ！たぶん死ぬ！絶対死ぬ！」

「ほのかは、ざまあ！」

さいほの「お前も死ぬだろ」

悪霊の手が私の体に触れようとした瞬間

悪霊の前に突然人が現れて銀色に光る武器で悪霊を真つ二つに斬った

悪霊は斬った所から消えていった

ほのか「……………へ？」

さいほの「……………ほ？」

日本「お二人共、大丈夫ですか？」

そこに立っていたのは片手に刀を持った日本だった

さいほの「に、日本！？なんでここに……………！？」

なつじ「どっかの誰かさんがほのかとさいほのを落としちゃったから追ってきたんだよ？」

ほのか「なつじ！！……………と苑子」

苑子「え、何その付け加えられた感じ」

日本「さて、全員揃いましたしここから出ましょうか」

ほのか「え、でもどうやって？」

日本「歩き回ってれば着きますよ、きっと」

さいほの「曖昧だな……」

苑子「隊長！また悪霊が来ました！」

なつじ「隊長誰だよ」

日本「やはりそう簡単には出られませんか……」

日本はまた刀を構える

うん、カッコイイ

なつじ「顔がキモいよ」

ほのか「黙ってようか」

日本は目の前に来た悪霊を簡単に切り払った

さいほの「強っ！でも進むたびに襲われてちゃ大変だよな」

日本「仕方ありませんね。みなさん、走りますよ」

苑子「え、日本は大丈夫なの？」

日本「爺だつてやるときはやりますよ」

日本はにっこりと笑う

ほか「うわっ、また来た!!」

日本「行きますよ!!」

なつじ「おーいえー」

私達は床がぬけているのですべらないように気をつけながら走った

全速力で走ったが悪霊はどんどん私達との距離を縮めている

さいほの「くっそ……………追いつかれるぞ!!」

苑子「ど、どうすんのさ日本!!」

なつじ「なんか除霊とか出来ないの!？」

日本「あ、その手がありましたか!!」

ほか「できるんかい」

日本「はい、イギリスさんから一応除霊するための方法などは教わっています。」

なつじ「イギリス、出番ねーくせに陰で活躍してるね」

さいほの「よし、じゃあ今すぐやれ」

日本「唐突ですね。やりたいのはやまやまなのですが除霊をするにはかなりの時間と広い場所が必要です」

ほのか「それは難しいね……………」

苑子「え、普通にできんじゃない」

なつじ「バカ。お前はホントにバカ。キングオブバカ!!」

苑子「そんなにバカバカ言わないでよ!!!; 傷つくんだけど!!!;」

さいほの「いや普通にバカだろ。この状況で出来ると思うか?」

苑子「うん、思う」

ほのか「こいつバカじゃない、大バカだ」

日本「でも除霊をすることによってこの地下にいる全部の悪霊を掃うことができると思われます」

なつじ「な、なんて便利なんざましよう!!」

さいほの「どっかの主婦か、君は」

ほのか「あ、日本!! なんか雇見つけたよ!!」

苑子「で、出口!？」

日本「とりあえず中に入りましょう!!」

日本が扉を開け私達は中に入り込んですぐに扉を閉めて鍵もかける

ほのか「ここは……………部屋？」

中は地下にもかかわらず普通のうす暗い部屋だった

さいほの「地下なのに部屋？日本の家って複雑怪奇だな」

日本「私にとっては欧米文化の方が複雑怪奇なのですが……………」

苑子「そんなことより日本、ここならできるんじゃない？除霊」

なつじ「さ、さっきまでバカだった苑子がまともな意見を……………
！？」

苑子「そろそろ怒るよ？」

日本「確かにまともな意見ですね……………。やってみますか」

苑子「に、日本まで……………」

日本はお札のようなものを取りだした

そしてぶつぶつと呪文のようなものを言いはじめる

ドンドンッ！！

さいほの「ちっ、来たか!!」

苑子「わわわ、どうしよう日本!!」

日本「……………」

日本は苑子の言葉を無視した

苑子「シカトっすか!？」

なつじ「違うよ大バカ野郎!!日本、集中してるからお前の声なんて聞こえないんだよ!」

確かに日本は目を閉じてずっと呪文を唱えている

かなり集中しているようだ

苑子「……………よしっ!」

さいほの「藪崎?」

苑子「日本ががんばってるんだから、ちゃんとそれに集中できるように私達もがんばりますかっ」

なつじ「苑子……………お前、ただのバカだと思ってたがちゃんと頭も使えるみたいだな」

苑子「ふふっ、私だって本気だせばこんなの朝飯前だよ」

さいほの「私も同感だぞ、藪崎」

ほのか「私もっ」

苑子を先頭に私達は扉の前に並ぶ

私は小刀、さいほのははさみ、なつじはのこぎり（なんで持ってる！？byさいほ）、苑子は彫刻刀を手に持ち準備を整える

苑子がドアノブに手をかけ私達に目で合図をする

全員地了解を得た苑子は力いっぱいドアノブを回した

そして壊した

「「「「.....」」」」

ちらつと見たらわからないがよく見ると黒くモヤモヤした……

ほのか「って悪霊!？」

なつじ「この部屋に入ろうとしてるみたいだね、さすが悪霊」

ほのか「感心してる場合ですかっ!？」

苑子「日本!！」

日本はまだ呪文を唱えている

さつきまではぶつぶつとしか聞こえなかったが今ははっきりと聞こえている

さいほの「たぶんもう少して除霊できるかもしれない! 私達もできるかぎりのことをするぞ!！」

さいほのははさみで壁からでてきている悪霊の手を刺す

悪霊は手を激しく動かしさいほのをはらう

さいほのはその勢いで壁にたたきつけられた

さいほの「ぐっ!！」

ほのか「さいほの!！」

さいほのは痛そうに顔を歪める

さいほのはしばらくは動けそうにない

それなのに悪霊はあっさりと部屋の中に入ってきた

苑子「えええっ！？なんてあっさりと！！」

悪霊はとても素早い動きで日本に突進していった

なつじ「日本っ！！」

しかし悪霊が日本に攻撃する瞬間、日本から凄まじい風が吹き暗い部屋が一気に明るくなった

悪霊はそのせいで日本に近寄れなくなっている

日本「去れ、悪しき霊達よ……………」

日本が呟いた瞬間、目の前にいた悪霊は消え辺り一面を白い光りが

包み込んだ

ほのか「ほえ？」

光りが消えたと思うと、そこはさっきと変わらない暗い部屋だった

部屋の真ん中には日本が立っている

私の近くではさいほの達もいる

日本「ふう、除霊完了です」

苑子「マジか！？すげえ！！」

さいほの「じゃあもう出てこないんだな」

日本「はい、もういないはずですよ」

なつじ「よかったー……」

ほのか「さすが日本だね！！」

日本「ありがとうございます。さ、早く家にもどりましょうか」

日本はドアの方に歩いていき、ドアノブを握ろうとする

日本「……………え？」

なつじ「どしたの日本？」

日本「ドアノブが……………ありません」

四人「……………あ」

そう、さっきの苑子のばか力でドアノブは壊れてしまったのだ

つまり

「「「「「出られない……………」「「「「」

いろんな意味でピンチなのだった

さいほの「や、やっと出られた……」

ほのか「なにもかも全部苑子のせいだよ」

苑子「え！？ちゃうよ！？」

なつじ「いや、お前だろ」

日本「出口がすぐ見つかったですね……」

私達はなんだかんだあの部屋を出て、そしてまたなんだかんだで出口を見つけて家に帰って来れたのだ

日本「みなさん、お先にお風呂どうぞ。私は着替えてきます」

ほのか「わ、ありがとう！！」

苑子「行こうなつじ！！」

なつじ「いや」

苑子「え！？」

さいほの「早く行け」

四人は風呂場に走っていった

苑子「いい湯ーだーなー」

なつじ「古っ」

ほのか「気持ちいいー！」

さいほの「広いな。泳げるよ」

ほのか「泳ぐな」

日本『着替え、置いときますねー！！』

なつじ「あ、はい！！」

苑子「そろそろ出よっか」

さいほの「……………なんだこれは」

ほのか「え？何が？」

先に出たさいほのが置いてあった着替えを見て言った

なつじ「何って……………うわっ」

なつじもそれを見てすごく嫌な顔をした

苑子「何ター？……………え」

あの苑子まで驚いている

なんだか知りたかったので三人の所に行った

ほのか「……………ええ……………」

そして驚いた

日本がさつき着替えと行って置いてったものは

四人「メイド服……………？」

あの人は私達にコスプレさせるらしい………

私達、日本の家でうまくやってけるかなあ………

その13 やっぱり逃げるが勝ち（後書き）

おまけ ほのかとなつじ

ほのか「そういえばさなつじ、なんかいつのまに私のことほのかって呼ぶようになったよね？なんで？確か前まで黒須つつ呼んでたよね？」

なつじ「んー？成り行きだよ？」

ほのか「な、成り行き？」

さいほの「じゃ私も名前呼びにして！」

なつじ「ほのかとかぶるからダメ」

さいほの「……………」

名前がほのか

あだ名を変えてもらえないかわいそうなさいほのであった

感想・意見がありましたらよろしく願いします！

質問とかがあったらどんどん聞いてください！

その14 夏は暑いのだ (前書き)

くたばれエロじじい！

by ほのか、さいほの、なつじ、苑子

夏休み編です！

一応、長編の予定です

その14 夏は暑いのだ

私達は日本の家でダラダラしていた

今は夏でとても暑いから扇風機をまわしてそれぞれ好きなことをやっている

しかしそんな平和な空間はほどなくしてある人物にぶっ壊されるのであった

アメリカ「みんなーっ！！夏なんだぞーっ！！」

なつじ「知ってるよ消え失せるカス」

アメリカ「……………」

苑子「なつじの毒舌が夏になってパワーアップしてるよ」

ほのか「暑さのせいでイライラしてるからね」

さいほの「今敵にまわすのは危険だね」

なつじのパワーアップした毒舌をあびせられたアメリカは太陽の下で立ち尽くす

日本「みなさんスイカ切ってきた……………ってアメリカさん？」

日本は自分の庭で立ち尽くしている汗ダラダラのアメリカを見て驚く

苑子「スイカスイカー」

苑子は日本が持っている皿の上からスイカを一つとってかぶりつく

日本「ア、アメリカさん？何やってるんですかそんなところで……

…」

アメリカ「ああ、日本……俺って死んだ方がいいのかな……？」

日本「何があっただんですかアメリカさああん！！」

ほのか「なつじがやったんだよ」

なつじ「違うし、ちょっとお話したけだし」

さいほの「お話ただけであんなになるか？」

なつじ「なるなる」

苑子「ならねーだろ」

日本「と、とにかく中に入ってください。」

アメリカ「いいんだ……このまま立ち続けて倒れて死んじゃっても俺は別にいいんだ……」

日本「菜摘さん、あなたホント何したんですか。アメリカさん精神的に大ダメージくらっちゃってますよ」

苑子「イギリスのスコーンなみに攻撃力がばねえ」

なつじ「だからホントにちよつとからかったただけだってば」

さいほの「もういいから引きずって中いれるぞ」

ほのか「うん、よいしょ」

苑子「汗ダラダラじゃんっ!!ぬれてるよ!!」

さいほの「我慢しろ」

アメリカは私と苑子が無事、回収しました

アメリカ「うはー、涼しいんだぞー!!」

ほのか「なんでクーラーつけてんの?節電……」

日本「その話はなしの方向で……」

苑子「東北、早く復興できるといいねー……」

さいほの「そうだな、原発もなんとかしてほしいな」

なつじ「というわけで私達は東北地方の方々を心から応援しています。」

ほのか「クーラーががんの部屋にいる人達と言えることじゃないよね」

日本「そういえばアメリカさんは何故私の家に？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「アメリカさん、話聞いてます？」

アメリカ「スイカうまうま」

日本「……………そろそろ斬りますよ？」

アメリカ「でさ、今は夏真っ盛りじゃないか！」

ほのか「うわ、めっちゃ早口なんだけど！聞き取れなかったんだけど！」

なつじ「スイカの種がめっちゃ飛んできたわ。苑子、アメリカから飛んできた種もろ受けてるし」

さいほの「もう一回言ってくんない？」

アメリカ「こんな暑い中だとイライラして頭もおかしくなっちゃうだろ！？」

苑子「ダメだコイツ人の話聞いてねえ」

ほのか「私のイライラの原因、ほとんどアメリカなんだけど」

さ・な・苑・日「同感」

アメリカ「だからみんなで夏らしい……………」

なつじ「ゆつくりしゃべんなかったらハンバーガー没収な」

アメリカ「だ〜から〜み〜ん〜な〜で〜……………」

さいほの「ねえコイツ殴っていい？」

アメリカ「だ、か、ら、み、ん、な、で」

苑子「うん、次ぶざけたらぶっ飛ばすから」

アメリカ「で、だからみんなで夏らしいことをしようじゃないか！」

日本「やつとまともに……………」

ほのか「最初っからそうしろよ」

アメリカ「ってことでみんなで海に行くんだぞ！」

さいほの「あー、海か……………」

全員「って、海!?!」

アメリカ「うん、海。輝く海なんだぞ」

なつじ「それはわかるけどさ、なんで海？ほかに夏らしいことあるっしょ。祭とか」

アメリカ「だってフランスが『夏は海しかねーだろ！』って……………」

さいほの「あいついつか殺す」

苑子「絶対なんかたくらんでるよね」

ほのか「ありえる。でも海、いいかもね！」
さ・な・そ「え」

ほのか「だって家でダラダラするよりさ、みんなで遊びに行った方が楽しいと思わない？」

苑子「まーそうだけど…」

さいほの「海に行くことに反対はしていないが私達、水着持ってないぞ？」

ほのか「……………あ」

なつじ「でも荷物の中に学校のスクール水着が入ってたよ」

ほのか「ま、それでいいか」

フランス「断固反対iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

日本「わあっ!?!」

さいほの「お前どっから出てきてんだよ」

フランスはいきなり庭にある池から飛び出してきた

なつじ「つかなんて格好してんだよお前!?!」

しかも全裸で

ほのか「うわっ!?!お前そんなに自分の肌を他人に見せたいのかよ!?!変態だ、こいつ変態だよ!?!」

苑子「おまわりさああん!?!ここに变な、いや変態がいますううううう!?!」

フランス「警察呼ばないでよ!?!」

日本「なんでフランスさん全裸なんですか」

フランス「お兄さんスタイルだからかな」

日本「一度、病院に行かれた方がよいと思います」

アメリカ「日本、いつものハッ橋どっかいつちやってるんだぞ」

フランス「とにかく、お兄さんはスクール水着は断固反対です!?!」

さいほの「なんでだよ」

フランス「だってスクール水着とかはポロリとかが……」

ほ・さ・な・苑「くたばれエロじじい！いいいいいい！！！！」

フランス「ぐはっ！！」

フランスは四人に撃退されて、池に沈められたとさ

続く

その14 夏は暑いのだ (後書き)

くおまけく

イタリア「……………ドイツ」

ドイツ「なんだ？」

イタリア「あんまり言いたくないんだけど……………」

ドイツ「……………」

イタリア「……………出番欲しいよー!!」

ドイツ「それはみんなもだ」

イギリス「なんでフランスが出て俺は出ないんだよばかあつ!!」

ロシア「フランスくん、あれ出たっていえるの？最後死んでたよね？」

中国「フランスはああいうキャラある。オチ担当のキャラある」

というわけが出番のないキャラの雑談でした

その15 水着選びは大事（前書き）

釘バットが一番しっくりくる

by なつじ

いやぁ……夏ですねぇ……

宿題………終わんねえよ………

その15 水着選びは大事

アメリカ「でも、スクール水着で海って恥ずかしいかい？」

さいほの「んーまあ確かに……」

なつじ「まあ小学校の水着みたいに名前が堂々と書いてないのはいけどね」

苑子「でもぶつちやけ地味だね」

ほのか「ちつ、めんどくさいけど買いに行くか」

私は立ち上がって、池に浮かんでいる死体を「死んでないよ!?(フランス)」見る

ほのか「アメリカ」

アメリカ「ん?なんだい?」

ほのか「フランスを鎖でぐるぐる巻きにしてあとこのお清めの札をフランスに張って庭にある蔵の奥深くにある古い箱にいれてしっかり鍵をかけてきて」

アメリカ「任せるんだぞ!」

苑子「了解しちゃうのかよ!」

アメリカは池に浮かんでる死体という名のフランスを担ぎ蔵へと走って行った

ほのか「よしっ、邪魔者もいなくなったことだし買いに行くか!!」

さいほの「いなくなっただっていうか封じたよね」

ほのか「あいつは封印するべきなんだよ。わかってくれ」

なつじ「封印っつーか完全に死ぬだろ」

ほのか「気にしない、気にしない」

日本「気にしてください……」

ほのか「さー、行くぞー てことで日本、どこで ドア出して」

日本「当たり前のように言わないでください」

苑子「うーん、やっぱショッピングモールとか涼しーねー」

私達はなんだかんだで近くの大きいショッピングモールに到着し、水着売場に来ている

なつじ「さ、さつさと選んで帰っぞ」

なつじは大人の水着を見始める

苑子「あれ？なつじは子供用の水着売場を見るべきなんじゃない？」

なつじ「ぶっ殺すぞ」

ほのか「さいほの、これ似合っんじゃない？」

そう言って私はさいほのに水色のフリフリワンピースの水着を見せる

さいほの「えー……ちょっと子供みたいじゃないか？なつじならまだしも……」

なつじ「みんなそろって殺されたいの？」

釘バットを握るなつじ

日本「菜摘さん、釘バットって古い……」

なつじ「釘バットが一番しっくりくる」

日本「答えになってませんよ……」

アメリカ「お腹空いたんだぞ……」

ほのか「アメリカは水着買わないの？」

私はお腹が空いて少し元気がないアメリカに聞く

アメリカ「俺かい？俺は去年とかなので大丈夫……………」

「なーにが大丈夫だ」

苑子「わ、イギリスじゃん」

アメリカの隣には久々の登場、ツンデレ眉毛のイギリスがいた

イギリス「ツンデレ眉毛ってなんだばかあ！！」

ほか「語りに文句つけないでよー。私あんま国語得意じゃないからこういうの苦手で……………」

イギリス「苦手とか得意じゃないの問題じゃないだろ！」

なつじ「なんでいんのイギリス？」

イギリス「水着を買いにな……………つかお前、物騒なもん持ってんなあ……………」

なつじが持つ釘バットに軽く引くイギリス

さいほの「太って入らなくなったか？」

イギリス「ちげーよ、もうそろそろ変えた方がいいと思ったただけだ。んでアメリカ、お前去年の水着が着れると思ってんじゃねーぞ……………」

アメリカ「ど、どうということだい？」

イギリス「そのまんまの意味だ。お前去年と比べて結構太っただろ」

アメリカ「そういえばお腹が出てきたような……」

アメリカは自分の腹を見て少し不安そうに言った

イギリス「だから買い替えた方がいいぞ」

アメリカ「イギリスのおごりがいいんだぞ」

イギリス「誰がおごるかバカ」

イギリスとアメリカは二人で男性用の水着売場に歩いていった

ほのか「日本は買わなくて大丈夫？」

日本「私は泳がないので……」

さいほの「えー、なんでだよー。せっかくの海なんだから泳ごうぜ
っ」

なつじ「さ、さいほのがめずらしく マークを……」

苑子「明日は雪が降るね」

さいほの「そんなにダメか？ダメなのか？」

さいほのは少し落ち込む

ほのか「みんなで泳いだ方が楽しいでしょ？ほら、買った買った！」

私は日本の背中をおす

日本「え、でも今貯めてるお金は夏コミのための……………」
ほのか「はよ行け」

日本「……………はい」

日本は渋々アメリカ達の所へ歩いていった

しっかし水着種類いっぱいあんなあ……………
迷う……………

なつじ「水着、ワンピース系のやつで大丈夫だよね？」

苑子「うん、まあそうだよね」

アメリカ「買ってきたんだぞー！！」

さいほの「早っ！！」

アメリカが袋を持って笑顔で帰ってきた

ほのか「イギリスと日本は？」

アメリカ「まだ買ってなかったから置いてきたんだぞー！！」

ほのか「ほー」

なつじ「苑子、これいいと思わない？」

苑子「あ、いいねー！！それでいいんじゃない？」

なつじ「そーだね。買ってくる」

なつじは黄色のワンピースの水着を持ってレジへと走る

しかしそのなつじの前に

フランス「ワンピース断固反対iiiiiiii!」

なつじ「ぎゃああああああ!」

変態が現れた

さいほの「なんでお前いんだよ、ちゃんと封印したはずじゃ……

…」

イギリス「お前ら、コイツ封印したのか………」

苑子「わああ、いつの間に」

いきなり現れたイギリス&日本。

日本「はい、買い物邪魔になると思ったので………」

フランス「今、お兄さんすごく傷ついたんだけど………」

ちょっと涙目になったフランス

アメリカ「それにしてもよく抜け出せたねー!」

フランス「お兄さんに出来ないことはないからね」

ほのか「次はもっと頑丈にするか」

フランス「やめてやめて!!」

さいほの「お前ワンピース断固反対ってじゃあビキニにしろってか？」

フランス「その通り!!」

なつじ「やだよー、私ワンピースがいい」

フランス「ダメだあつ!!ワンピースもポロリがない……………」

ほ・さ・な・そ「くたばれえええ!!」

フランスはまた四人にボコボコにされたとき

その15 水着選びは大事（後書き）

くおまけく

中国「なんであへんに出番があつて我にはないあるかあああああ
！！」

ドイツ「落ち着け中国！！」

ロシア「中国くん、君だけじゃないんだよ？出番がないのは」

イタリア「ヴェ……………」

またまた出番がない人のトーク

イギリスは無事脱出できたようです

その16 目的地まで行く時が1番楽しい(前書き)

なんか……周りがすごく綺麗に見える……!!

byイギリス

気付いたら8月の後半になっていた……

し、宿題……;;

その16 目的地まで行く時が1番楽しい

さいほの「もう集合時間だぞー!」

ほのか「苑子が起きないからー!」

なつじ「そうだよー」

苑子「だって眠かったんだもん……」

日本「は、はあ……はあ……」

私達は走っていた。

本当は8時に駅に集合(どこ? っていう質問はなしで)のはずだったのだが、家を出たのは集合時間の3分前。家から駅まで行くのにかかる時間は約15分。つまり完ぺきに間に合わないのだ。

遅刻したら絶対ドイツに怒られるよ……

ほのか「つ、疲れた……」

さいほの「朝ごはん食べてないし……」

苑子「なんでこんなことに……」

なつじ「お前のせいだろ」

日本「ぜえ……はあ……」

ていうか日本さっきからしゃべってないよね？しゃべってるみたいになってるけど」「の中、息の音だよね？

さいほの「あ、駅がみえてきた！！」

なつじ「家から駅まで走れば8分ちよつと……っ」と

苑子「メモせんでええわ」

ほのか「とにかく走るぞーっ！！」

私達は体力に限界が近付いている日本の手を引き、駅まで全速力で走って行った。

イタリア「ヴェ……来ないね……」

イタリアは駅前に立ってる銅像の台に座って心配そうに呟く

ドイツ「ああ……もう集合時間から5分たっているのだが……」

ドイツも腕時計を見て言う

イギリス「寝坊か？」

アメリカ「俺は楽しみで眠れなかったんだぞ!!」

フランス「ホントお前は子供だなあw」

中国「それよりフランス、お前なんでそんなに傷だらけあるか」

ロシア「中国くん、それはふれちゃいけない所だよ。」

フランス「大丈夫さ!いずれ消えるのさ」

イギリス「漫画とかだといつの間に傷とかが治ってるよな」

アメリカ「お決まりなんだぞ!」

イタリア「ヴェ……?あ、あれ日本達じゃ……」

イタリアは指を差して問う

イタリアが指差した方向を見ると全速力で走る少女四人とその少女達に腕を引かれながら苦しそうだが必死に走っている青年がいた

中国「ほのか達ある!」

ロシア「あの五人、かなり汗だく……」

ほのか「ぜえ……………遅れて……………はあ……………ゴメ…ゲホッゴホッ!!」

ドイツ「と、とりあえず息を整えてから話せ!」

私達はとりあえず深呼吸をする

ある程度、落ち着いたので私は話しはじめた

(日本はまだつらそうだが)

ほのか「いやあ遅れてゴメン。苑子が昨日の夜に遅くまでアニメ見てたから朝起きれなくて私達四人で必死に苑子を起こしたんだけど苑子がやっと起きたのは7時50分。そこから準備やらなんやかんやをして、家を出たのが7時57分なんですぜ、旦那」

中国「つまり原因は苑子あるね?」

苑子「録画をする機械が壊れちゃってリアルタイムで見るしかなかつたんだよ……………」

ほのか「私も見たかったよ……………夏 友人帳。どーだった?」

苑子「お腹が痛くてトイレずっと入ってたから見過ごした」

ほのか「意味ねーじゃん。つかどんだけトイレいたんだよ」

ドイツ「まあ行くか」

なつじ「あれ?説教とかしないの?よかつ……………」

ドイツ「してほしいか?」

ニヤリと笑うドイツ
不気味すぎますぜ隊長

なつじ「滅相もございません」

DSなドイツにはDSななつじも恐れてしまうのだった

そして私達は切符を買い、電車に乗り込む

さいほの「何分くらいで着く?」

フランス「2時間ちよつとかな?」

長いなオイ。

まあ暇なのでー……

ほのか「なんかよくわからんゲームウー!!」

苑子「イエーイツ!!」

苑子だけのつてくれた

ありがとう苑子。

日本「なんかよくわからないゲーム……と言いますと?」

よくぞ聞いてくれた日本

私はどこからか箱を取り出し説明を始める

ほのか「まずココに箱があります。この中には様々な罰ゲームが書かれた紙が大量に入っています。じゃんけんで負けた人はこの箱の中の紙を一枚ひき、紙に書かれている罰ゲームに従ってもらおうというゲームです。ちなみにじゃんけんに負けた人に拒否権はありませんのでそこらへんは理解してくださいまし」

なつじ「ほう、なんかおもしろそうだな。やるか！」

なつじはやる気満々だ

イギリス「でも俺は……「最初はグーッ！じゃーんけーんポイツ！」話聞けよー！」

全員が手を出す

イギリスがグー、それ以外の人はパーだった。

ほのか「さあイギリス、ひきなさい」

イギリス「俺かよ……」

イギリスは嫌そうに箱に手を突っ込み、三角に折られた髪を一枚取り出す

それを私は受け取って内容を読み上げた

ほのか「『右隣の人を10分間見つめ続ける』だってさ」

イギリスは反射的に右隣を見る。

イギリスの右隣に座っているのは…………

イギリス「……フランス……………」

イギリスは思いっきり嫌そうな顔をする

フランス「うふふ、お兄さんドキドキしちゃう」

イギリス「気持ち悪いんだよ！！嫌だこんな……………」

ほのか「拒否権はないのよイギリス？」

私はイギリスの耳元であることを囁いた

聞き終わった途端イギリスの顔がどんどん青ざめていく

ほのか「これをばらされなくなったら従うことね」

イギリスは涙目になりながらフランスを見つめ始めた。
(というか睨んでいる)

ほのか「さー、始めましょー」

全員「(コイツはイギリスに何言っただ……………」

イギリス「っておい、俺はフランスを見たままじゃんけんすんのか？」

ほのか「もちのろん」

イギリス「ど、どうやれと……………」

ほのか「はい、じゃーんけーん」だから話聞け！！」ポイツ！！」

イギリス、チヨキ

それ以外、グー

イギリス「またかよ！！」

アメリカ「運悪すぎなんだぞ」

なつじ「さあ引け」

イギリス「チツ……………」

イギリスは紙を引き、私に手渡す。

ほのか「えーっと……………」『最高のキメ顔をする』だって」

イギリス「なんで俺が引くやつは恥ずかしいのばかりなんだよ！！」

顔を真っ赤にしてキレルイギリス。

イタリア「イギリス、罰ゲームっていうのは大体恥ずかしいことなんじゃないかな」

イギリス「つーか俺、フランス見たままキメ顔すんのか!？」

苑子「じゃあ30秒だけ見ないでいいよ」

イギリスはフランスから眼を放す

イギリス「なんか……………周りがすごく綺麗に見える……………!!」

フランス「どういうことだゴラ」

ロシア「じゃ、最高のキメ顔をどーぞ」

イギリスは戸惑いつつも自分では最高のつもりのキメ顔をした

イギリス「……………何笑いこらえてんだよ!」

全員、必死に笑いをこらえていた

ドイツ「い、いや……………笑いなど……………こらえてないぞ……………ククッ……………」

さいほの「フフッ……………」

ほのか「……………プッ」

イギリス「……………やらなきゃよかった……………」

イギリスはかなり後悔したらしい

ほのか「じゃーんけーんポイツ!!」

負け……苑子、イタリア

苑子「っあー、負けちったー」

ほのか「複数の時は誰か一人がくじを引いてそれに従ってね」

苑子「よし、引けイタリア!!」

イタリア「お、俺!？」

苑子「うん、わっち運悪いんだもん」

イタリア「それ俺もなんだけど……」

イタリアはくじを引く

ほのか「えーと……『前にいる人に愛の告白』だって」

苑子「なんじゃそら……」

苑子は前を見る

苑子の前の人はなつじだ

苑子「（よかった女で……、しかもなつじだし）」

イタリアの前はドイツだからイタリアはなんのためらいもなくドイツに愛の告白をする

イタリア「ドイツ、世界で君が1番好きだよ!」

ほか「どうしよう、この二人なのにBLに見えてしまった……………」

BL嫌いなんだけどなあ…

ロシア「苑子ちゃん、言わないの?」

苑子「あ、うん」

苑子はなつじを見る

なつじはそれを睨み返す

さいほの「睨み返すな……………」

ほか「苑子ちょっとビビってるよ」

苑子「えと……………よしっ」

苑子は決心して口を開く

苑子「君は道端に咲く名前も知らない小さい花のよう……………!」

なつじ「喧嘩売ってんのかてめえはああああ!」

なつじが苑子にアイアンクローをする

苑子は綺麗に宙に舞い頭から床に落下する

アメリカ「よく飛んだんだぞ……………」

アメリカが動かない苑子を見て顔を青くして言う

イギリス「真面目に考えても結局そうなるのか……………」

中国「ある意味天才ある」

ほのか「背が小さいなつじにとっては最高の侮辱だね」

なつじ「てめえも死にてえか？」

ほのか「は、はは……………」

なつじ、超機嫌悪い……………」

フランス「苑子ちゃん動かないけど大丈夫かい？」

さいほの「ほっとけば大丈夫だろ」

ほのか「大丈夫じゃないよ……………」

「次は 駅、次は ）」

電車にアナウンスが流れた

もうすぐ目的地だから私達は荷物をまとめる

そしてちらりと窓を見ると……………

ほのか「おおっ！！」

さいほの「どした……………ってわぁ……………」

なつじ「海だぁぁ！！」

窓の外は綺麗な青い海が広がっていた

苑子「海！！？」

ほのか「起きた！！」

さいほの「だからほっとけば起きるつつたろ」

私達の叫び声で死んでた苑子が飛び起きる

日本「綺麗ですね……………」

イタリア「ヴェー……………」

私達は駅につくまでずっと窓の外を眺めていた

その16 目的地まで行く時が1番楽しい(後書き)

ほのかがイギリスに何を囁いたのかはみなさんのご想像にお任せします

その17 海に行ったらまず泳げ！（前書き）

仕方ないので斬っちゃいました

b y 日本

夏休みもう終わっちゃうじゃねーか！！

しかし夏休みが終わっても夏休み編は続きますぜ

あの人達が久々の登場です！！

その17 海に行ったらまず泳げ！

苑子「海だあああああつー！」

なつじ「黙れウザいくたばれ苑子」

苑子「……………ぐすっ」

こんにちは、ほのかです

というわけで海です

やっと着きました

青い海、白い砂浜、そして砂浜にうちあげられた大量の海藻が私達を迎えてくれました

さいほの「しっかし暑いね、水着に着替えて早く泳ごう」

ほのか「おっしゃああー！！まっかしとけええいー！！」

私と苑子は更衣室に直行した

イギリス「元気だなあいつら……………」

日本「フランスさん、まさか更衣室をのぞこうなんて考えてませんよね？」

フランス「かつ……………考えてねーよっー！！」

中国「考えてたあるな……」

さいほの「マジかよ、近づくな変態。行くよなつじ」

なつじ「うーす」

ロシア「今のさいほのちゃん目、思いっきりフランスくんを軽蔑した目だったね」

フランス「うう………」

アメリカ「とにかく早く着替えて早く泳ぐんだぞ!!」

男性陣も更衣室に歩いて行った

なつじ「あれ、中国は女子更衣室じゃないの？」

中国「我は男ある!!」

『やっと見つけたわ。我々の計画の邪魔な存在』

『あの時は手間がかかったからね。』

『ええ、でも今回は前みたいにはいかないわ。』

『全員まとめて排除してやろう』

『失敗は許されないわよ、キリハ』

『わかってるさ、キリカ』

黒いマントに身を包んだ蒼い髪の子と女は怪しく笑った

苑子「うーみーはー広いーなーおおーっきーなー」

なつじ「黙れ読みにくい」

苑子「さーせん」

さいほの「男性陣の方が着替えるのが遅いとはどーゆうことだ」

ほのか「人数多いからね」

イタリア「おまたせー！」

ドイツ「遅くなってすまない。フランスが女子更衣室をのぞこうと……」

さいほの「まだ諦めてなかったんかいな」

日本「仕方ないので斬っちゃいました」

ほか「いやそんな『やっちゃいました』的なテンションで言われても……」

フランス「痛かった……」

苑子「痛かったで済むことじゃなくね？」

私達は砂浜にビーチパラソルをさし、その下に休み場所を作り海に飛び込んだ

アメリカ「イエーイッ」

なつじ「ちょ、アメリカ！水！水飛ぶ！しょっぱい！！」

各自好き勝手に遊ぶ

しかし日本だけビーチパラソルの下で休んでた

日本「若いつていいですね……」

「日本、泳がないの？」

日本「はい……ってえ？」

日本の前にいたのは知らない顔の少女だった

日本「えと……どなたですか？」

「はあ？何言つてんの日本。私だよ私」

その人物は眼鏡をかけた

日本「ほのかさん！？」

そう、正体は私でした

ほのか「そーだよ！」

日本「ぜ、全然違う……」

ほのか「よく言われるぜ」

私は眼鏡を外す

ほのか「さ、早く泳ごー！！」

日本「えっ、ちょ……」

私は日本の背中をおした

日本、顔から海にザブーン！！

ほのか「あ、ゴメン！しょっぱいよね、水」

日本「いえ、ちょうどいい塩加減です」

ほのか「え……………」

苑子「なつじー、浮輪外しなよー」

なつじ「やだ。泳げないから」

なつじは浮輪をしてプカプカ浮いている

苑子「泳げないんじゃない？底に足がつかないだけじゃないの？」

なつじ「死ね」

なつじは苑子を沈めた

さいほの「あ、なんか藪崎が沈められてる」

ほのか「ホントだ」

日本「よく冷静に言えますね……………」

アメリカ「H A H A H A」

私達の遠くでアメリカが大声で笑いながら泳いでいる

さいほの「元気だね」

ほのか「そうだね」

日本「若いっていいですね」

中国「三人ともじじいみたいある……………」

ほのか「あ、中国。いたの？」

中国「さつきからいたある……………。それより昼にするあるよ」

さいほの「おう、今日の昼は何かな」

日本「私を作ってきた弁当です」

中国「+イギリスのスコーンある」

……………

ほのか「わっ…………私まだ泳いでる……みんな先に食べてて！」

さいほの「待てやゴリアー！！お前も道連れじゃあつ！！」

逃げようとしたがさいほのにあえなく捕まる

ほのか「嫌だあつ！！イギリスのスコーン食べるくらいなら昼飯くらいいぬいてやるううつ！！」

さいほの「ちよつとくらいなら大丈夫だろ！！」

ほのか「さいほのはヘタリアのことよく知らないからそんなこと言えるんだよ！！あれは……あれは暗黒物質^{ダークマター}、いや殺人兵器なんだああああ！！」

さいほの「落ち着け！！食べなきゃいいだろ！！」

ほのか「無理だ！！あのイギリスの笑顔を見たら食べなきゃいけない気がするんだ！！」

さいほの「お前のイギリス萌えのなんだかは捨てろ！！」

ほのか「私はイギリスより日本が好きなんだあああつ！！」

さいほの「知るかあああああつ！！」

直後、腹部に激痛が走り私の意識はそこで途絶えた……………

ほのか「……………はっ」

私が目を覚ました場所は砂浜の上、というかさっき設置した自分達の休憩場所だった

私の顔を皆が覗き込んでいた

ほのか「……………ココハドコデスカ？」

苑子「テンゴクデース」

なつじ「ナグリマスヨー」

苑子「ジャア、チキウデース」

なつじ「コロシマスヨー」

苑子「ジャア……………」

さいほの「もういいやめれ」

私達のポケ合戦はさいほのの仲裁で、ひとまず終了する

ほのか「んで、ここが砂浜の上だっつーのは最初っからわかってたけど」

なつじ「じゃあ聞くな」

ほのか「いいじゃん別にー。それよりなんで私はここにいるの？」

確か海で泳いでた気がするんだけど……………」

イタリア「俺、詳しい事はよく分かんないんだけどさいほのちゃんがぐったりしたほのかちゃんを担いできたんだよー。びっくりしたよー!!」

中国「ああ、皆には言ってなかったあるな。いろいろあってさいほのがほのかの腹を思いっきり殴って気絶させたある。」

日本「いきなり気絶されたので驚きました」

へー……………ほおー……………

なあるほどお……………

ほのか「さーいーほーのーちゃん?」

さいほの「私はなんも知らんよ」

ほのか「嘘つくな!!目撃者だってちゃんといえるんだからな!!」

さいほの「いやあ、やってみたくて」

ほのか「やってみたくて　じゃねーよ!!気絶するほどやるやつがどこにいる!!」

さいほの「ここにいます」

ほのか「だああああっ!!ム力つくうううっ!!」

苑子「落ち着けMEGANE」

ほのか「黙れ！！全然かつこよくねーんだよ！！つか今眼鏡かけてねーよっ！！」

フランス「そこですか」

日本「とりあえず落ち着いてください……」

ほのか「うん」

なつじ「落ち着くのはやっ！！」

イギリス「ほのか、もう気分は大丈夫か？」

ほのか「うん！！大丈夫！！元気100%！！」

イギリス「じゃあ俺のスコーン食べれるよな？」

イギリスが笑顔で真っ黒なスコーンを差し出す

ほのか「ごめん、急に元気なくなった。みんなで食べて」

ロシア「でもみんな先に食べちゃったよ？」

ドイツ「……………まあがんばれ」

全然気付かなかったがみんなの顔色がかなり悪い

ホントにあの殺人兵器を食べたらしい

意識があるだけでもかなりすごい

苑子「私はさっきまで意識なかったよ」

ほのか「そうなの！？いや、お腹いっぱいだから……………」

イギリス「あと一つだけなんだ。食べてくれるか？」

イギリスがさっきと変わらない笑顔で私の手の上に殺人兵器を置く

こ……………これを食べるの……………？

ほのか「ちよっとトイレ……………」

アメリカ「逃がさないんだぞ」

逃げようとしたがアメリカに手を掴まれ引き戻される

ほのか「え……………えと……………」

なつじ「食べるよね？」

なつじが黒い笑顔で言うがこの殺人兵器に比べたら怖くもなんとも
ない

ほのか「あ…………え…」

全員「さあ—！」

全員に言われる

ほのか「う…………うわあああああつ—！」

私は叫びながら黒い物体を口に入れた

その後の記憶がないのは言うまでもない

その17 海に行ったらまず泳げ！（後書き）

イギリスのスコーンってどんな味がするんだろーか？

一回食べてみたいです！

軽く次回予告

海で楽しく遊ぶ四人と枢軸・連合。

しかしその平和な時間はあいつらによって破壊される……………！！

まあこんなかんじですかね。

お楽しみにー

その18 眉毛の屍（前書き）

いや…………俺死んでねえし…………

byイギリス

話が進まねーぞコンチクショウ

宿題終わらねえぞコンチクショウ

さいほの「知るか」

その18 眉毛の屍

ほのか「うー……頭痛えー……」

さいほの「二日酔いのおじさんか君は」

私はイギリスのスコーン（別名、殺人兵器）を食べて見事に気絶し、さつき目が覚めた

ほのか「さいほのとかよくたえられたね……」

さいほの「もうすぐで意識が飛びそうだったけどな」

ちなみに今、休憩場所には私とさいほのしかいない

みんな泳いでいる

ほのか「さいほのは泳がんの？」

さいほの「ちよつと休憩。疲れたからな」

さいほのはクーラーボックスからスポーツドリンクを取り出し口にふくむ

さいほの「黒須もちよつと飲んだら？」

そう言つてコーラを手渡された

私はそれを飲む

ほのか「うー！炭酸強おつ！！」

さいほの「蓋を開けた直後のよく冷えた炭酸水って妙に炭酸強いよね」

ほのか「ああーわかる」

こう話してると普通の女の子なんだけどなあ……

ほかの人から見たらまさかこのどこにでもいる女の子が世界を救う人間として命を狙われてるなんて思わないよねえ……

つかそんな設定、読者さん忘れてるよねー

ま、この世界に来てからたいした出来事何も起きてないし……

大丈夫だよな？

『ふつ、完全に油断してるな』

キリハがビーチパラソルの下でのんびりしている少女二人を見て言

った

『これなら楽にできるわね』

キリカがニヤリと笑う

『うーん、そうはいかないかもね』

『どういうこと？』

『あの国の八人、なかなか強いよ。一部を除いて』

一部というのは言うまでもない

『ドイツやアメリカは運動神経がいいからもちろん戦うのは強いはず。日本は剣術が得意。イギリスは……うん、あれだ。魔法的な何かでバーンと。中国は中国だからな。カンフー的な何かだ』

『ちょっと待つて。最後らへん適當すぎない？』

『気にするな。まあイタリアはヘタレだからな。何も出来ないだろ。フランスは弱いかもしれないがそこそこ戦力にはなるはず』

『手強いわね……』

『でも1番気をつけるのはあのバカ四人組だ。がむしゃらだがいろんな意味で強い』

『ええ、いろんな意味でね』

キリカとキリハは少し呆れ顔で言った

『しかしどうやって殺すの?』

『ここは海だ。最高の殺人スポットだと思わないかい?』

キリハはとても嬉しそうに海で遊んでいたり休んでいたりする標的を見た

イギリス「……………ん?」

苑子「どしたの眉毛」

イギリス「んだとゴラ。さっきから嫌な予感がしてな……………」

なつじ「またまたあ、イギリスの嫌な予感ってのはあんま信用できないよねえ」

イギリス「うるせえ!!!」

アメリカ「イギリスーツ!!!」

イギリス「ぶふああ!!!」

突然、アメリカがイギリスに突っ込んできた

メタボ気味のアメリカが上にのっけているため沈むイギリス

苑子「わああ！アメリカ！死んじゃう！イギリス死んじゃうよ！！」

アメリカ「え？」

苑子の叫びを聞いてイギリスを見るアメリカ

しかしイギリスはもう動かなくなっていた……

なつじ「ぎゃああああ！？イギリスううう！！」

アメリカ「あ、ゴメンなんだぞ」

苑子「謝る気全然ねーよコイツ」

イタリア「どうしたのー……ってわああああ！？」

泳いできたイタリアが動かないでそのまま浮いているイギリスを見てかなり驚く

イタリア「うわああん！！ドイツー！イギリスが死んでるよおお！！」

ドイツ「何！？」

イタリアに呼ばれてドイツと日本達もやってくる

イギリス「いや……俺死んでねえし……」

ほか「どーかしたのー？」

休憩場所にいた私とさいほのもその場に泳いできた

中国「こ、これは大変ある！すぐに人口呼吸を……！」

さいほの「誰がすんの？いつとくけど私達女子は断るね。いろいろあれだし」

ほか「この小説は恋愛なしの方向だから」

苑子「イギリスと……」

なつじ「何照れてんの？苑子」

苑子は妄想ワールドに入ってる

フランス「じゃあ俺が……！」

ほか「わーわー！！ダメダメダメエツ！！恋愛はなしだけどBLはあり、ってわけじゃないからあ……！」

フランスが人口呼吸をしようとしたところを私が必死にとめる

中国「でもこのままだとイギリス死ぬあるよ？」

フランス「別にいいよ？」

さいほの「お前は助けたいのか死なせたいのかどっちなんだ」

イギリス「だから俺大丈夫だって……………」

イギリスの言葉は誰も聞いちゃいない

というかイギリスの意識があることもみんな知らない

フランス「いやあ、別に死んでもいいんだけど人口呼吸、お兄さんやってみたくて」

なつじ「ギャアアアア！ここに…………ここに限りなく変態な最低男がいるよおおおお！！」

なつじの叫びで海水浴に来ていた人達がフランスに冷たい視線を浴びせる

フランス「嘘嘘！！だからやめて！！お兄さん泣いちゃうから！」

苑子「勝手に泣いてるカス」

はい、ブラック苑子キター……………！！

久々の登場ですねー

苑子「つかやるならやれよ。早くしねえと大変だろうが」

なつじ「おお、ブラック苑子でもイギリスの心配はす……………」

苑子「ほら、早くしねえと。時間の無駄だから。読者飽きちゃうだろおが」

思いやりもクソもないブラック苑子ちゃんなのでした

その18 眉毛の屍（後書き）

書き終わって気付いたこと

日本とロシアが空気w

今回、一度も喋っておりません。

このことに気付いたあなた、明日の運勢最高です。
嘘です。

その19 ピンチ襲来！？（前書き）

死んでねえって言ってんだろおおおおお！！

boyギリス

BL苦手なのに今回ほんのちよつとBLあります。

ほんのちよつとですから！！

その19 ピンチ襲来!?

イギリス「……………はあ、はあ……………」

イギリスが疲れたように息をしている隣には頭にたんこぶを作ったフランスが浮いていた

おっとこれでは状況がイマイチわからないと思うんで時間を少し戻します

ロシア「ねえ、早くしないとイギリスくん死んじゃうよ?」

ロシアが笑顔でフランスを見る

それに怖じけづいたフランスはイギリスに顔を近付けはじめた

ほのか「もう見てらんないいいいい!!」

B.Lが嫌いな私はそこで目をつむった

フランスの唇がイギリスに触れようとした瞬間！

イギリス「だゝゝかゝゝらゝゝ……………」

動かなかったイギリスがフランスの顔を掴み

イギリス「死んでねえって言ってんだろおおおおお！！！！」

思いつきりフランスを殴った

フランスは綺麗に宙を舞い、海に落下した

そしてさっきまでのイギリスと同じ状態になった

私達はただただ、その二人の様子を呆然と見ていた

そして今に至る

苑子「イギリス…………生きてたの？」

イギリス「国がそう簡単に死んでたまるか」

ほのか「うん、でももしかしたらフランス簡単に死んじゃうかも」

中国「奴はゴキブリ並に生命力が高いある。ほっといても大丈夫ある」

中国の言葉に全員が納得した

『キリハ、あいつらバカなの?』

『今ごろ気付いたの?そう、あいつらは正真正銘の……』

キリハは間を開けて、きつぱりと言った

『バカだ』

『きつぱり過ぎるわ』

苑子「ブエックシヨイ!!」

なつじ「うわっ、汚っ！」

ほのか「ひでえなオイ」

日本「風邪ですか？」

苑子「んー、たぶんちがうかなあ？」

さいほの「誰か藪崎の噂でもしてんじゃねえか？」

苑子「そうかなあ……」

バカの代表

『あの子が1番に反応したわ……』

『ああ、バカの代表だからじゃないか？』

『悲しすぎるわね、あの子』

二人は苑子を可哀相な目で見た

見られている苑子はまったくしゃみをした

『なんか見ててつらくなってきた、早くやりましょう』

『そんな理由でかよ』

キリハは手を前に出した

『まあ早くやらなきゃいけないのは変わらないけどね』

キリハの手が青くひかりだし、どんどん光を増していく

『何をするの?』

『まあ見ればわかるって』

光は激しく光った後、消えた

『これで終わりだ』

さいほの「あ、そうだ日本」

日本と話をしているとさいほのが私達のところに泳いできた

さいほの「実は……ぬおっ!!」

しかし突然沈んだ

ほのか「さいほの!!? ってギャア!!」

足に突然重みを感じ、私も水に沈んだ

足を見てみると重そうな鉄の玉がついている鎖が足についていた。
なんだコレエ!!?

ほのか「ぷはっ!!」

私は頑張っ て顔を水面から出した

日本「ほのかさん!! どうしました!!?」

ほのか「足にいつの間にか重りがついてる! みんなも気をつけて!
」

なつじ「何が……」

そんななつじの足にも突然重りが現れた

なつじ「わぁ!」

なつじは浮輪をしていたから浮輪に捕まりなんとか絶える

苑子「なつじー、大丈夫ー?」

なつじ「苑子も気をつけて！」

苑子「だーいじょーっ……………」

苑子、笑顔で沈む

その場にいた全員がコイツバカだと思った

しかし私は絶えていたが限界になりまた沈む

やばっ！鼻に水入った！！ツーーンってするうううっ！！頭いてええ！！

どんどん沈んでく私の手を誰かが握り、引き上げてくれた

ほのか「げほっ！！げほっ！！は……………鼻が……………」

日本「大丈夫ですか？」

助けてくれたのは日本だった。

ああ……………大好きな日本に助けてもらえるなんて……………

今なら死ねる……………

ってダメだろ死んじゃ。つか今死にそうになったし。まあそれどころじゃなくて、

ほか「さいほのとなつじと苑子の近くにいる人（人じゃないけど）は助けて!!」

私は周りにいるイタリア達に呼び掛ける

さいほの「がぼがぼ!」

フランス「おい大丈夫か!？」

さいほの「ちつ、お前か……」

フランス「助けたのにひどくない!!!？」

フランスがさいほのを助けたが、さいほのめちゃくちや嫌そう……。
…。ドンマイフランス

なつじ「ううー!! もーダメ!」

浮輪を掴んでいたなつじは重さに絶えられなくなり、そのまま沈んでしまった

近くにいたロシアは急いで助ける

ロシア「危なかったねー」

なつじ「ありがとー……」

なつじ危機一髪!

あとは苑子だけだ

苑子の近くにいたイギリスはなんとか顔を出している苑子に手をのばす

イギリス「苑子！手、出せ！」

苑子「……………ポッ」

イギリス「何照れてんだお前！！バカか！！」

苑子「バ……………バカとはなんだ！！私だって……………」

しかし突然、大きな波が来て苑子をさらっていった

全員「あっ」

波が消えたときには苑子はどこにもいなかった

なつじ「苑子おおおお！！！！」

イギリス「チッ……………」

イギリスは苑子を探しに水に潜った

その19 ピンチ襲来！？（後書き）

なんとなく次回予告っ

なつじ「苑子が逝っちゃったんで次回は苑子のお葬式です」

苑子「勝手に殺すな！！」

ほのか「はい嘘です。真面目にやりまーす。さいほのよろしく）
- ^) / 「

さいほの「おう任せろ！！行方不明になった薮崎！！薮崎は無事なのか！！そしてミスルの運命は！！」

ほのか「おーい話がずれてるぞー」

強制終了。

その20 嫌な人達と再会（前書き）

どうかで………会いましたっけ？

b y ほか、さいほの、なつじ、苑子

今回は苑子視点

その20 嫌な人達と再会

……あり？

……私……どうなったんだっけ……？

確かみんなで泳いでたら……

ああ……思い出した……

なつじに殺されたんだ……

いや違うな……
つか絶対違うな……

ん……？よく見たらここ海の中だ……

そうだ、確か足に重りが……

今ならまだチャンスはあるかも！

私はがんばって足を動かし泳ごうとした

まあ無理なわけで

最初っから泳げないしね

無意味な行動

ああーそろそろ息できなくなってきたあ

やばい、私死ぬかもしれない

つか死ぬだろこれ、完全に

こんなところで死ぬなんて……

せっかく二次元に来れたのに……

ま、死んだらなっじ呪ったりとりついたりして遊ぼつと……

私は遠くなっていく水面を見ながらまぶたを閉じようとした

そんな私の前に突然、金髪にエメラルドの瞳の人物が現れた

え、イギリス！？

イギリスは私の腕を掴み、水面へと泳いでいった

苑子「ぶはっ！！げほっ……げほっ……」

私はやっと水面から顔を出し、酸素をめいっぱい吸った

ほのか「苑子！！」

苑子「はー死ぬかと思ったー」

イギリス「俺が行かなかったら確実に死んでたぞ」

苑子「あははっ、ありがとー」

イギリス「べっ、別にお前のためじゃないんだからな！！これは……その……」

出たよツンデレ

めんどくせえ

ドイツ「とにかく陸に行くぞ。四人は今一緒にいる奴から手を絶対離すなよー！」

ほか「ほーい。日本、重いかもしんないけどがんばってね！」

イタリア「俺も手伝うよー！」

日本「あ、ありがとうございます」

黒須はイタリアと日本に掴まって泳いでいった

私はイギリスと中国に手伝ってもらって陸まで泳いでいった

この二人と一緒にに行けるなんて……！！

薮崎苑子、幸せすぎるぜ！

なつじ「で、どーする？この重り」

みんなが無事に砂浜についた後になつじが自分の足に繋がれている鎖とそれについている鉄の玉を見る

頑丈に繋がれていて簡単にはとれそうもない

んー、どーしたのか

しばらく考えてみて私はあることをおもちついた！！じゃなくて思いついた！！

苑子「そのままでもいいんじゃない！？」

なつじ「キングオブバカは黙ってる」

しかしなつじに冷たくつけはなされてしまう

ほのか「このままじゃ歩くの大変だしねえ」

黒須は立って歩こうとしてみた

しかし一步も進めず頭から前に倒れる。い、痛そう……

さいほの「……………おい、大丈夫か？」

ほのか「この重り限りなく重たいよ！！足があがないもん！」

黒須は体を起こして頭に出来たたんこぶを涙目でさすりながら言った

相当痛かったんだろうな……

さいほの「なんか衝撃を与えて壊してみるの？」

イタリア「壊れるかなー？」

イタリアは黒須のを棒でぺしぺし叩いている

まあ壊れないわけで

中国「仕方ないあるな。我に任せるある!」

中国が中華なべを持って私の前に立つ

苑子「えっ、ちよっ、私?つかそれ危な……………」

中国「ほあちやあああああ!」

苑子「ちよつと待ってえええええ!」

キンッ!!

甲高い音が辺りに響いた

中国「やっぱりダメあるか……………」

苑子「ジーーンってきたあぁ……………」

こっちまでダメージが……………」

日本「傷すらついてませんね……………」

アメリカ「どーなってるんだいコレ!」?

『ふははは!!!苦戦してるみたいだな!』

全員「!?!?!?」

突然、空から声がした

上を見ると二人黒い人がいた

つか浮いとる!!?」

『久しぶりだな。よくここまで生きていたものだ』

片方の方が見下したように言う

つか……」

ほ・さ・な・そ「どこかで……会いましたっけ？」

『『………』』

誰だあいつら？

『きつ……貴様ら忘れたのか!!?』

ほのか「忘れたも何も会ったことないですよ」

さいほの「イタリア達知ってる？」

イタリア「ううん。知らないー」

ドイツ「俺もだ」

日本「私も覚えが……」

アメリカ「あんなのに会ったかい？イギリスはどうだい？」

イギリス「俺も会ってないな」

フランス「お兄さんも」

ロシア「僕もー」

中国「我もあんな奴ら知らないある」

全員知らないらしい

『忘れたのか！ほら、お前達四人を殺そうと……』

さいほの「殺そうと………？」

『こつちの世界に来る前に、ほら』

なつじ「ヘタリアの世界に来る前に………」

四人「ああ！！！」

やつと思ひ出した！！

確か………

苑子「キリヌキ！！」

って名前だったような

『違うわ！！俺の名前はキリハだ！』

『私はキリカよ！』

二人が必死に自分の名前を叫んでいる

ほのか「んで、私達になんか用？」

『決まってるだろ！！お前達を殺しに来たんだよ！』

さいほの「オーマイガー」

『あなた全然驚いてないでしょ』

さいほのはさほど驚いてない

『それよりあなた達の足についてるそれ。そう簡単にはとれないわよ』

キリカが私達四人の足についてるのを指差して言った

なつじ「えー、なんでー」

『その鎖には強力な魔法がかけられてる。そう簡単には外れないわ……』

ほのか「外れたけど？」

『……………』

イギリス「こんなの俺の魔術で外れるさ」

イギリスの魔術？魔法？のおかげで重りは簡単に外せた

あー、足が軽い

『ちつ、やっぱりお前達みないな“国”がいると厄介だな』

キリハがイタリア達を見て怖い顔で言った

『やっぱり全員殺した方がいいんじゃない？』

『少し手間がかかるが仕方ない』

二人が話し合った後に私達の方を睨む

イタリア「ヴェ……ドイツ……」

ドイツ「落ち着け、大丈夫だ」

ほのか「あ、なんかすごく嫌な予感がする……………」

うん、黒須に同感だ

なんか二人から出てるオーラがハンパないし

どうしよう、このままじゃ死ぬかも

いやそんなおちゃめなもんじゃねーな

苑子「あわわわ……なんか出来ないの……」

日本「私に方法があります。合図をするので一斉にここから逃げますよ」

日本の言葉に全員が頷いた

辺りが静寂としている

そして日本が叫んだ

日本「今です!!」

日本が少し大きい玉を地面に叩きつけた

玉は叩きつけた瞬間に白い煙りを出して辺りを覆った

なつじ「すげえ!! 忍者だ!!」

中国「早く逃げるある!!」

私達は感動しているなつじを引っ張ってその場から逃げた

その20 嫌な人達と再会（後書き）

なんかロシアとかあんまりしゃべってないような……

まあ次からがんばろうー

がんばることじゃない

その21 ただいま逃走中（前書き）

誰のせいだと思ってるあるかああ……！！

b y 中国

なんか今回、苑子とアメリカとロシアが真面目すぎるw w

真面目なキャラじゃねーだろこの人達w w

その21 ただいま逃走中

『げほっ……げほっ……あ、あいつらは!?!』

『ちっ、逃げられちゃったみたいね』

『変な道具使いやがって……!!』

白い煙が消えたときにはもうキリ八達のターゲットは逃げていた

『くそっ、絶対に逃がすな!!』

キリ八とキリ力は黒い煙となって消えた

さいほの「はあ……はあ……ど、どこまで行くんだ……?」

フランス「バスに乗って駅に行こう。ここから駅はかなり遠いからな」

苑子「に、荷物は！？持ってきた！？」

ドイツ「そんなの取りに行く暇がなかっただろう！！」

イタリア「ばつちり持つてきてるであります！」

ドイツ「お前は……………」

全員分の荷物を持って敬礼するイタリア

アメリカ「イタリアナイスなんだぞ！！」

イタリア「でももう限界……………」

イタリアは倒れた

ほか「ぎゃああああ！！イタリアああ！！？」

イタリア「いっぱい…………走ったし…………全員分の荷物…………持ってたし…………体力的に…………限界…………」

なつじ「なんかゴメン、イタリア」

中国「とりあえず荷物は持つある。だからがんばるある」

イタリア「も、もう無理……………」

イタリアは動こうとしない

走るのは無理そうだ

苑子「がんばれ！！でも私も限界」

苑子もイタリアの隣で倒れた。

ほのか「苑子までええええ！？」

苑子「昼に食べた……イギリスのスコーンで、お腹が痛くて……」

ほぼ全員「……………はっ！！」

突然、お腹が痛みだした

いだだだだ！！

さいほの「うーっ！！腹がああああ！！」

ロシア「僕は平気だよ？」

ロシア恐るべし

あ、でもちよつと顔色悪いからつらいんだろうな

今立っているのはロシアと作った張本人のイギリスだけ

イギリス「おつ、おい！！大丈夫か！！？」

中国「誰のせいだと思ってるあるかああ……！！」

日本「い、一生の不覚……………」

なつじ「うごおおおー!!」

イギリス「ちよつと待て!今なんとか……………」

『見つけたわ!!』

立ち止まっていたら突然キリカとキリハが現れた

『ちよこまかと逃げやがって!』

キリハが手からなんか玉みたいなものを飛ばしてきた

イ、イリユージョン!?

苑子「うわわわわ!!」

玉は苑子の近くに落下し落下した場所には大きなくぼみができた。
ダメじゃん、道壊しちゃ

苑子「うわぁ……………」

つかあれ当たったら死ぬよね。確実に逝っちゃうよね

ドイツ「バス停までもうすぐだ!我慢しろ!」

そつ言うあなたが我慢できてませんぜ、隊長

無理しないでくださいえ

ドイツ「おいイタリアー!!立て!」

イタリア「キュー……」

イタリア、見事に気絶

疲れとお腹の痛みが一斉に来たもんだから無理ないな

ドイツ「ったく……ほら、行くぞ!走れ!!」

イタリアを担いだドイツの後を私達はなんとか追いかけた

バス停に着いたときちょうどバスが来たから、急いで乗った

バスの中には誰ひとりいなくて静まり返っていた

やがて入口がしまり、バスは動きはじめた

窓を見るとキリカとキリハが悔しそうに顔を歪めていた

『ちっ、また逃げられたか!!』

『安心なさいキリハ。あいつらは死ぬという運命から逃げられないの』

キリカがニヤリと笑った

ほか「よかったあ、おいかけてこないよ」

座席に座り、私はとりあえず安心する

ドイツ「ああ、なんとか逃げのびたみたいだ」

ドイツが気絶しているイタリアを座席に寝かせた

なつじ「あれっ、そういえばお腹痛くないよ」

苑子「ホントだ」

確かに

痛くない！！

さいほの「イギリスの魔術か？」

イギリス「ああ、逃げながら腹の痛みがなくなるように呪文を唱えていたんだ。」

なんかこの小説のイギリス、魔術とか使いまくってる気がする

ま、いつか

イタリアも腹の痛みがなくなったせいか顔色がさっきよりよくなっていた

アメリカ「あーもう災難だったんだぞ！」

フランス「仕方ないだろ。俺達は世界を救うんだからあいつらに命を狙われて当然さ」

イタリア「ウヴェー……」

イタリアが目を覚ました

ドイツ「大丈夫か？イタリア」

イタリア「ヴェー……なんかくらくらするよぉ……」

さいほの「頭冷やす？氷あるよ？」

イタリア「ありがとー……」

さいほのが袋に氷をいれてイタリアのおでこに当ててる

イタリア「ちべたっ」

さいほの「氷だから当たり前でしょ」

ドイツ「すまないな」

さいほの「いいってことよ」

さいほの、お母さんみたいだなあ……

微笑ましい光景だよ……

苑子「……………ねーねー」

しばらく窓の外を眺めていた苑子が全員に声をかけた

ほのか「どしたの？」

苑子「お腹減った」

ほのか「殺すぞ」

苑子「ウソウソ！あのさ、さっきからおかしいと思ってたんだけど……」

苑子が自分なりに真面目な顔をつくった

私達から見たら変顔にしか見えないが

苑子「なんか私達以外に人がいない気がする」

なつじ「え？どーゆーこと？」

苑子「さっき私達が重りのせいで死にそうになったやん？普通誰か

が溺れそうになったら周りの人は助けに来るでしょ？」

私達は苑子の話を黙って聞いている

苑子「でもイタリヤ達しか助けに来なかったよね？私、変だと思ってイギリスと中国と陸に行こうとしてる時に周りを確認してみたの」

苑子にしてはめずらしく長々と真面目に話をしている

苑子「でも周りにはいつのまにか私達以外誰もいなかったの。キリ八達から逃げてる時、道路を走って逃げてたでしょ？その時にも車が一台も走ってなかったの」

日本「そういえばそうですね……。必死だったので気づきませんでした」

なつじ「苑子、よく気づいたね。苑子のくせに」

苑子「泣いていい？」

ほのか「よくわかったね、苑子！」

苑子「えへへ でも問題はそこじゃないの」

イギリス「十分問題だろ」

苑子「だってさ人もいないし、車も一台通ってないのにバスが走ってるなんておかしくない？」

ロシア「あ、確かに……」

苑子「しかもこのバスは私達が来るのを予測していたかのようにグッドタイミングに来たでしょ？このバスは1時間に一回しかここに来なくて毎時間30分ごろに来てるの」

さいほの「よく知ってるね……」

苑子「さっきバスに乗る前に時刻表をちらっと見たらそう書いてあったんだ」

苑子は照れたように笑った

ドイツ「今は16時10分だな……」

苑子「私達がこのバスに乗ったのは10分前だよね？」

ほのか「ってことはこのバスが来たのは16時ってこと!？」

めっちゃ遅いor早いやん!!

苑子「そゆこと!」

苑子が元気よく言う

ロシア「ということはこのバスは……」

苑子「そう、怪しいってこと!」

イギリス「まさかあいつらの……」

全員「罨!!!」

全員が声をそろえて言った瞬間にバスは全速力で走り始めた

なつじ「ぎゃああああ！？早っ！！」

イタリア「ねーねードイツー……………」

ドイツ「どうした！？」

イタリアが運転席を指さす

イタリア「そういえばこのバス……………運転手いないよ？」

イタリアの言葉にロシア以外全員が顔を青ざめる

ホラーじゃんっ！！

さいほの「じゃあこのバスどこに向かってるわけ！？」

苑子が窓を開けてどこに向かってるか確認する

このバスが向かってる先は……………

崖^{がけ}だった

苑子「うーん、地獄かなっ」

さいほの「きつぱり言うなあああああ!!」

普段冷静なさいほのがパニックってるよ……

つか普通パニックるよねこの状況。

なんでロシアそんなに落ち着いてられんのかな

なつじ「どとどとどすんの!?!」

イギリス「どうするって言われたって……」

パニックってる内にどんどん崖は近づいて来る

アメリカ「早く降りるんだぞ!!」

アメリカがバスの入口を開けて言う

フランス「降りるってたってこんな速さのバスから降りるのか!?!? 危険だ!!」

アメリカ「でもこのままだと死んじゃうんだぞ!」

ドイツ「アメリカ……」

アメリカがほかの人より冷静だ……

イタリア「でも……」

アメリカ「世界が滅びてもいいのかい!？」

イギリス「アメリカ……お前……」

アメリカ、いつもはあんなんだけどちゃんと周りのこと考えてるんだ……

ちよつと意外だ

ロシア「……アメリカくんの言うとおりだねー」

中国「ロシア!!？」

ロシア「こんなところで死んで敵の思い通りになりたくないからねー」

ロシアの言葉に全員言い返すことがなかった

つか言い返したら殺される……

やがてドイツが口を開いた

ドイツ「俺は降りよう」

イギリス「俺も降りるぞ……べつ、別にお前らのためじゃ……」
さいほの「私も降りる」

イギリスのツンデレ、華麗にスルー

苑子「わっちも降りるー！！酔ってきたし！」

なつじ「そこかよ。私も降りる」

ほのか「私も降りるー」

日本「私も降りさせていただきます」

中国「我也降りるある！」

フランス「汚れるのは嫌だけど命の方が大切だからね……。お兄さんも降りるとするよ」

フランスはため息をついた

これで大体の人は降りることを決意した

あとは……

イタリア「……………ヴェ？」

全員の視線がイタリアに集中する

イタリア「えっ！？え、えと……………」

イタリアはしばらく戸惑っていたがやがて

イタリア「おっ、俺も降りるでありますっ!!」

なぜか涙目で大声で叫んだ

苑子「うー、すぐ終わるって思ったら楽に思えたけどなんか怖いな
あ……」

苑子が開いた入口から高速で流れる景色を眺めながら言う

確かに怖い

下手したら死……

いやいや!! そんなネガティブなこと考えちゃダメだ!

やるからには思いっきり行かなきゃ!!

さいほの「……………で、誰から逝くの?」

さいほの、さりげなく不吉な漢字使わないで

アメリカ「ここはイタリアで!」

イタリア「ヴェツ！？ななななんで！？」

アメリカ「なんとなく！！」

なんとなくかい

イタリア「やだやだやだあっ！！痛いのだだよあ！！」

ドイツ「そんなことで泣くな！！」

イギリス「おい、早くしろ！崖、もうすぐそこだぞ！」

確かにもうすぐで崖だ

早くしないとぶっちゃけやばい

アメリカ「じゃあイギリスが先に逝くんだぞ」

イギリス「なんでだよ！あと漢字ちげえよばかあ！」

イギリスがアメリカにつかみかかる

苑子「わあ！！暴れないでよ！落ちちゃうでしょ！」

開いた入口の1番近くにいる苑子が叫ぶ。イギリスとアメリカの争いは壮絶で周りを巻き込んでいく

苑子「ちよっ……だから暴れるなって……あ」

苑子がイギリスに押されたアメリカにぶつかってアメリカと一緒に

バスの外に飛び出す

しかも全員が1番前にいた苑子によっかかっていたから苑子が飛び出したことによって全員バランスを崩して外に飛び出した

全員「……………あ」

全員がバスから降りた（というか落ちた） 後、誰もいなくなつたバスはずっと崖まで走っていきそのまま奈落の底へと落ちていった

その21 ただいま逃走中（後書き）

こんなことがあつたら本気で怖いと思う書いた張本人……（作
者）

その22 危機一髪？（前書き）

な、なんだってええええ！！？

b y 苑子

更新遅れました……………

運動会の練習とか運動会の練習とか運動会の練習とかで忙しくて…

……………

家に帰って即爆睡だったため全然執筆してませんでした！

反省してまーす
してねえ

その22 危機一髪？

なつじ「う、うーん……」

私は瞼を開けて、重い体を起こした

周りを見ると苑子達が倒れていた

なつじ「あー……何があったんだっけ……？」

ガンガンする頭で何があったか思い出す

あ、そういえば全速力のバスからダイブ（落ちた） んだー！

つかよく無傷でいられたな………

ポタッ

安心してゐる私からなんか赤い液体が落ちてきた

なんじゃこりゃ？

私はおでこを触ってみる

なんかぬるっとしていた

触った手を見ると真っ赤になっていた

あー、うん……

……

なつじ「ぎゃあああああ！！？あつ……頭からああ！！ケチャップ
がああああ！！」

なんだこれえええ！！？

昼にあれか！？ケチャップいつけたフランクフルト食ったか
らか！？

ケチャップ食っただけで頭から出るんかああああ！！？

なつじ「だれか助けてええええ！！」

ロシア「菜摘ちゃん落ち着いて」

なつじ「ぎゃああああ！！？ロシアアアア！！？いたのおおお！！？」

ロシア「聞いてなかったの？落ち着いてって言ったよね？」

ロシアに黒い笑顔を向けられて私は強引に自分を落ち着かせる

ロシア「あー、頭打ったんだね。血が出てるよー？」

なつじ「血じゃないよ！ケチャップだよ！」

ロシア「ホント一回落ち着いて」

平気な顔をしているロシアも所々擦り傷をつくっていた

なつじ「ロシアも大丈夫？所々ケチャップが出てるよ？」

ロシア「血とケチャップは全然違うからね？あとさっき聞いて思ったんだけどケチャップ食べただけで体から出るわけないからね？」

パニックっていた時の私の間違いをロシアに冷静に訂正される

なつじ「つかみんな死んでないよね？」

ロシア「うん、さっき確認したけどちゃんと生きてたよ」

ロシアと話をしているとだんだん怖い話になってしまつのは気のせいだろうか

死んだとか生きてたとか笑顔で……

さいほの「うう……………」

さいほのがうめき声をあげながら起きた

なつじ「チャオー　さいほの大丈夫ー？」

なんとなくイタリアの口調を真似てさいほのに声をかける

さいほの「なんか体のあちこちが痛い……………」

なつじ「ロシアよりは少ないけど擦り傷だらけだね……………二人ともあとで消毒しよっか」

どうよこのお姉さんぶり!!

これで誰も私のことをチビなんて呼ばなくなる!!

さいほの「自分でできるから大丈夫だよ」

ロシア「こんくらいほつといっても大丈夫だよ」

私を頼ってー!!

なんか恥ずかしいよー!!

アメリカ「いつつ……………ここはどこだい?ていうか俺は誰だい?」

イギリス「ふざけるな」

アメリカ「いだっ!」

起きてさっそくボケたアメリカをイギリスが殴る

ほのか「う……………よかった……………生きてたわ……………ってうわっ!なつじ頭からケチャップが!」

ロシア「だから違うってば」

日本「いたた……腰うつた……」

中国「あいやあああ……体のあちこちが痛いある……死んじやうある……」

ドイツ「おいイタリア、大丈夫か？」

イタリア「全然大丈夫じゃないでありますっ！！」

ドイツ「大丈夫だな」

フランス「うわー汚れちゃったよ……」

みんなが次々に目を覚ます

よかった、みんな対した怪我してないね……

あとは……

なつじ「苑子、起きないね」

さいほの「死んだんじゃね？」

ほのか「おい……」

その時、苑子の指がかすかに動いた

そしてゆっくりと体を起こして苑子は立った

苑子「いやー死ぬかと思っただわー」

全身血だらけの姿で

なつじ「今から死んでもおかしくねーからな」

ほのか「ほいつ、出来たでー」

ほのかが私の頭に包帯を巻いて仕上げに思いつきり私の頭を叩く

なつじ「いだっ！！何すんだよ！」

ほのか「いやあ、つい」

なつじ「お前後で覚えてろよ」

苑子「ふがふがふが」

苑子は全身に包帯を巻いているから何言ってるかわかんない

なつじ「全身に包帯って………そんなにひどい怪我だったの？」

よく生きてんな

さいほの「んー？いや怪我はあんましてなかったよ？でもなんか血だらけだったからとりあえず包帯ぐるぐる巻きにしたいっ！」

さいほのが満足した顔で親指をつきあげてグッジョップした

全然よくないよ……

中国「それよりこれからどうするあるか？」

「ほのか、うーん、つか人が誰もいないのってなんで？」

なつじ「敵のせいなんじゃないの？」

日本「菜摘さんの言うとおりです」

どうだ！すごいだろう！！褒めろ、讃えろ、ひざまづけええええ！！！！

って私はプロイセンか

日本「ここは敵が作り出した異次元の世界です。敵がこの世界を消さないかぎり私達はここから出られません」

苑子「な、なんだってええええええ！！？」

ホントこいつリアクションうぜえな

ロシア「じゃあ敵を捕まえて消してもらえばいいんだよね」

笑顔で言ってるところが余計怖いよロシア

ドイツ「でも敵がどこにいるか……………」

ロシア「いい加減出てきたらー？」

ロシアがドイツの声を遮って大声で言った

えっ、いるの！？どこどこ！？

そしたらどこからともなくあの二人が出てきた

『ふっ、気づいていたか。さすが“国”だな』

キリハだとかいうやつが見下したように笑っ

うぜえ殴りてえ。いいよね？少しくらい問題ないよね？

ということで、

なつじ「なつじパンチ！！」

『ぐはあっ！！！』

なつじパンチ、キリハの顔に炸裂だぜ

『キ、キリカああああ！！！』

あ、姉の方だったわ。やべえ間違えた。まあ似てるから悪いんだよ
私はなんも悪くない

『貴様！キリカになんてことを！！』

なつじ「いやあ、つい　つかお前シスコン？」

『違う！！ただキリカが好きただけだ！』

さいほの「それをシスコンというのだよ」

ここにきてまさかのシスコン発覚……

キモい……

ロシア「どうでもいいから僕達をここから戻してくれない？」

『戻すわけないだろう！！お前らはここで死ぬんだ！』

苑子「ねえ、キリ八達はどうしてそんなに私達を殺そうとしてんの？」

苑子がまた変顔、じゃなくて苑子なりの真面目な顔になった

『それは上からの命令だからに決まってるだろう！』

苑子「へー……でもキリ八達、ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

『！！！！！！？』

苑子の言葉にキリ八とキリカが言い返せなくなる

苑子「あ、凶星？凶星だよね？凶星以外ありえないよね？」

ほのか「なんで嬉しそうなんだよ……………」

『お、お前らに話す必要はない！！行くぞキリカ！』

『あ、ああ……………！』

イタリア「あ、ちょっと待って！！ここから出し……………」

突然、イタリアの横から高速で何かが二人に向かって飛んでいった

それは二人に直撃し、二人は地面に落下した

『いっつつつ……………何を……………』

ロシア「言ったよね？捕まえてここから出してもらって」

ロシアは笑顔で地面にささった水道管をぬいた

この笑顔の前ではキリハとキリカも従うしかなかった

なんだかんだで気が付いたらさっきまで静かだったのに車の走る音でうるさくなった

つまり戻ってきたわけだ

苑子「ありがと……………ってあれ？」

あのバカ双子はまたどっかに消えちゃったし……

でもよかったー、戻ってこれて

あのままあそこにいたらどうなってたんだろ？

ロシア「異次元世界から出られなくなってそのまま異次元に飲み込まれちゃうんだよ」

なつじ「うん、勝手に心を読まないで」

エスパー？

やっぱロシア怖いわ……

私は空を見上げた

さっきまではオレンジ色だった空が今は真っ黒になっていた

つまり夜だ

さいほの「これからどうするの？」

イタリア「早く帰ろーよー！怖いよー！」

イタリアはドイツの肩を掴みぐわんぐわん揺らす

ドイツ「帰りたいのはやまやまなんだがな……………」

ドイツは困った顔で呟く

ドイツ「もう……………帰る電車がないんだ……………」

苑子「……………は？」

ドイツ「ここはあまり電車が通らないんだ。一日に三回くらいしか」

アメリカ「そんな……………」

ほのか「あ、じゃあバスは！？」

イギリス「あんなことがあった後でよく乗りたいと思えるな…………。あとバスも今日はもうやってこないぞ」

ほのか「えー……………」

なつじ「じゃあタクシー！」

中国「どんだけ金かかるあるか。我は嫌ある。第一あの狭い車にこの人数が入れると思うあるか？」

…………… 思いません。

じゃあ……私達野宿するしかないのかな……

日本「そんなこともあると思ってここ周辺のホテルを調べてきました」

日本が紙の束を出して笑顔で言った

日本が菩薩に見えた瞬間だった。

その22 危機一髪？（後書き）

感想お願いします！！

その23 温泉は泳ぐところじゃありません（前書き）

じゃあ俺はこっちで寝

出てけ変態

byフランス、さいほの

夏休み編を書きはじめて約一ヶ月……

もう10月やん!!秋やん!肌寒くなってきたやん!!

と思う方もいらっしゃると思います。

しかし安心してください

私の中ではまだ夏休みは続いているのです!!

さいほの「どこに安心すればいいんだよ………」

その23 温泉は泳ぐところじゃありません

紙を片手に道を進んでいく日本を私達は重い荷物を持ちながらついていった

ほのか「に、日本……まだ……？」

日本「申し訳ありません……。先ほどまでいたところは人通りが少なくてホテルまではかなりの距離があることを言うのを忘れていました……」

まだ歩くってことが……

正直つらいな……

フランス「もう真っ暗だな……」

ドイツ「早くしないとまたあいつらがやって来るかもしれない。がんばろう」

イタリア「……ヴェ、ヴェ……」

さいほの「大丈夫か？荷物持とうか？」

イタリア「だ、大丈夫！！女の子に重い荷物なんか持たせられないよ！」

なつじ「じゃあ私の荷物持つて」

イタリア「え、」

さいほの「コラ」

なつじ「あいたっ！」

完全に疲れているイタリアに荷物を持たせようとしたなつじをさいほのはチョップした

鬼か、なつじは

なつじ「鬼じゃない、ドSだ!!」

苑子「自分で言うなよ……」

つか自覚あんのかよ

しばらく歩いていると辺りはだんだん騒がしくなっていき明かりも増えた

中国「やっと都会っぽい所に来れたあるな……」

日本「たぶんこっちです」

人が多いからみんなとはぐれないように日本についていく

やがてどでかい建物の前に到着した

苑子「え、まさかここ？」

日本「はい、そうです」

さいほの「でかつ！！絶対宿泊料金高いだろ！！」

なつじ「ダメだよさいほの、そんな現実的な話はやめよーぜっ」

さいほの「いやここは読者も気にするところだろ」

ほのか「なんだかんだでどうにかなるもんなんだよ、金は」

さいほの「世の中そんなに甘くねーよ？」

細かいことは気にしなーい

そしてまあなんだかんだでホテルの中へ

そして部屋ん中

部屋は10階で男と女でわかれて部屋に入った（隣同士の部屋）

さいほの「おー、大きい」

なつじ「つかあっち一部屋で8人！？せまくね！？」

フランス「じゃあ俺はこっちで寝」

さいほの「出てけ変態」

ほのか「フランスは床で寝るから大丈夫じゃない？」

突如入ってきたフランスをさいほのが蹴りで廊下に追い出した後、私達はお風呂に行く準備をした

苑子「洋風なホテルなのに温泉があるなんてめずらしいねー」

さいほの「なんかいつも露天風呂入ってるからあんま楽しみじゃないな……」

苑子「そうかい！？私はワクワクすっぞ！」

なつじ「うざい」

苑子「ひどい……」

ほのか「お、なんか棚に浴衣が入ってたよー！！」

さいほの「和風と洋風が見事にコラボってるホテルだな」

苑子「じゃあご飯は中華かな！？」

なつじ「どうでもいいだろ、そんなん」

私達はこなくなっただらない話をしながら部屋を出た。
そして隣の部屋のドアをノックした

ほのか「おーい、温泉行こー！」

『ぬわあああ！！やめるんだぞおお！！』

さいほの「……………何が起きてるんだ中で」

なつじ「！！！！まさかあいつらが来たんじゃない！？」

苑子「マジでか！？よくここだってわかったな！！」

ほのか「と、とにかく助けなきゃ！！」

私達はドアを開けて中に入る

さいほの「お、おい！！大丈夫……………か……………」

中に入った途端、私達はその場に立ち尽くした

部屋に充満した何とも言えない臭い、そして部屋の隅っこでいがみ合うアメリカとイギリス

イギリスは黒い物体を手に持っている

アメリカ「だあかあらあ！！君の料理なんて死んでもいらないんだぞおお！！！」

イギリス「な……………！お前がお腹空いたってうるさいからあげてやるんだろうが！！！」

アメリカ「お腹は空いたとは言ったけど君の料理が食べたいなんて一言も言っていないんだぞ！！！ていうか死んでも言わないんだぞ！！！」

イギリス「てめ……………！！！」

なつじ「なにやってんだてめえらは」

なつじが二人にチョップする

アメリカ「お腹が空いた、って言ったらイギリスが勝手に料理を差し出して来たんだぞ!!」

イギリス「腹が減ってるなら食べんだろ!!」

フランス「餓死寸前でも食べれないね、お兄さんは」

苑子「私もだなー」

イギリス「てめえら……」

さいほの「はいはいそこまでー」

イギリスがキレル五秒前のところでさいほのが手を叩いてイギリスの前に立った

さいほの「ふんっ!!!!」

そしてイギリスの腹を思いきり殴った。

イギリスは白目を向いてそのまま床に倒れた。

お、オーマイガー……

さいほの「ほれ、行くぞ。早く入りたい」

さいほのはぐったりしたイギリスをドイツに渡し部屋をでた

か、かつこいい……………!!のかな?

ほのか「うはあああ!!でかあああ!!」

温泉はすんごく大きかった。たぶん百人は余裕でいけるんじゃないか!?

苑子「ダーーーーイブ!!」

なつじ「すんな」

なつじは走って温泉に飛び込もうとした苑子の足を自分の足にかけて転ばせた

苑子「ぬじっ!!」

苑子、頭から落下
痛そ……………

なつじ「まずはかけ湯だバカ」

さいほの「だからって普通ここまでするか？見てごらん、綺麗な床が赤い液体で汚れていくよ」

うわ！苑子出血しとるやん！！！どんだけ出血すんだコイツ！いつか大量出血で死ぬんじゃない？

なつじ「あ、すみません。ホテルの人。」

ホテルの人かよ

苑子「う、うう……」

ほのか「大丈夫？」

苑子「うん！大丈夫っ！」

そつ言う苑子は頭と鼻から大量に血を流している

全然大丈夫じゃないように見えるのは私だけだろうか

かけ湯をして私達は湯舟につかる

ほのか「ううううっ！！日焼けがヒリヒリするうう！！」

苑子「ほんとやね」

なつじ「苑子、日焼けしたん？」

元々苑子は肌が黒いからあんま焼けたようには見えない

苑子「焼けたでー？ほら水着の後がくつきり」

さいほの「ホントだwって私もだ」

なつじ「うわ、私も」

ほのか「私もだ！」

みんな日焼けした体にくつきりと水着のあとがついている

おかしくて私達は声をそろえて笑った

あいつらに監視されていることに気付かずに……

その23 温泉は泳ぐところじゃありません（後書き）

夏休み編は遅くても10月後半には終わらせたいです……

まあ私の中では夏休みはずっと続く……

なつじ「しつこい」

さーせん

感想等、お願いします！

質問とかあったらどんどん聞いてください！

その24 浴衣DEトーク (前書き)

じじいだ

立派なじじいだ

b yさいほの、苑子

最近肌寒くなってきましたね…………

風邪をひかないよう気をつけてください

その24 浴衣DEトーク

さいほの「ふー、さっぱりしたあ……」

さいほのは濡れた髪をタオルでふきながら浴衣の袖に腕を通した

さいほの「……………そういえば浴衣ってどうやって着るんだ?」

苑子「さあ?」

苑子がまぬけな顔で答える

なつじ「私もあんまわかんないな……」

ふっふっふ……

ほのか「ここはほのか様にお任せヨー!」

なつじ「誰も頼んでないけどな」

なつじの毒舌が心にグサツときたけど、そんなことこの際気にしない

(と言いながらも涙が出ちゃうのはなぜだろう)

苑子「黒須よく旅行とか行くもんねー」

ほのか「うむ!だから浴衣着るのは(たぶん)慣れてるよ!」

さいほの「おお！よろしくお願いします黒須先生！！」

せ、先生……………！！

なんていい響き……………

よおし、私にどんどん聞きなさい！

なつじ「体重いくつですか先生」

ほのか「ぶつ殺すぞ」

それは聞くな

ほのか「まずこうしてこうしてこうすんだよ！」

さいほの「先生、何がどうなのかさっぱりわかりません」

ほのか「作者が浴衣の着方を詳しく知らないから仕方ないんだよ齊藤くん」

さいほの「そうなんですか先生」

ほのか「大人の事情なんだよ齊藤くん」

苑子「まだ作者は中学生のガキですよ先生」

ほのか「ノリだよ藪崎くん」

なつじ「もうやめろそのやりとり。うつすぞ」

ちっ、なんか今日のなつじノリ悪いーな

苑子「でもさすが黒須！浴衣着れたよ！」

さいほの「こんな黒須にも頼れる所があるんだな」

そ、そんなに頼れないのか私は……

なつじ「おおー」

ほのか「さ、行こうかー」

私達は女子風呂から出て置いてあったマッサージチェアに座りイタ
リア達が出てくるのを待った

さいほの「ああー、そこそこ。気持ちいいー……」

さいほのは思いつきり和んでいる

なつじ「肩こってたんだよなあ……」

苑子「ぐおー……」

苑子はいつの間にか口を開けて爆睡していた。
やめて恥ずかしいから

私はなるべく苑子とは他人のふりをしたが周りの冷たい視線は苑子
だけじゃなく私にもふりかかる

苑子あとで覚えてろよ……！！

さいほの「つかあいつら遅いな。海の時もそうだったがこういう時に女より男の方が遅いとはどういうことだ？」

なつじ「またフランスが覗こうとしてんじゃない？」

ほのか「それはないでしょw」

ドイツ「その通りだ」

なつじ「冗談だったのに本当だったとはアンビリバーボー」

男湯からぞろぞろと男が出て来た
一名ボロボロだったが

さいほの「覗こうとしただけでなんでそうなるんだ」

アメリカ「そう言うのは聞いちゃいけないお約束なんだぞ!!」

アメリカがH A H A H A と笑う

しかし今気付いたけどみんな浴衣似合ってるなあ……

日本はもちろん外国の人とかが着ても似合っんだな浴衣って
まさにオールマイティアイテム！

って何言ってるんだ私は

日本「まあ夕食の時間まで部屋でお話でもしましょうか」

こういつ時って日本がいてくれて本気で助かる

んで部屋。
(男の方の)

せつかくこういう時なんだし聞けるもんは聞いとかないと!!

と、いうことでえー……

ほのか「質問コーナー!!」

苑子「いえーい!!」

よかった、苑子のつてくれた

安心するな苑子いると

なつじ「またくだらない……」

ほか「くだらないよ!!さてさて 県の さんからの質問!」

さいほの「募集とかしてねーだろ」

ほか「まーまー、成り行きだよ成り行き。それよりこのコーナーは今まで疑問に思っていたことを質問しちゃえ っていうごくありきたりなコーナーだよ!」

イギリス「まんまだな」

ほか「つーことで質問っ!」

中国「言った張本人からあるか……」

ほか「日本って爺って言われてるけど何歳なの!？」

なつじ「黒須にしては普通の質問……。私も気になった」

日本「そうですね……」

日本が顎に手を当てて考える

日本「忘れてしまいました……」

さいほの「じじいだ」

苑子「立派なじじいだ」

イタリア「に、日本……おじいちゃんみたいだよ……」

日本「だからもう爺さんですって」

さいほの「あ、次は私が質問していいか？」

ほのか「なにになにー？」

さいほの「なんでイギリスの料理はまゝ……」

ほのか「それ以上言うなあああああー！」

私はとつさにさいほのの口をふさぐ

イギリス「ん？なんだ？」

ほのか「いやいやいやなんでもない！！気にしないで！」

さいほの「んー！んー！」

もがくさいほのをおさえつけて笑顔でイギリスを見る

イギリス「そ、そうか……」

よかった、感づかれなかった……

私はさいほのを解放して安心する

さいほの「で、なんでイギリスの料……」

ほのか「だあああああー！！！」

もうキリがないからさいほのは気絶させちゃいました

イギリス「な、なんなんだよ……………」

苑子「なんでもないよ！さいほの、イギリスの料理食べたらしいからあとでさいほのだけに食べさせてあげてね！いい？さいほのだからね！！」

イギリス「え、あ、ああ……………」

まあ、完全に失神しちゃってるさいほのはおいといて

ほのか「はい次のしつもん！誰かいなーい？」

フランス「はいはい！お兄さんが……………」

ほのか「はい、ほかー」

フランス「え！？なんで！？」

なつじ「お前が質問することは大体想像できんだよ変態」

フランス「ち、違う違う！お兄さんちゃんとした質問するから！」

苑子「ちつ、仕方ねーなあ。言わせてやるよ」

なつじ「おお、いきなりブラック苑子」

フランス「ほいきた！！ずばり！君達四人のスリーサイズ……………」

ほ・な・そ「死ね」

この後、フランスがどうなったかは言うまでもない

さいほの「う、うん……………？あれ？」

ロシア「あ、さいほのちゃん。おはよう」

さいほの「お、おはよう。って……………何があっただフランス」

さいほのが起きてまず目についたのはボロボロになったフランスだった

ドイツ「……………まあ自業自得だな……………」

さいほの「ホント何があっただ……………」

ほのか「私は女の敵を退治しただけだよ」

苑子「ペッツ！……！」

さいほの「そ、そうか……………」

ほのか「はいほかに質問ある人っ！」

ロシア「じゃあ僕いい？」

なつじ「ロシアか、なんか珍しいね」

ロシア「えっと……菜摘ちゃんって妹いるよね？」

なつじ「え？うん、いるよ」

ロシア「妹が自分の言うことを聞かない時ってどうしたらいいのかな……」

なつじ「え、そうだなー……殴る？」

苑子「姉とはあるまじき答えだな」

ロシア「そ、そっか……今度やってみるよ……」

ほのか「いや、やんなくていいから」

ベラルーシのことでホントに困ってたんだな……
大変だなあ……

イタリア「うう……ドイツお腹すいたよ……」

イタリアはお腹をおさえている

ドイツ「もうこんな時間か」

時計は7時をさしていた

日本「夕食の時間ですね。行きましょうか」

苑子「いやっほう!!!中華、中華!」

さいほの「だから中華と決まったわけじゃないってば」

中国「中華料理なら我が国が1番あるよ!」

ああもう中華料理の話に……………

つか私、中華料理苦手なんだけど……

まあとにかく夕食、夕食ー

私達は部屋から出て食事の会場に向かった

その24 浴衣DEトーク (後書き)

感想お願いします！

その25 食事は計画的に（前書き）

ごっそーさん！！

b y 苑子

今回は普段目立たないさいほのが語り&メイン（？）な話

そしてさいほのが萌えに目覚めてしまいますw

その25 食事は計画的に

私達はエレベーターに乗り3階にある食事の会場に向かった

さつきからほとんどの人がテンション高すぎてついていけない

薮崎は中華中華うるさいし……

だから中華じゃないかもしれねえだろーが

いろいろな事を考えていると食事の会場についた

会場についたとたん薮崎を含むほとんどの人達のテンションはMAXになった……

苑子「いやっほーいーい！！中華中華ああああ！！」

ほか「肉ううううっ！」

イタリア「パスタアアアアア！！」

アメリカ「ハンバーガーー！！」

中国「ただ飯食い放題あるううううっ！！」

やめる叫ぶな恥ずかしすぎるし周りの人の視線が痛い

残った私達は入口付近にいる人に自分達の人数を言い席を案内してもらった

（12人って言ったらかなりびっくりされたが）

どうやら夕食はバイキングらしい。席につくと様々な食べ物のいい匂いがただよってきて食欲をそそる

日本にさっき走っていった奴らを捕まえて来てもらいとりあえず全員を席に座らせる

私は一息ついて話しはじめた

さいほの「いいか？このホテルは私達だけじゃなくほかの人も宿泊してんの。だからはしゃぐのはわかるけどほかの人の迷惑になることは絶対にやらないこと、わかった？」

さつきまで思いつきりほかの人に迷惑をかけていた奴らははい、と小さく言った

さいほの「うん、じゃあ行ってよし」

一部「いやっほーい！！！」

おいコラ人の話聞いてたのか

私は話が終わった途端突っ走って行った奴らを捕まえ、また説教したさすがにわかったらしく次は静かに食べ物を取りに行った

なんで私が疲れなきゃいかなのだ……

おぼんと皿を取り食べたい物を食べきれる量皿に乗せて席に戻った私が席についた時にはすでにドイツとイタリアとロシアは席に座っていた

って……

さいほの「イタリア、パスタだけかよ!!」

イタリア「え!?だ、だって……」

さいほの「だってじゃない!ほかの物も取ってきなさい!できれば野菜!」

イタリア「は、はいいい……」

イタリアは渋々皿を片手に席を立てサラダコーナーに向かった

ロシア「お母さんみたいだね」

ロシアがニコニコして私を見る

さいほの「当たり前のことだよ。ああ疲れた……」

ドイツ「でも助かるな、ありがとう」

さいほの「そっか、いつも苦労してんのはドイツだもんな」

ドイツ「まあな……」

ドイツと話をしていると次々とみんなが戻ってきた

みんなが持ってきた料理を見るとイタリアのようにみんな栄養バランスが崩れまくっている

言いたいことはたくさんあるのだが今は疲れたしせつかくの旅行だ。

こんなことで嫌な思いはさせたくないから見て見ぬふりをしよう

全「いただきますーす」

みんな食べ物をつまんで食べはじめる

食べてるときだけ静かだな……

イタリアはやはりかわいそうなので特別にパスタだけ食べてもいいことを許可した

笑顔でパスタを頬張っている姿がなんとも微笑ましい

って何考えてるんだ私！

私は二次元などには興味はないはずだ！何ちよつとオタク的な目でイタリア見てんだ私！！

これじゃ黒須達と同類じゃねえかああああ！！

ほのか「ん？どしたのさいほの」

さいほの「な、なんでもない」

言えない、ちよつとだけイタリアに萌えてしまっていたなんてええ……

齊藤ほのか、一生の不覚……！！

苑子「ごっそーさん！！」

なつじ「早っ！！あんないつぱいあったのに……」

アメリカ「ごちそうさまなんだぞ！」

イギリス「お前も早いな……………」

苑子とアメリカはもう食べ終わってデザートを取りに行った

しかし……………」

さいほの「イギリス、お前料理まずいわりにはちゃんとした物食べ……………」

ほのか「わーわーわーわあああああ！！」

私のイギリスへの言葉は黒須によって遮られる

さいほの「なんだよ黒須、私は……………」

ほのか「ほのかチョップ！！」

さいほの「いだっ！！」

黒須の必殺技『ほのかチョップ』が私の頭にヒットする。
当たった所がハンパなく痛い、それがほのかチョップだ。

黒須を睨むと、黒須は私に小声で話しかけてきた

ほのか「いい！？イギリスは料理がまずいことがコンプレックスなんだからあんまりつつこんじゃダメなの！！わかった！？」

さいほの「あ、うん……………」

イギリス「なんだ？」

さいほの「いや、なんでもない」

イギリスは気にしない様子で食事を再開した
私と黒須も食べ物を口に運ぶ

しばらくして全員食べ終わり食事の会場を出た

苑子「はああ……お腹いっぱい」

なつじ「ご飯を三杯おかわりし、デザートにアイス在五個も食べり
や腹いっぱいにもなんだろ。普通」

ほのか「苑子食べ過ぎ……」

こついう黒須もアイスを七個たいらげている。
お前も例外じゃねーからな？

アメリカ「それよりさ、ゲーセン行かないかい!？」

アメリカがテンション高めで提案する

中国「ゲーセン？」

日本「なるほど……いいですね、ホテルにはゲーセンは定番です
からね」

フランス「ゲーセンは、っと………3階にあるみたいだな」

フランスが壁に設置してある物を見て言う

アメリカ「よし、じゃあ行くんだぞー!!」

アメリカは走り出した

イギリス「おいゲーセンならこっちだぞ」

アメリカ「……………」

しかしアメリカが進んだ方向はゲーセンとはまったく逆の方向。
やっぱこいつはバカだ

その25 食事は計画的に（後書き）

感想とかお願いします！

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（前書き）

お前らチビって言いたいだけだろ！！

b yチビ……じゃなくなてなっじ

すいません、結構間があいてしまいました；

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ

私達はゲーセンに向かっていた

ほのか「つかお金あんの？」

日本「そこは気にしない決まりです……」

気にしちゃダメなのか……

やがてゲーセンに到着してアメリカはかなり興奮している

アメリカ「すごいんだぞー！日本のゲーセン！」

フランス「来たことないのか？」

アメリカ「ゲーセン来ること自体が始めてなんだぞー！」

さいほの「そうなの！？」

アメリカ「とりあえず遊びまくるんだぞー！」

アメリカはゲーセンの中を歩きまくり嬉しそうにゲーム機を見ている

子供^{ガキ}か。

アメリカ「日本ー！これ壊れてるんだぞー！」

日本「え？」

アメリカに呼ばれて私達はアメリカのもとに行く

アメリカはクレイゲームのボタンを押しながら不安そうに日本に訴えた

アメリカ「ボタンを押してもうんともすんとも言わないんだよ……」

日本「あー……アメリカさん。ゲームセンターのゲーム機はすべてお金を入れないと動かないんですよ……」

アメリカ「な、なんだいそれ！？なんでゲームやるだけなのにお金を払わないといけないんだい！？」

苑子「あ、それ私も思う！！」

なつじ「同情するところじゃねーだろ」

なつじがハリセンでアメリカと苑子を叩く

ってハリセン！？どっから出てきた！

苑子「いたい……なんで！？なつじもそう思うでしょ！？」

なつじ「そういう決まりなんだから仕方ないっしょ。黙ってお金投入しろ」

苑子「なんで私！？」

ほか「一回くらいいいじゃん！アメリカにやらせてあげよ？」

苑子「うー」

苑子は渋々財布から100円玉を取りだしクレイゲームに入れる

アメリカ「……………」

さいほの「いーか？欲しいものをボタンを押して取るの、やってみ？」

さいほのに言われた通りにアメリカはボタンを押してクマのぬいぐるみを狙う

しかし初めてなのでクマのぬいぐるみを掴んだはいいがすぐ落ちてしまう

アメリカ「あ、落ちちゃったんだぞ」

さいほの「あー、残念だな。終わりだ」

アメリカ「え！？終わり！？全然楽しめてないんだぞ！？」

中国「そういうゲームある」

アメリカ「なんだいなんだい！！ぼったくりじゃないか！！ぼったくりだああ！」

アメリカはクレイゲームの透明なガラスを叩いたりするもんだか

らイギリスは急いでアメリカを止める

ほのか「こういうのだから取れたとき嬉しいんだよ」

苑子「こんなことで騒ぐなんて子供^{ガキ}だねw」

アメリカ「なんだとおっ!？」

ドイツ「落ち着けアメリカ」

苑子「こういうのはコツがあるんだよ、っと……………」

苑子はまた財布から100円を取りだし入れた

そしてボタンを押す

苑子「こうやってえぐりこむように……………うつべし!うつべし!」

なつじ「ボクシングか」

こうふざけているように見えてもちゃんとぬいぐるみをがっちりとキャッチしている

アメリカ「おお……………」

日本「上手ですね、苑子さん」

苑子「いやあ……………」

ぬいぐるみはそのまま上に持ち上げられ出口へと移動していく

フランス「おお！いけるんじゃないか！？」

そして出口の真上にたどりつきぬいぐるみはゆっくりと落下していき取りだし口に……………

いけなかった。

ぬいぐるみは出口の近くにあった人形の山につっかかり落ちてこなかった

……………

苑子「返せええええええ！！私の幸せと時間と200円を全て返せええええええ！！」

さいほの「お前は子供^{ガキ}すぎるよ！！」

我を忘れクレーンゲーム機を叩きまくったり蹴りまくったりする苑子をなつじと中国がなんとかおさえる

なつじ「落ち着いて苑子！あとでアイスおごってあげるから！！つていうのは嘘だから！」

中国「何が言いたいあるか……………」

苑子はようやく落ち着いてきた

イタリア「???何あれ?」

イタリアがそう言っ指差したのは誰もが知っているゲーセンに必ずあるゲーム機、太鼓の人だ。

日本「ああ、これはリズムに合わせて太鼓を叩くゲームですよ。このバチで太鼓を叩くんですよ」

イタリアに説明しながらバチを持たせる日本。

ほのか「よしっ！イタリアやろっ!」

イタリア「イエッサーー!!」

私は100円を入れて準備満タンド

さいほの「……………イタリアの分も出してやれよ」

ほのか「うっさいなあっ！出すよ!」

言われなくても出すっつの

私はもう一枚100円を取りだし入れた

ゲームが始まり陽気な音楽が流れる

ほのか「イタリアは何の曲がいい？」

イタリア「俺は何でもいいよー」

ほのか「じゃあ私が決めるね、えーと……………」

苑子「あ、黒須が好きな『凜として咲く花の如く』があるよー!」

な、なんだとお!!？

ほのか「よしやるぞイタリアああ!」

イタリア「え、え!？」

私、この曲大好きなんだよおおっ!!

おっしやあああ!!

本気出すぞおおっ!!

そしてなんだかんだで終了。

イタリア「ヴェー……………難しいね……………」

さいほの「覚えれば簡単だよ、もう一曲できるからやってみ?」

ほのか「なつじ、やる?」

なつじ「なんで私?」

ほか「え、だって部活でパーカッションやってたから得意かな？
って……」

なつじ「そんな理由かいな」

私はなつじにバチを渡す

なつじ「なんの曲がいい？」

さいほの「ミスル！」

なつじ「お前には聞いてねーよ」

イタリア「なるべくゆっくりで簡単な曲がいいな」

ロシア「さっきの早いし難しかったよねー」

ほか「うん、私間違えまくった」

さすが撫子ロック

なつじ「じゃあこれね」

そう言ってなつじが選んだのは早くてめちゃくちゃ難しそうな曲

全員『こいつドSだ……』

全員がそう思った

中国「イタリア、とりあえず落ち着いて頑張るある！」

イタリア「う、うん！」

曲が始まってゲームが始まる

予想通り曲がめちゃくちゃ早いからめっさ難しかった

なつじは無表情でそれを叩く

イタリアは最初の方は叩ける所はがんばっていたがだんだんついていけなくなり半泣きになる

イタリア「うわああ！できないよおお！」

ドイツ「泣くな！がんばれ！」

苑子「つかなつじうまつ！！チビなのに！」

ほのか「ホントだ！チビなのに！」

さいほの「さすがパーカッション！！チビなのに！」

なつじ「お前らチビって言いたいだけだろ！」

すげえ叩きながらつつこんだ、神だ

結局イタリアは何もできずに、なつじは一回も間違えずに曲が終わった

なつじのあの勝ち誇ったような顔がムカつくのは私だけだろうか

イタリア「ドイツー難しいよー」

イタリアは泣きながらドイツのもとに行く

ドイツ「泣くな……… たかがゲームだろう」

さいほの「そのたかがゲームで素人に勝って喜んでる奴がここにいるがな」

なつじ「んなつー!」

苑子「おとなげないよー」

なつじ「大人じゃないもーん」

そういう問題じゃねーだろ

中国「どうするあるか? もう一曲できるらしいあるよ」

ほのか「いいよー、やりたい人やってもー」

アメリカ「じゃ俺が……」

さいほの「お前破壊しそうだからダメ」

イギリス「じゃあ俺がやってやる」

苑子「イギリスが太鼓……… 似合わないww」

イギリス「うるせえ黙れ」

さいほの「あと一人は？」

フランス「お兄さんやっていい？」

なつじ「フランスも似合わねえww」

イギリス「ふっ、お前が相手か。絶対負けねえからな」

フランス「お兄さんも久々に本気出しちゃおうかな」

イギリスとフランスの間に火花が散る

そんな火花散らすようなゲームじゃないんだけど……

曲が始まった途端、おりやああああ！！と二人が叫び声をあげ太鼓を叩く

恥ずかしくないのかな、大人として

つか二人ともやる気あるくせに全然叩けてないし
なんてくだらない争いなんだ

見てらんないから二人を置いて私達は別のゲーム機を見る

苑子「あ、お菓子とるゲームだ。懐かしいなあ」

ほのか「昔よくやったわあ。私結構得意なんだよ？」

ロシア「面白そうだね、やってみていい？」

さいほの「いいけどこれもさっきのクレーンゲームみたいにぼったくられるケースもあるよ?」

ロシア「僕はそんなこと気にしないからいいよ?子供じゃないしね」

今の言葉、きつとアメリカと苑子の心に深く突き刺さっただろう

さいほのから100円を受け取りゲームを始めるロシア。

ほのか「ロシアこれ初めてなの?」

ロシア「うん、ロシアにはこんなのないし」

初めてのわりにはロシアはたくさんお菓子をとった

日本「上手ですねロシアさん」

ロシア「いいねこのゲーム。楽しいしお菓子も取れるし」

ロシアはご機嫌だ

よかった、コルコル言わないで

あと勝負を終えたイギリスとフランスが帰ってきた

苑子「おかえりー、どーだった?」

イギリス「同点だった」

ほのか「ど、同点?!?!?」

あのゲームで同点って難しくね!?

ほのか「ど、どんだけ仲良いんだ……………」

フランス「絶対お兄さんの方が叩けてたって……………」

なつじ「大人が必死になることじゃないでしょう」

なつじが呆れ顔で肩をすくめる。

中国「……………」

私は中国の様子がおかしいことに気付いた
辺りをキョロキョロと見渡している

ほのか「中国、どうしたの?」

中国「い、いや……………」

中国は一回黙ってしまったがやがて決意したように私に話しはじめた

中国「おかしいある……………」

ほのか「おかしい?」

私と中国の様子に気付いたのかさいほの達も騒ぐのをやめ、黙る

中国「いや……………気のせいかもしれないねえあるが……………さっきまでいた人が
いつの間にかいなくなってる……………」

中国に言われて初めて気付く。

確かにさっきまで私達以外にもたくさん人がいて賑やかだった（私達だけで十分賑やかだが）のには私達しかいなくてゲーム機の音が室内に響いていた

さいほの「もう遅いからじゃないか？」

日本「いえ……まだそれほど遅い時間帯ではないですし……」

じゃあなんで？

ま、まさか……

「久しぶり……いや、さっきぶりか？」

全員「！！！！」

突然聞こえた声に全員が反応する

ゲーム機の音でうるさいのにその声だけははっきり聞こえた

なつじ「ま、またあいつら……」

「またとは失礼ね、私達だって好きであなたたちをつけてるんじゃないわ」

また声が聞こえる

私達はなるべく固まってどこからあいつらが来てもいいように警戒する

「さつきはよく生きてられたな、生命力はゴキブリ並か？」

苑子「ゴキブリじゃないもん!!」

なつじ「反応するところこ!？」

「でも今度はゴキブリ並の生命力を持つあなたたちでもダメね」

突然、周りの景色が歪んだ

ゲームセンターから景色は変わり、私達は遊園地のような所にいた

さいほの「ここは……………」

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

空にはキリハとキリカが浮かんでいて私達を見下ろしながら怪しく笑っていた

その26 ゲーセンではしゃぐのは子供だけ（後書き）

次回から本題に入るかも……

つか今10月やん……

秋やん、寒いやん……

その27 変態には気をつける!?(前書き)

何?思いやりって

知らね

b y 苑子、さいほの

なんとか投稿できた……

その27 変態には気をつける!?

「「ようこそ、楽しい楽しいワンダーランドへ」」

二人が声をそろえて言った。

なつじ「かつこつけてんじゃねえよ、うぜえ」

そんな二人になつじの毒舌がふりかかる

ずっと冷静にいた二人もなつじの毒舌には流石に傷ついたらしい

「な、そんなこといわなくてもいいじゃん!! せつかくラスボスみたいに演じたのに……………」

ほのか「うるせえよ下っ端」

「下っ端だからこそこんな時くらいラスボスみたいにさせてくんない!!? 思いやりって言葉知ってる!?!」

苑子「何? 思いやりって」

さいほの「知

らね」

「とことんム力つくやつら

だなお前ら!!」

中国「ていう

かなんでこんな所に呼んだあるか。下っ端」

「強調して言うなああああつ!!」

「落ち着きなさいキリハ」

うん、あれだな。キリハはガキだ

なつじ「で、なんで私達を呼んだの」

「よく聞いてくれたわね」

苑子「いや別に聞きたくて聞いたわけじゃねえし。何その待ってました！って顔。バレバレだかんね」

苑子の言葉にキリカはピキツときたが いい加減もたししているとダメなので我慢して話を続ける

「私とキリハはあなたたちの状況を監視させていただいたわ」

ドイツ「監視？」

「そ、あなたたちがあのホテルに入ってからずっとね」

ほのか「うわこの人達監視してたらしいわよ、やあねえ（小声）」

さいほの「警察に通報した方がいいかしら。ほんと最近の若者は怖いわねえ、何するかわからないわ（小声）」

ヒソヒソ

「聞こえてんだよムカつくからやめろ！！」

フランス「いやほんとこれ犯罪だよ？自首すれば罪は軽くなるよ？」

「うるせえよ黙ってる！！」

なつじ「ん？ちょっと待って……………ずっと監視してた、ってことは……………」

「？」

なつじ「お風呂入ってたときも監視してたってこと？」

.....

「は、はは.....」

「まあ、女子風呂を.....少し.....」

二人は笑う

しかし

ほ・さ・な・そ「ぎゃあああああ！！変態いいいい！！！！」

私達女は笑える話じゃなかった

地面に落ちてる石を二人に投げまくる。投げて投げて投げまくる。
ひたすら投げまくる

「ちょ、痛っ！やめ、いたたた！！」

「大丈夫！！キリカ（一応男）は見えてないから！！いたたた！」

さいほの「そういう問題じゃねーんだよクソアマああああ！！」

ほのか「どうせ鼻血たらして微笑みながら見てたんだろおお！！」

「私にそんな趣味などないわケええええ！！つかお前らタオル巻いてたろうが！！タオル巻いたまま入浴するなって注意書きに書いてあったのに平気な顔して巻いてたろうが！！」

苑子「あほおおおお！！実はタオルの下には水着も装着してたんだよおおおお！！」

「知らねーよなら別にいいだろうが！！」

ほ・さ・な・そ「いいわけねーだろばかあああああ！！！！」

なつじ「最低野郎めが死ねええええ！！」

もうどつちが悪なんだかわかんなくなってきたわ

「ていうかキリカ、なんで女湯なんだ？別に男湯でもよかったんじゃないか？だったらこんなにごちゃごちゃ言われなかったのに……」

「……………それもそうだな。そしたらキリハも監視できたし」

ロシア「その前に入浴を監視することがどうかと思うんだけど」

フランス「変態め！！」

イギリス「お前が言うなよ」

「ああもう！いちいちうるさい野郎共だな！！とにかくっ！」

キリカは私達にビシッと指差す

苑子「ああー、人に指差しちゃいけないんだよー」

「うるせえ!」

キリハが苑子を怒鳴り睨む

苑子も睨み返す。負けず嫌いめ、でもしかしやっぱり変顔にしか見えない

「お前らに……」

キリハはゆつくりと口を開く

「決闘を申し込む」

その27 変態には気をつける！？（後書き）

本題入る言ったくせに入ってねーじゃねえかあ！！

つーわけで軽ーく次回予告の巻

決闘を申し込んだキリカとキリハ。

その決闘の内容とは……………！？

ほのか達は決闘を受けるのか！？
そして彼女達の運命は！？

その28 決闘（前書き）

お前らが死ぬこと確定だな

by なつじ

今回シリアスだと私は思う。

その28 決闘

なつじ「決闘……………?」

苑子「それってどういう」

「そのままの意味だ」

キリカがぴしゃりと言う

「私達にはお前らを殺せと命を受けている。だからそれには従わなければならない」

さいほの「何回も失敗してるけどな」

「誰のせいだと思ってんだ」

「しかしいつまでたっても命令に従えてないためボスはお怒りになっている」

ほのか「ボスいたんだ!」

初耳!!

イギリス「単独で世界征服なんかたくらむ馬鹿がどこにいたよ」

苑子「プーちゃん（プロイセン）ならやりかねない」

全員「ああ……………」

納得すんなー！！byプロイセン

ん？いまだここからプロイセンの声が……………

気のせいか

アメリカ「決闘ってどんなのだい！？」

「かくれんぼよ」

さいほの「……………は？」

「かくれんぼよ」

ほのか「いや二回言わなくていいから」

日本「かくれんぼとは……………あの有名な遊びのことですか？」

「その通り。ルールもほとんどは同じ」

「鬼はあなたたち全員。隠れるのは私とキリハよ」

ロシア「範囲はこの遊園地全域、ってこと？」

「そうだよ」

キリハとキリカが笑う。いつもより自信があるようだ。ちょっとムカつく

キリハとキリカは私達の前まで来た。今気付いたけどキリカとキリハの顔、そこそこ整ってんなチクシヨウ

「ほとんどは遊びのかくれんぼと同じ。でも違うのはルール」

イタリア「え？さっきルールも同じって……………」

「全部とは言ってないわ、一部だけよ。今から説明するわね」

キリカがどこからかホワイトボードを持ってきてペンのふたをとりいろいろ書きはじめた

「私とキリハ隠れる側はこの遊園地全域を使い隠れることができる。でも隠れる側は隠れる場所を変えることができる」

なつじ「え、なんかずるくね？」

「別にいいだろ。鬼はお前達12人、隠れる側は俺とキリカ2人だけなんだぞ？こんくらいの手ンデいいだろっ」

中国「んー、まあいいある。説明を続けるよろし」

中国は近くのベンチに座り腕くみをしている。えらそうだな。

その隣で日本がお茶をすすってほっこりしている。爺みたいだな。あ、爺か

「隠れる側は見つかっても終わりじゃない。自分を見つけた鬼を倒せばセーフとする」

ドイツ「倒す……！？それはつまり……！」

「殺す、ってことだ」

さいほの「やっぱりお前らの目的はそれが」

「そうよ、私達はおくれんぼで遊ぶことが目的じゃない。あなたたち全員を殺すことよ」

物騒だな……

「そして隠れる側は鬼を途中で殺してもよし」
……は？

ほのか「それって……自分が見つけられなくても鬼を殺してもいい……ってこと？」

「そうだ、言っただろ。俺達は遊ぶのが目的じゃない。これは殺し合いなんだ」

じゃあかくれんぼの意味なくね？

「制限時間は2時間。それまでに私とキリハを見つけられなかったらあなたたちの負け。逆に私とキリハを見つけれたら私達の負け」

フランス「………負けた方は？」

キリ力はためらいもなくその言葉を告げた

「死ぬ」

私は息をのむ。

あいつらが私達を殺さなければならぬのは前からわかっている。しかしそのボスの命令とやらのせいで自分が死ぬのはいいのかな、怖くないのかな。私は絶対やだな。

あと苑子が前にキリ八達に聞いた言葉

「ホントはこんなことしたくないんじゃない？」

あの言葉を聞いた途端二人は戸惑っていた。

じゃあこれだつて……………

自分達がやりたくてやってるわけじゃないはずだ

「じゃあ始めるぞ」

キリ力が静かに言う

私は思い切つてさっきまで思ってたことを聞いてみることにした

ほのか「ねえ……………」

なつじ「ボスの命令なのはわかるけど、それで二人が死ぬのっておかしくない？」

今まさに言おうとしたことをなつじに言われた。
こ、心読まれた……！？

なつじ「怖くないの？」
わあまるで私の語りがまるまる聞こえてたみたいに私の思ったことをすらすらと……

「怖くなど、ない」

キリカは聞かれて少々戸惑ったが落ち着いて答えた

「任務を成功できないということはボスの命令に従えないと同等のこと。つまりこのゲームに俺達が負けた際には罰を受けるのだ。それは当たり前のことだ」

キリハは表情変えずに言う

なつじ「へえ、そっか。じゃあ……」

なつじは二人を睨む

なつじ「お前らが死ぬこと確定だな」

そして突き放すように言った。

私達は信じられない顔でなつじを見た。

だってあのチビで毒舌でドSでアホななつじがこんなにカッコイイ
こと言ってるのだ。

明日は雪降んじゃねえか？

なつじ「ほのか後で殺すからな」

聞こえてたらしい

「ふ、いい度胸だ。では始めよう」

キリカが指をパチンと鳴らした

その瞬間キリハとキリカの後ろにブラックホールのような穴が現れた。

「今から30分後にゲームスタートだ。それまでに作戦でもたてて
おけ馬鹿共」

苑子「んだとゴラァッ！！」

苑子を無視して二人はブラックホールのようなものの中に消えていき、ブラックホールのようなものも消えた

その28 決闘（後書き）

後書き書くことないんでこれからはキャラ達に反省会でもやらせようかと思っています

* * * * *

さいほの「率直に言おう。なつじと黒須、シリアス似合わないすぎ」

ほ・な「ホントに率直だなオイ」

苑子「うん、似合わない」

なつじ「お前に言われたくねーよ」

さいほの「いや、なんか藪崎シリアス以外と似合ってるから問題ナツシング」

ほのか「ありすぎだよ！なんで苑子似合っちゃうんだよ！」

苑子「ふふ、それは私が天才だk……………」

強制終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0341t/>

friend and world!!

2011年10月14日06時55分発行